令和五年二月（第一四六号）

創立一〇〇周年記念号

会報

一般財団法人 本多流生弓会

弓稽古の人毎日の掟

一、毎日矢數二十射の事

一、毎日素引の事

一、當日障あらば不足翌日に致可事

一、一立に矢數四本付つくばゐ二本の事

一、百手一手の事

八十翁

本多生弓斎書

剛 健 典 雅

流祖　本多利實翁（ほんだとしざね）

（華族会館にて　明治 37(1904)年頃　満 68 歳頃）

二世　本多利時（ほんだとしとき）

（洗心洞道場開き　昭和 8(1933)年 1 月 3 日）

宗家顧問・師範　高木棐（たかぎたすく）

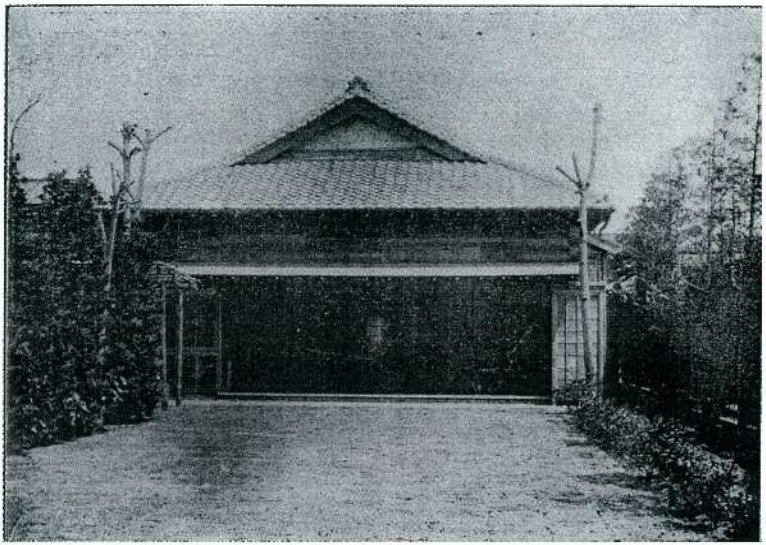
（洗心洞道場開き　昭和 8(1993)年 1 月 3 日）

三世　本多利生（ほんだとしなり）

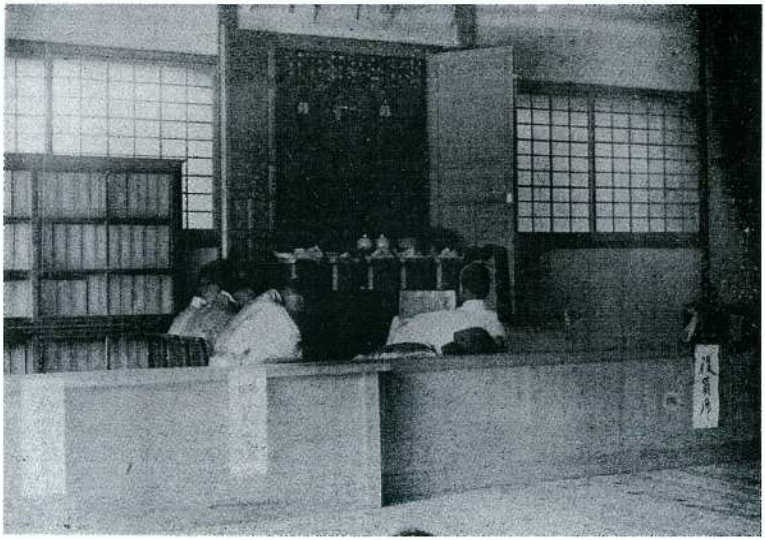
（生弓会 70 周年記念射会　平成 5(1993)年 9 月 26 日　東京武道館）

四世　本多利永（ほんだとしなが）

（欧州支部研修会　令和元(2019)年６月７日　ポーランドにて）



往年の巣鴨本部道場（昭和５年改築竣工）



同師範席　神前左に生弓斎文庫が見える（昭和６年射初式）

目次

〔特別口絵〕流祖　本多利實翁射影
二世　本多利時射影
宗家顧問・師範　髙木楽射影
三世　本多利生射影
四世　本多利永射影
往年の本部道場

■巻頭言「百入（ももしほ）」　理事長　本多利永…1

■創立一〇〇周年記念特集　編集部…3
・本多流生弓会小史　本多利實…6
・弓道保存教授及演説主意　初代理事長　関屋龍吉…9
・会報創刊号「巻頭言」　宗家顧問　碧海康温…10
・生弓会の生立　宗家顧問・師範　髙木楽…12
・本多流沿革　昭和六年師範会制定…14
・本多流七道　本多利時…16
・五味七道対応表及び本多流七道細表　本多利生…20
・生弓会の伝統　記念事業実行委員会…22

■創立一〇〇周年記念事業の実施

〔口絵〕

■本部報告　常務理事　飯野雄一郎…31
業務執行理事業務部長　片岡泰輔
・令和四年度事業実施報告
・個別行事実施報告
・令和五年度事業計画
・個別行事実施要領（計画）

■研修・印可審査報告　師範会事務局…50
・令和四年度研修総括
・令和五年度の研修について
・指導者錬成研修について
・本多流印可定め書　および同細則
・本多流印可審査受審を目指す皆様へ
・令和五年度　本多流印可審査論文題目
・本多流印可審査規程
・印可認許者一覧（国内）

連載
【支部からこんにちは】洗心洞稽古会支部　多々良茂…65
欧州支部　Kiyo Humm…76
【工房探訪】長谷川弓具店　編集部…80

寄稿
■堂射に関わる弓具と射法研究について(四)　早稲田大学大学院スポーツ科学研究科　相澤岳…84
■ほぐし弦の作り方　岡山支部　頓宮泰彦…108
■合宿研修会に参加して　洗心洞稽古会支部　吉村圭史…111
■故山本実師範の思い出　東京支部　青山とき子…115
■本多流生弓会に入会して　東京支部　大塚美希…116
■茎田実氏師範を偲ぶ　東京外語大支部　森巌…117
■学校会員活動報告　帝京大学　横浜支部　片岡泰輔…120

法人運営資料
■評議員会・理事会・運営委員会報告　常務理事　飯野雄一郎…124
■会員異動　会員管理担当理事　水谷昌智…126
■決算報告　業務執行理事経理部長　花田篤志…127
・貸借対照表　・正味財産増減計算書
・収支計算書　・財産目録　・注記
・監査報告書　監事　飯塚誠一・青江純平…134
■収支計画・組織図・役員等名簿　業務執行理事経理部長　花田篤志
総務担当理事　高崎やよい
・収支予算書　・組織図　・役員等名簿
■会員名簿…139
■本多流生弓会公式SNSの御案内…149
■入会申込書…150

広告
・『射法正規』第二版発行のお知らせ…154
・『本多流射礼解説書』『本多流射礼解説DVD』
・『本多流正史・上下二巻』東大弓術部・赤門弓友会
・長谷川弓具店　・小山弓具店　・アサヒ弓具店
・帝産ロッヂ　・千葉弓具店　・谷口弓具店
・土善旅館　・弓工房播磨　・真家弓具店
■原稿募集のお知らせ…164
■編集後記…165

巻頭言　「百入（ももしほ）」

一般財団法人本多流生弓会　理事長
本多流四世　本多　利永

平成の世から令和の世になり、今年で早五年となります。我々の生活は新型コロナウイルスに大きく影響を受け、依然元通りには戻らない面もございますが、最近になってようやくウイルスと共存する方向性が見えてきたようにも思います。

さて、今年二〇二三（令和五）年は、我が本多流生弓会にとって記念の年でありまして、一九二三（大正一二）年に利時が本多流宗家二世を継承してから、丁度百年となります。今から六年前、二〇一七（平成二九）年は流祖利實の没後百年という節目でしたが、今年はまた新たな節目を迎える訳でございます。

本多流生弓会は、「生弓斎本多利實翁の遺思に基づき、弓道の精神による人格陶冶及び本多流弓道の研究並びに普及を通じた日本の伝統文化の継承に寄与するとともに、国民の心身の健全な発展向上に努め、以って社会の発展に寄与すること」という、壮大な目的を掲げております。

「継続は力なり」と申します。個々の成果は微々たるものであっても、地道に成果を積み重ねていけば、やがて大きな事業や目標を達成できるというものです。また「好きこそ物の上手なれ」と申します。物事は、楽しんでやることによって上手くなるものであり、物事に熟達するには、それを楽しめるようになることが肝要であります。最初は好きで始めたはずであったのが、時間の経過と共に楽しめなくなってきた、ということはよくありがちです。その場合には、今一度原点に返って「楽しむにはどうしたらよいか」を考えることで、再び好奇心を取り戻すことができるやもしれません。

「三日坊主」といい、物事に飽きやすく長続きしないことを嫌いがちですが、そうなることを恐れていては何もできませ

ん。長続きのコツは、例え「三日坊主」になる可能性があっても、何事に対しても好奇心をもって取り組むことです。「三日坊主」の積み重ねがいつの間にやら自分の糧になっている場合もあり得る、と発想の転換をしてみてはいかがでしょうか。

ここで、この先我が本多流生弓会の更なる発展を実現するためには、次のような三つの心構えが必要と考えます。

一　流派として守るべき伝統は守り、組織運営上で変えるべきところは革新する。

流祖以来伝承されている流派の根本は揺らぐことがあってはなりません。その一方で、一般財団の運営上革新すべき点、例えばＩＴ、ＷＥＢ等の活用等、時代の流れに即した組織運営が求められるでしょう。

二　無理に規模を拡大せず、堅実な運営をする。

発展を目指すあまり、背伸びをし過ぎて足元が崩れては元も子もありません。財政、人事等あらゆる側面において身の丈に合った着実な運営を心がけていきたいものです。

三　会員一人一人の思いを汲むご案内の精神を大切にする。

古来の師匠から門弟へのご案内の精神を大切する中で、皆さんが等しく弓を楽しむことができる環境を提供し続けることが求められると思います。これらは当たり前の事柄であるようで、言うは易し、いざ実行しようとすると大変であります。皆で協力して頑張って参りましょう。

紅ひも稽古の上に百しほとかはりゆくすえ紫の色
ひと度は薄紅ひは色なれど百しほ色の上はむらさき　～本多利實～

染物が「一入（ひとしほ）」から「百入（ももしほ）」へと色濃く染まっていくように、皆さんが日々熱心に稽古に励むことで、一人一人の射技や心身が向上し、また一つ一つの事柄に地道に取り組むことで、本多流生弓会が発展できるものと信じて止みません。そして、我々が弓道という日本伝統文化の継承の責務を担うことによって、我が国の国民全体、社会全体の健全な発展向上が実現するものと願いたいものです。

本多流生弓会小史

編集部

■創立の頃

利實翁死す―　老師の突然の訃報に弓界に激震が走った。跡目の嫡孫利時は未だ幼少。その間隙を突いて本多流二世の座を狙う弓界の実力者や野心家たち。

一方、利實翁を師範に戴く東京帝国大学弓術部では、密かに利實翁の遺言書を預かり、大学総長に託していた。そこには利時成人まで家元の権限を弓術部が一時預かることが記されていた。この遺言書により本多流の宗家は他家に渡ることなく守られたのである。

利時の大学卒業とともに家元権限が本多家に戻され、ほどなくして本会の前身である社団法人生弓会が設立された。本会の起点は利時が二世を継承した大正十二（一九二三）年に置いている。

■戦前の隆盛

昭和五年、念願の新本部道場が竣工。利實翁が建てた道場を改築し、五人立ちのゆったりとした射場、地方支部会員のための宿泊施設も備えていた。

日本屈指の弓道場に全国から名射手が雲集。一年三百六十五日、弦音が絶える日はなかったという。

また未来を担う若者への弓道普及は利實翁以来の本会の伝統であり、利時二世を筆頭に一門は数多くの学校を指導した。

会員も六百名を超え、利時二世が天覧の栄に浴するなど、本多流ならびに本会は戦前の日本弓界において一世を風靡したのである。

■戦中戦後の混乱

利時急死―　東北地方に疎開していた娘を見舞った帰路、感染症が発症。後の三世・利生の疎開先であった埼玉・久喜の高木家で絶命。享年四十五。時に利生十一歳。本多流は再び宗家を失い、かつて宗家顧問・師範であった高木棐が宗家権限を預かり、後見として利生成人の日を待つこととなった。

東京・巣鴨の本部道場は空襲で焼失。名声を謳われた門人の多くも戦没し、かつて利時二世を戴いて隆盛を極めた本

会も、法人としての活動は事実上停止。長きにわたる雌伏の時代に入るのである。　ここで、利生三世が宗家を継承するまでの間、細いながらも強い糸で本多流の命脈を保った「本多流研究会」のことを、私たちは忘れてはならない。

■生弓会、復活

昭和三十八（一九六三）年、洗心洞高木場での修業を終え、利生が三世を継承。「もう誰にも遠慮することは無い」。宗家返還式で高木柴はそう言って利生三世を送り出したという。

東京・三鷹の寂光洞小山道場を拠点に、全国各地に散らばっていた利時二世の弟子が結集、復活の狼煙を上げる。

やがて『会報』の復刊、印可規定の整備、中央研修会の発足など、現在に続く活動の骨格が形成されていく。

■現在、そして未来へ

利生急逝―　三たび本多流を凶事が襲う。会社員生活を終え、さあこれから弓に専念するぞ、そう言っていた矢先の出来事であった。享年六〇。病床の苦しい息のなか、枕元に長男・利永を呼び、宗家継承を切り出す三世。「そうか、やってくれるか」。平成六（一九九四）年、本多流四世誕生の瞬間である。

その後、本会は八十周年、九十周年と時を重ね、利實翁没後百年記念射会を盛大に開催。欧州支部設立など海外進出も果たし、一般財団法人への移行など、時代に変遷にあわせて多彩な活動を繰り広げた。

しかし令和五（二〇二三）年の創立百周年を目前にして新型コロナウイルスの猛威が世界を襲い、本会も一時活動休止を余儀なくされた。この難局を乗り越え、次なる時代をどう紡いでいくか、私たちの覚悟と行動が問われている。

年号	西暦	主な出来事
大正 6	1917	利實翁逝去　任意団体生弓会発足
大正 12	1923	利時、二世を継承（本会の起点）
大正 14	1925	社団法人生弓会発足　初代理事長に関屋龍吉
昭和 4	1929	『尾州竹林派弓術書』発刊
昭和 5	1930	本部道場改築竣工
昭和 6	1931	『会報』創刊
昭和 8	1933	洗心洞（高木道場）　道場開き
昭和 18	1943	財団法人に移行
昭和 20	1945	本部道場が空襲で焼失　事実上活動停止 利時逝去　高木柔が宗家権限を預かる
昭和 27	1952	「本多流研究会」発足
昭和 34	1959	寂光洞（小山道場）　道場開き
昭和 38	1961	利生、三世を継承
昭和 39	1962	高木柔逝去
昭和 43	1968	第二代理事長に藤岡由夫
昭和 44	1969	『会報』復刊（第 101 号）
昭和 51	1976	第三代理事長に前田充明 『本多流始祖射技解説』発刊
昭和 53	1978	明治神宮で第 1 回本部研究会（現中央研修会）
昭和 57	1982	『本多流射礼解説』発刊
平成 2	1990	第四代理事長に柳川覺治 帝産ロッヂで第 1 回合宿研修会
平成 6	1994	利生逝去
平成 8	1996	宗家宅で「本多流勉強会」発足
平成 9	1997	『本多流射礼ビデオ』発刊
平成 14	2002	利永四世宗家襲名披露射会
平成 15	2003	『本多流弓術書』発刊（創立 80 周年記念）
平成 17	2005	第五代理事長に遠山耕平
平成 18	2006	『本多流射礼解説書』発刊
平成 19	2007	『本多流射礼解説 DVD』発刊
平成 25	2013	第六代理事長に本多利永　一般財団法人に移行
平成 29	2017	利實没後百年記念射会　『射法正規』発刊

弓道保存教授及演説主意

本多　利實

弓は一技なり。然れども之を学ぶ時は、修身斎家の道を治め、且、古えは之を戦場に用ひて不順の敵を殺戮す。故に平素其業を習う時は、進退周旋悉く礼に当たらざることなし。又人目に不見冥中の物をして的中せしむ、之れ蕃目鳴弦の法たる所以なり。

予明治の聖代に至りて以後弓矢を手に不為、之に代うるに采秬を以て業となせり。然るに、此頃友人某訪来、曰く「君今半日に及び自ら稼穡に身体を労役すること不可なり。君元来弓箭を取りて名あるなれば、君此道の為め後世に保存の方法を計るべし。僕此頃の弓射る人を見るに愕然に堪えず。」予怒して曰く「素より射の観徳不可思議絶妙後世に伝わらざるを歎く処、然らば則ち其目的を計るべし。」

先ず此頃の壮者射の何たるかを知らず、唯射は射て成る事と思い、骨法の然る所以を知らず。故に射る程益々病い深く骨に入りて終に射の理に遠ざかるは哀れむべし。

射に新古の法あり。所謂日置弾正正次より伝う処、則ち現今の射形なり。之を新術と言う。古流とは則ち遠く神代より相承なす処の御世々々天皇の御伝なり。然りと雖も、古より流派種々に分れり。又新流と雖も吉田一派或は竹林等流派ありと雖も、何れも射形骨法日置の発明する処に拠らざるなし。

予思えらく、日置氏は明応年間吉田上野介重賢に伝授なせしなれば、支那崇禎年間に姓は高、名は顥、字は叔英、明末の人に射の上手ありて、骨法射形を改良なし射書を著す、皇国日置氏と相同じ。恐らくは、彼の射書伝来して遂に射形を同じくせしならん。悉しきことは、予が説明を聞かれよ。予此道に志深き人に於ては口伝口訣惜むこと無からん。

射に真行草あり。的前則ち普通射形を真と言い、繰矢前、矢文の法を行と言い、指矢前、堂射射形を草と言う。此指矢前に種々の口伝あり。又射礼とて式法あり。之に古代朝廷に行はるる大射、賭弓等の礼射あり。又代々の武将行う処の礼式あり。礼式に家々の伝あり。所謂逸見、武田、小笠原、伊勢、吉良等ありて、家伝大同小異あり。是又志あらん人には惜む事無く授くべし。

文射武射の両用ありて、文射とは礼射にして大射式を始

めて様々の式あり。武射とは貫革を主とし戦場の射法矢入矢合、槍下槍脇狭間の射様、床下の射又五射等あり。何れも故実種々あるなり。又弓矢弦指機に製作法量掛合に定法ありて、此釣合を失う時は射術妙手と雖も中る事を得ざる、是定理なり。故に此掛合を知らざるは射に益なし。既に明の高穎射学正宗及び指迷集に詳かなり。合せ見るべし。

又射に歩射騎射の二種ありて、素より騎射なるものは射御の両つ連用なせしものにて、素より別に騎射あるに非ず。然れども後世自然一技の芸たる如き姿なり。歩射の大概を言う時は、前に述べるが如く真行草よりして、立座、拾段射を始め種々の教あり。騎射に流鏑馬、笠懸、犬追物、其他敵合射様、鞍固め等伝授あり。射は一技なれども、太古よりの伝夥多にして一朝に言い尽くすべからず。

抑々射の真理たる基本を一篇に述ぶるに、弓は形容言にして曲なり、**ユガム**の義にて、矢は**ヤル**の義にして、此方より彼方へ**イヤル**の義にて貫徹の義を言う。士をさむらいと言うも、**サ**は殺弓のさにて、**ムラ**は群の意、**イ**は居の義、則ち古への弓矢の貴重なる事、之を以て知るべし。古への戦闘を**イクサ**と言いしも、五人組にて弓矢を以て隊伍をなしし事を知るべし。斯の如き事は敢えて射に益なしと雖も、上古無二の重器として尊みし事を知るべし。

斯の如き冗言は置いて、現今壮者の迷惑なす骨法射形の概略を謂わんに、先ず射術の根本たる窮理を知るに及んでは、自然骨法射形、法の如く意の如くなるべし。之師に従うて学ぶ者は、其の家に至らんとして門に入り室に至るが如し。自我の射は其屋に至らんとして思わざる所に入るが如し。能々合点有るべし。故に射の業を習う人は、能き師を求めて学ぶ時は、一月にして骨法を知り、二月にして射形調い、三月にして弓力増し、四月にして味わいを覚え、五月にして調子を得、六月にして真の中りを知る。然して累年の上妙手を得る也。

射は顕幽両途感通して一技を全備す。故に前に述べる処則ち顕にして射形を言い、且心気の練心決意の心法は言うべからざるの修学、伝えがたき処、所謂禅家に不立文字と悟道に云所なるべし。先ず情心の概を言えば、放すべからざるを放し、発すべきを惜む。是則ち情意の射、志に至らざるの為す所なり。悉しき事は諸流派の祖師究むる所あれば、予一々伝書に拠って弁明すべし。

予近頃、此弓道保存の発意以来、各所的場の況景を視察するに、弓に矢を塔せて礫打に異ならず。奈何となれば、弓の弾力を殺し、矢の走るを抑へ、弦の発味を失う。一として活溌の道理あらんや。歎くべし。故に大方の射形一篇を述べて各位の先導に備う。

弓に五味七道の教、又十二教、且五法等あり。五味七道とは、一に足踏、二に胴造、三に弓構、四に打起し、五に引取、六に會、七に離れなり。是を七道と言い、五味とは足踏胴造を一味とし、弓構打起しを二味と言い、引取を三味とし、會を四味とし、離れを五味となす。則ち七道をつづめ連足なしたるもの也。又五身とも言う事あり。悉くは説話すべし。又十二教とは、一に足踏、二に胴造、三に弓構、四に手の内、五に掛け、六に物見、七に澄、八に打起、九に引込、十に矢道十一に持満、十二に発なり。五法とは高潮の法にして、一に審、二に穀、三に匂、四に軽、五に注なり。

如此種々教は有りといえども、帰する処弓を引いて矢を飛ばし的中せしむるに止まるのみ。何ぞ如斯く種々に別あらん哉。後世に至り本末を違い、何流は如此などと形に株守して本を失ひ末を論ず、是遺憾の至りなり。本一つなり。末に些少の見識あるのみ。夫は一々説明すべし。

此度予此道の保存を計画せんと欲し、各位有志者の賛成を仰ぎて将来の継続を計る。故に有志者質問の廉あらば、予知り得る限り聊惜しむ事なく尽く伝授すべし。又射て的中せしむるの術は、予に三月の光陰を給へ。徒らに射給う人と異なる所を見て弁え知り給うべし。

猶一言残さんとする。現今の射は遊戯運動のみ。然れども、射は前言の如く端正篤実にして行状志を顕すの器なれば、軽忽になす可きなし、且つ、運動に尤も適当なすの説は、顕幽両途の説に言うが如く、射適々的中せしむる時は其愉快他の器の及ぶべきものなし。是精心の活く業射を以て右に出ずるものなし。故に人体運動に尤も適すべし。悉しき事は業を以て伝うべし。

又世に旅行或は盗難の防禦に半弓と称する物あり、是は弓の半に対しての名称にて、是に三好流或は李満弓等あり。何れも一器の半弓なり。予壮年の頃、一の半弓を発明せり。是は射法自由にして取扱軽便にて、夜中盗賊或は身の保護に至極適当なるもの也。志の人には相伝すべし。又打根と言うものあり。是も射に属せしものにして、心得置て実用に足

るべし。

如此喋々なして、他に射人無き様如何にも聞き苦しき賤言なれども、保存の一心止みがたく、斯くは暴言せしなり。見る人幸に恕し給え。殊に文筆も無き老武者なれば、開明盛文の壮者咎むるなかれと云爾。

明治二十二年八月　　生弓斎謹述

巻頭言

初代理事長　関屋　龍吉

回顧すれば老先生が逝去されてから、今年ではや十五年になる。ご逝去の直後、尚十六歳の利時氏を擁護して出来た生弓会も、その後だんだん発展して来て、一昨年の暮には新道場の建築も完成して益々隆盛に向かって居るのは誠に慶賀の至りである。利時氏も成人され結婚されて、既に二人のお嬢さんの父となられた。

この十五年の間、実に幾度も計画され、生まれるべくして終に生まれなかったのは生弓会の会報であった。この会報が今度役員諸君の御尽力によりここに初号の発刊を見るに至ったのは誠に喜ばしいことである。

生弓会の仕事は実際これからである。今後やって行かなくてはならぬ仕事が沢山ある。これらの仕事をするのに、眼となり、耳となり、口となって働くのがこの会報である。であるから、会員諸君はこの会報を利用して、生弓会の発展の為に努力せられんことをこの際特に希望する次第である。

『会報』創刊号（昭和六年）

生弓会の生立

宗家顧問　碧海　康温

生弓会と一口にいっても前の生弓会と今の生弓会とは大に趣が違うところがある。前の生弓会といるのは利実先生の没後、孫利時氏が幼少であった為、利時氏を守り立てゝ成年に達するまで、弓の方も学業の方も、後顧の憂なく修業の出来るように仕様と言うのがその目的であった。今の社団法人生弓会は定款の示す如く弓道の普及と研究、並びに弓道精神による人物陶冶を図るというのがその目的である。

先ず初めの生弓会の成立を記そう。この生立には不肖もその導火線になったものであるが、今の関屋理事長の献身的な努力に依るものが多い。明治の末年、大正の初年頃、本多老先生の輩下に集って来た多数の弟子や弓術家の中には野心家が少くなかった。その中某々等は老先生が八十の老齢である上、孫の利時氏が幼年なるに乗じ、自ら本多流第二世たらんことを欲し種々画策するところがあった。私はこれを深く心配して居ったのだが、端なくも私は大正五年の秋、大連の満鉄に赴任することとなり、帝大弓術部でも送別射会を催していただき、其夜本郷の弥生亭で送別の宴が開かれた。その席上私が立って以上の事実を披露し、かゝる危急な際に処して最安全の策は利時氏の成人する迄、一時、本多流家元の権限を帝大で保管するのがよくはないかという、私としては大真面目だが、世間からは無謀とも見られるような提案を出した。ところが意外にも列席の関屋氏（今の理事長）小野田弁護士（今の理事）高木君（今の宗家顧問）などを初め諸君の大賛成を得たのみならず、善は急げというので、直ちに巣鴨の老先生を訪れ、小野田氏からこの事を話したところ老先生も、初はその意外に驚かれたようだが流石に老先生で、即座に快諾された。そして次のような覚書がその後秘密裡に作製された。

覚　書

一、日置流竹林派弓術家元ノ義ハ嫡孫利時ヲ跡目トス

二、利時現今尚幼少未熟ナルヲ以テ他日斯道ニ練達シ弓術師範タルニ適スルニ至ル迄門弟ニ対シ家元ノ有スル一切ノ権限ハ之ヲ東京帝国大学弓術部ニ於テ保管スル事

三、万一利時弓術ニ親マズ伝統相続ノ資格ヲ欠ク時ハ親族中ニ於テ適当ノ後継者ヲ選ビ之ニ前期権限ヲ引渡スベク

尚且其人ヲ得ザル時ハ本流派ノ伝系ハ利実ヲ以テ断絶セシムル事

四、前項後継者ノ認定ニ関シテハ東京帝国大学弓術部ニ於テ慎重熟議ノ上決定スベキ事

大正五年十二月十九日　　本多利実

ところが翌大正六年十月十三日、老先生が浅草本願寺門前で電車に触れて不慮の横死を遂げられた。その葬式の前夜、葬式の問題等から、某々等の野心家の間で劇しい議論が起って非常な混乱に陥った。そこで列席していた成田氏（今の理事）が突然立って、前掲の覚書を読み上げた。殆ど寝耳に水だったので、某々等は茫然自失、真青になってしまった相だ。元来某々等は老先生の後嗣たらんが為に、老先生に取り入り、葬式もそのつもりでやって居ったのだから、こうなると前途の見込がないので葬式などはどうでもいゝという有様で、そのまゝ放り出して、さっさと引上げてしまったものだ。そこで関屋、成田、大内諸氏の手で葬式をすませ、大急行で帝大弓術部を中心として、孫の利時氏の養育を目的とする会を組織してしまった。会名は老先生の雅号生弓齋に因んで生弓会と名づけた。

利時氏はその後、京北中学を卒業し、国学院大学に入学、国語漢文を専攻され、大正十二年三月日出度卒業され立派に成人せられたので、大正十二年十二月、老先生の追善会を催すと同時に、前記の覚書にある如く家元の権限を利時氏に引継いだのである。此に於てもはや前の生弓会は、その目的を達したので、解散するに至った次第である。

前の生弓会の生立から解散に至るまでの事情は以上の通りであるが、更らに本多流弓道の普及及研究、人物陶冶等に努力しようという所から第二の生弓会の出現を見るに至ったのである。そしてその組織は社団法人となし、会名はやはり従前の通り生弓会で、社団法人生弓会となったのである。この成立については、今の関屋理事長を初めとして二三の人の非常な努力があった。会員の如きも年々増加して現在に於ては六百五十名を算するようになった。地方には支部を設置するようになり、現在十一の支部が出来ている。又道場も非常に古くなって殆ど使用に堪えない位になったのみならず狭隘を感ずるようになった所から、別記「生弓会本部道場改築経過報告」にあるように改築委員長和田盛一氏を

初めとして各委員会員方の尽力によって、今日のような立派な道場が建築された。

現在の生弓会は昔のものとは殆ど比較にならぬ位盛大になったが、これで決して満足するものでない。将来は我国の弓道の統一を理想として進んでいかねばならぬ。この理想を実現させる責任は偏にかゝって会員諸君の双肩にあるのだから、そのつもりでみっちりやって戴きたい。

『会報』創刊号（昭和六年）

再録：『会報』第一〇二号（昭和五十四年）

再録：『会報』第一二六号（平成十五年）

本多流沿革

宗家顧問・師範　高木　棐

本多流は、明治の中葉、故本多利実翁が日置流竹林派からでて、古来からの射を改め武道と体育との調和を主眼として従来の斜面打起しを廃して正面打起しとなし、儀礼を取り入れたのと同時に、姿勢の左右均衡を計ったものであります。

利実翁は東京帝国大学、第一高等学校、東京美術学校等の弓道師範をやっておられたのと、その高邁な識見と、円熟した技術とを敬慕する門人雲集し、その人々は或は東北に、或は九州に、或るは遠く満州、南洋等に各その道を伝へて、此の正面打起しは滔々として全国弓道界を風靡するに至り、この正面打起しの竹林派を世間では本多流と称へる人たちもでてきたほどでしたが、翁自らは決して本多流とは言はれなかったのです。

大正六年翁の歿後、嫡孫利時氏が宗家を継ぎ、生弓会を起すに及んで始めて利時氏自身も本多流を称するに至

ったのです。利時氏の時代には前述の諸学校の外、更に学習院、文理科大学、国学院大学等の弓道部もこの本多流を学んだのでした。

明治末から大正、昭和にかけての弓道界の指導的立場にあった人々の多くは、故翁の門を出た人々であったと言へる有様で、筆者の思い浮べる事のできる人々だけでも、立入春太郎、村尾圭介、碧海康温、屋代欽三の諸氏、その他九州の石原七蔵、会津の大平善蔵、仙台の阿波研三の諸氏等、実に弓界の大先覚が沢山おりました。

本多流は前述の如く尾州竹林派から出ておりますので打起（中力、大三）の外は大体尾州竹林派によっており、射形も亦足踏、胴造、打起、引取、会、離の七道となっております。

竹林派（本多流）弓術教則

足踏　己が形相応に立つべし
　　人々の矢束たるべし
胴造　中央なるを吉とす
弓構　弓を左の膝節に立て左右の券を揃へ
　　弓と弦との真中に顔を向べし
打起　起悪ければ全部為がたし
引取　押大目引三分一の際をいう
会　会は両儀に用ゆ　懸と持満なり
離　離は鸚鵡の離なり

東京帝国大学弓術部に掲げてあった綱領

射は剛健典雅を旨とし精神の修養と肉体の錬磨とを以て目的と為す

◆編集部注：本稿は日本弓道連盟機関誌『弓道』昭和二十八年十二月号に掲載。当時高木氏は日本弓道連盟副会長

本多流七道

昭和六年師範会制定

一、足　踏

一、左右両足ノ拇指ノ先ハ的ニ向ツテ約一直線ニアルコト

二、両足先ノ拇指ノ間隔ハ身長ノ約五割二分位ヲ基準トス

三、両足ノ角度ハ約六十度（内側）トス

二、胴　造

一、身體ノ重ミヲ両足ニ托シ左右ノ肩ヲ落スコト

二、上體ハ稍前ガカリトナルコト

三、両脚ハひかがみヲ伸シ両足裏ハ大地ニピッタリ着ク様ニ力ヲ入レルコト

四、静カナユルヤカナ気持ニナリ腹ノ力ガ抜ケヌ様ニスルコト

三、弓　構

一、弓ヲ左ノ内膝節ニ立テ左右ノ拳ヲ揃ヘ體ノ正面ニテナスコト

二、打起ノ前ニ顔ヲ的ニ向ケルコト

「手ノ内」「會」

四、打　起

一、打起ハ約四十五度ニ打チ起スコト

二、両肩ガ上ラヌ様ニシ精神ヲ落チツケ臍下丹田ニ氣ヲ収メルコト

五、引　取

一、打起ノ位置カラ左手ヲ左斜ニ動カシ左肘ノ上邊ニ的ヲ見ル所マデ持ツテ行キ右手ハ肘カラ先ダケヲ左ニ動カシ右肘ガ直角位ニ曲リ肘ノ位置ハ打起ノ時ヨリモ少シ高クナツテ頭ニ近ツケ拳ハ眉毛ヨリ下ラヌ様ニシテ左右ノ拳ヲホボ平ニスルコト之ヲ大三（中刀）ト云フ

二、コノ時矢束ハ引ク矢束ノ三分ノ一即チ自分ノ矢束ノ約半分以上ニナルベキコト

三、次ニ引取ノ第二動ニ移ル左手ハ弓ヲ押シ右手ハ肘ヲ後ニ廻シ身體ガ弓ト弦トノ間ニ割リ込ム様ニシテ矢束ヲ十分ニ引クコト

六、會

一、引取ガ完了シタル所ヲ會ト云フ

二、コノ時矢ハ耳ノ下ヨリ口割リマデノ間ニシテ頬ニ接スベキコト

三、弓ハ身體ト一致スル様ニ稍伏セルコト

四、會ノ形ガ整フト同時ニ狙イモ定マルベキデ右眼ヲ主トシテ弓ノ内側（左側）ヨリ的ノ眞ヲ狙フベシ拳ト的トノ高低ハ弓ノ強弱的ノ遠近ニ依ツテ異ナル。狙ヒハ人ニ依ツテ異ルモノデアルガ人ニ後方カラ見テ貫ツテ的ニツイテ居ル時ノ自分ノ狙イヲヨシトス但正シイ顔ノ向ケ方ヲ必要トス

五、會ニ入ルト左右兩手ノ運動ハ静止スルガ之ハ終局ノ静止デハナク次ニ來ル離ノ為ノ準備デアツテ左右ノ手左右ノ肩胸等ガ縮ンダリ緩ンダリスル事ノナイ様ニ努力スルコト之ヲ仲合ト云フ

七、離

一、離ヲナスニハ左手ノ拇指ヲシメテ中指ニ押シカケコレト共ニ右手ノ拇指ヲ強クハネ無名指ト分離セシメルノデアル

二、右肘ノ部分ノ開イタ角度ハ約百度位ヲ基準トス初心者ハナルベク大キクスルコト

三、離ハ強クシテ軽キコトガ肝要デアル

四、會ノ時ノ全身ノ氣力充溢ノ餘韻ガ離ノ後ニ存スベキデ之ヲ残身ト云フ

「手ノ内」「會」

手ノ内ハ左手ノ取懸ケ會ハ右手ノ取懸ケト思ヒ共ニ弓構ノ場合ニ行フベキモノ手ノ内ハ拇指ト中指デ弓ヲ握リソレニ薬指小指ヲ添ヘ拇指ノ腹ガ中指ノ第三関節ノ所ニ懸ケ指ノ間ニ隙ヲ生ゼヌ様ニナスコト

中力以後引取ニカカツテハ拇指ト人差指トノ股デ弓ノ正面ヲ押シ中指ト拇指トデ出來タ輪ノ形ヲ以テ弓ニ直角ノ氣持デ押シカケ拇指ノ根本デ弓ノ右内側ヲ押シヌクコト之ガ中押シト云ツテ正シイ弓ノ握リ方デアリ押シ方デアル

取懸方

弦枕ノ所ニ弦ヲ引カケ帽子ノ頭ヲ薬指ノ第三関節ノ所ニ帽子ノ尖端ガ外部ヨリ少シ見ユル程度ニ懸ケ（初心者ニシテ三ツ鞢ノ場合ハ中指ノ第三関節）人差指ト中指トハ薬指ニ準ジ輕ク添ヘ矢ハ人差指ノ中頃ノ高サニシ人差指ノ根本デ外面ヨリ輕ク矢ヲ支ヘルコト中力以後引取リニ懸ル時ハ帽子ノ中ノ拇指ハ上ニハネル様ニ力ヲ入レ弓ノ方ヘ引カレル弦ノ力ト最少限度ノ力ヲ以テ引キ來リ弦ト會口ト矢ト一緒ノ氣持デ拇指ヲハネ起シテ弦ヲ放チヤルコト

五味七道対応表及び本多流七道細表

本多　利時

一、五味七道対応表

技術（七道）		心気（五味）
一、足　踏	（準備期）	
二、胴　造	過　去　身	（人日の曲尺）
三、弓　構		目　附
四、打　起	（決定期）	
五、引　取	現　在　身	引　込
六、会		伸　合
七、離	（完了期）	離
	未　来　身	
付＝残　心		見　込

一、本多流七道細表

足踏

形（技）

一、両足の親指の先端は目当物の真中よりの一直線上にある事（右足は親指だけ前に出ても宜し）

一、両足の踏み開く角度は六十度とす

一、両足の開く間隔は各自の矢束を基準とす

身体（力）

一、両足は凝らず筋は伸び伸びと踏む事

一、引取るに従い両足は内筋の締まるを良しとす（始めから意識的に締めるは悪し）

精神（心気の働き）

一、敬虔の念を以て行う事

胴造

形（技）

一、足踏の上に真っ直ぐにそそり立つ事

身体（力）

一、凝らぬ事

一、身体の重心は足裏全部にかかる事

精神（心気の働き）

一、七情にとらわれぬ事

一、大日の曲尺（大日如来即ち太陽の如く何物にも怖れず驕らず真摯にして余裕ある心境）

弓構

形（技）

一、胴は主、弓は従で、前のめりにならぬ事

一、「手の裏」「取懸」等はなるべく一遍で行う事

身体（力）

一、両肩は軽く緩やかに下げる事

一、「手の裏」「取懸」等はあまり力を入れない事

精神（心気の働き）

一、「手の裏」と「取懸」とは以後弓力と身体との接触点となる所であるから充分丁寧に自信を以てする必要がある。「恐れ」「疑い」の心は禁物

打起

形（技）

一、弦が身体の縦の線に平行になるよう、また矢は水平になるように構えて徐々に軽く正面に打ち起こす事

身体（力）

一、両拳は力を入れず従って矢束は取らず弓矢を軽く支え持つ事

精神（心気の働き）

一、弓矢はただ捧げる積りで上げる事

一、残身の心大切なり（弓は天を突き身は地を突く心持）

一、首を目当物に向けると凝る人あり。注意を要す

引取（第一　中力）

形（技）

一、押手は左肩口を中心とし勝手は右肘を中心として左斜上に相対的に移動する事。この時の矢束は各自の引く矢束（弛の高さを除いた矢束）の二分の一以内たる事

一、両拳は水平になる事

一、弓の面は身体の面に平行なる事

身体（力）

一、この時弓力が生ずるがその弓力を引き受ける程度

の締まりあればよし

一、両拳、両肩口等に凝ってはならぬ

一、弓力ややつのれば胴締まり（丹田即ち力の中心点）を中心として総身の締まりを必要とす

精神（心気の働き）

一、弓力のつのるに従い気に凝りを生じてはならぬ

一、弓力と体力との一致を心掛ける事

引取（第二　引取）

形（技）

一、「手の裏」は中押（弓に直角の形）で中力の位置より目当物に対して左斜下に押下げ勝手の親指は起きてその突端と薬指（四ツ弾）または中指（三ツ弾）との締まりで弦を引受け右肘を先導として右肩を中心に肘形に拳が右肩の上まで引取る事

身体（力）

一、重心は足裏の親指の付根の上にかかる事

一、弓力（弦が矢を押す弾力）を体力で妨害（凝る場合）したり奪ってしまったりせずに体力を細長く働かす事

一、勝手は薬指または中指の第一関節と肘との間及び肘と右肩根との間の外筋を張って弓力を味と気力を伴った力で引取る事

精神（心気の働き）

一、引き取る時、縦軸を延ばす気持で引取る事

一、押手は押す心、勝手は引く心、胸は引分ける心（三心相引で引取る事）

会

形（技）

一、引取の機能の完了した時で縦軸も横軸も充分伸びて左右の拳位置も定まり目当物と身体との関係も定まった時

一、側面から見て弓身一枚になる事

身体（力）

一、弓力と体力との調和もとれ更に丹田を中心に統一のとれた総身の力で縦にも横にも凝らず充分伸び合った力で離を誘導する事

精神（心気の働き）

一、全弓力が身体に訴えて来る時であるから心は締ま

り気は大きく持って余裕綽々たる事

一、技術の落ち着きと共に精神の落ち着き即ち「森々」たる気持が必要である

一、弓身一味となり、しかも安徐正静なる事

離

形（技）

一、弓身一枚の所からどこにも動揺なく弓と身体との接触点即ち「手の裏」「取懸」等の働きにも故障なく離れて行く事

身体（力）

一、弓力、術力、体力等の渾然とした緊張の最後からそれらの力が専ら弓力に移行して行く事

精神（心気の働き）

一、冷静にして緊張した心持から更に目的貫徹の意によって割離して行く事

一、「颯々」たる気持を必要とする

残心

形（技）

一、會の緊張を破って割離した後の左右の拳の釣合、身体の状態（縦横両軸の延び）等乱れず崩れずに存する事

身体（力）

一、丹田の中心に統一のとれた力の緊張の最後から離れた後の余韻

精神（心気の働き）

一、光風霽月の心境

『会報』第六号（昭和十一年）をもとに編集

■編集部注：会報六号が発行された昭和十一年は、弓道が当時の中学校に正課として採用された時期にあたることから、本稿は弓道初心者の学校生徒に弓道を教える指導者向けに書かれたものと推察される。

生弓会の伝統

本多　利生

生弓会は発足より既に五十余年を経た。しかし、その業中半にして受けた戦争の打撃は余りにも大きく漸く再建の途についたばかりである。今後の発展を図るに当たりいささか考える所を披歴したい。

まず今後、生弓会の活動は「伝統に基づく」ことを基本的指針とすべきと考える。しからば生弓会の伝統とは何か。私はここで流祖利實が明治維新、日本近代化の後、世に行われる射の余りに乱れおるを嘆く友人の勧めによって敢えて正しい射の保存普及に乗り出したという一事を想い起こしたい。当時は文明開化、洋化の勢いの中、武術などは真面目に顧みる人もなく、ただ町矢場に弓術の形骸を留めていたに過ぎぬ時代であり、正しい射を伝えるために利實は自らさらに修業して射の研究を深め新境地を開いたと言われ、この事は利實自筆『弓道保存教授及演説主意』（明治二十二年著わす）に明らかである。その後、利實没するに及び、その遺志を受け継ぐことがそもそも生弓会設立の目的であったと考える時、生弓会の伝統とは正しい射を伝承し本多流という系統を伝えるということであると言えよう。伝統とは単に伝承するという意味に加え、一つの系統を伝えるという意味があり、その根本には集団的社会的に好いものとして保存あるいは継承しようという強い意志が働いていると言われる。今後の会の発展のためにはこの「好いもの」として伝えていこうという意志が何より大切であると考える。

これを個人の問題として取り上げるなら、射を行ずるに当たっては単に射技の上達を求めるに止まらず、常に伝統に基づいて行ずるという自覚を持つとき、初めて真の意味の稽古となり、その人の射の向上となり人格完成の一助ともなり得ると考える。

さて、昨今の世の中は機械化という時代の波に巻き込まれ、人間の行動はすべて外からの指示で規制されてしまい、自己は全く疎外されてしまっている。行動は一様化され、他との比較はスピード、省力に絞られ、他人より、より早く、より労少なくということだけに目を奪われてしまっている。我々はこれを誠に嘆かわしいといって慨嘆してばかりはいられない。自分の行動にその影響が現れていないだろうか。

時に我ながらハッと驚くことがある。本来弓道とは自己との対決を究極まで求めさせられるものであり、弓道を修業することは前述の現代の悪影響から、いくらかでも自己を守る働きがある筈である。私はこの意味で現代から将来にわたり、弓道の存在価値は益々増大する中に、逆に前述の悪い傾向が持ち込まれてはいないかということである。とかく日常の行動様式につられて弓道の修業もなるべく楽をして早く上達を望むという傾向が無いだろうか。常に内省する必要がある。弓道から自己との対決ということを外したら結局は単なる的中競技しか残らない。私は先に伝統に基づくべしと主張したのもこれを慮ってのことである。伝統という言葉は常に過去と切り離し得ず、またいわゆる復古とも混同されやすいという運命を持っている。ところが私の言う伝統とは単なる形式的な復古主義や、精神至上主義とは縁遠いもので、常に事の源に遡り、その精神を自身で体験することにより正しいものを伝えていく、即ち厳しい稽古を重んずるという基盤の上で言っていることである。稽古という型の自己鍛錬は人間にとって将来とも必要なことであり、この辺が将来の弓道の存在価値を位置付けるポイントであろう。

『会報』第一〇一号（昭和四十四年）

■寄付募集

以上の事業を行うにあたり、その財源として左記のとおり寄付の募集をいたします。創立一〇〇年は会員皆さんのものです。みんなでお祝いしたと考えていますので、額の多少に関わらず、なるべく沢山の方のご賛同をお願いします。

記

目標金額　五〇〇万円

使　　途　創立一〇〇年史（二〇〇万円）

本多流叢書（一〇〇万円）

記念射会および記念講演会（五〇万円）

その他事業（五〇万円）

返礼品（一〇〇万円）

※記念パーティは別途会費制

募集方法　一口を金五、〇〇〇円とし、総計一千口各人一口以上をお願いします。

振込手続　今回、年会費用の振替用紙とは別に、寄付用の振替用紙を同封しましたので、この用紙により本会の郵便振替口座あてお振込ください（令和五年七月末日まで）。

なお、ご寄付いただいた方にはささやかながら返礼品を用意しております。

一　口　記念手ぬぐい

二口以上　記念手ぬぐい＋記念メダル（（国内会員は記念メダルに代えて菓子を選べます）

十口以上　記念手ぬぐい＋記念メダルに加え宗家揮毫色紙や流祖量蹟のレプリカ等を差し上げる予定です。

※返礼品は記念事業終了後の発送となります。

【お願い】

創立一〇〇年史および特設ホームページは、過去の会報に掲載された写真・記事により制作しますので、あらかじめご了承願います。また内容によっては掲載につき個別に相談をお願いする場合がありますので、ご協力をお願い申し上げます。

令和４年度行事風景

追悼射会・臨時研修会（3月26、27日　東京武道館）

京都研修会（5月3日　京都外大西高）

合宿研修会(6月 25,26 日 帝産ロッヂ)

遠的大会(7月23日 東京武道館)

中央研修会(10月1、2日 明治神宮)

納射会(12月4日、東京武道館)

関西支部研修会(12 月 24 日 大阪城弓道場)

『日置流竹林派弓術書』広告

弓術書豫約廣告

一今般弓術部は射道修錬の爲め有志相謀り師範本多利實翁に請ひ師範翁四十年間の研鑽になれる弓術書を上下二卷に分つて刊行し實費を以て普く之を頒たんと欲す苟も斯道に意あるの士は此際機を逸らず御申込あらん事を希望致し候

一本書收する處は我部の宗とする竹林派及日置流正統諸一切の書傳と之に對する師範翁の註解と及び師範翁一切の著述に有之候即ち

上卷　竹林派諸註解合計十四冊

下卷　日置正統諸註解合計十冊及

本多生弓齋著述九冊

一製本出來劃は明春早々よりし尚ほ出來の上は直ちに御報せ申すべく候

一代價は凡そ各六十錢位とし豫約者に御氏名住所に豫約金四十錢相添へ四十一年一月二十日迄に御申込相成度尚ほ期日後の御申込は謝絶するやも計られ申候

明治四十年十二月十一日

東京帝國大學運動會弓術部委員

資料提供：国立国会図書館

日置流竹林派弓術書の予約広告見つかる

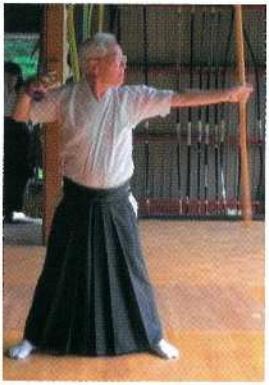
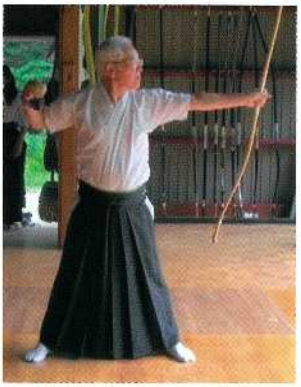
明治四十一年四月に帝国大学運動会弓術部が発行した『日置流竹林派弓術書』の予約広告が法学協会雑誌に掲載されているのが発見されました。広告は明治四十年十二月となっております。

『師範本多利實翁に請ひ師範翁四十年間の研鑽になれる弓術書を上下二巻に分つて刊行』と謳い文句があり、「上巻　竹林派諸註解合計十四冊」「下巻　日置流正統諸註解合計十冊及び本多生弓斎著述九冊」と書かれています。実際の『日置流竹林派弓術書』は単行本の刊行で、中身は竹林派諸註解九冊、日置流正統諸註解五冊となりました。縮小された理由はわかりませんが、それでも利實翁の七道の写真と五味七道図解があり、利實翁の註解が掲載されている画期的な本です。

本会報で相澤岳氏寄稿文に本来掲載されるはずであった弓術書を推定しております。

— 遥悼 —

東京外国語大学　弓道部　　蓼田實師範

本部報告

常務理事　飯野雄一郎
業務執行理事業務部長　片岡泰輔

■前年度を振り返って

令和四年度は新型コロナウイルス感染拡大も一時よりは落着きを見せ、一月の新年射会、二月の大学OB・OG親善射会こそ中止になったものの、三月の追悼射会・臨時研修会以降、ほぼ計画どおり行事を開催することが出来ました。特に京都研修会、合宿、中央研修会は三年ぶりの開催となり全国の会員と交流できたことは大きな喜びでした。また印可審査も三回ほど実施できました。運営に携わった役員・運営委員の御尽力に感謝申し上げます。

本部の主な取り組みと成果は次のとおりです。

・本会としての新型コロナ対策を決定し会員に周知
・入会案内パンフレットのリニューアル
・『射法正規』第二版の製作（令和五年から頒布開始）
・「射礼解説DVD」の増刷
・公式ホームページ更新と行事報告要領の改善
・宗家による「指導者錬成研修会」発足
・会議体におけるオンライン会議の定着
・欧州支部との連携強化
・次世代運営者のスカウト

特に、入会案内の更新は紙質を向上させたこともあって好評でした。また公式ホームページでは、トップページにあたる「本多流について」の内容を更新するとともに、お知らせ欄について、本多流射法の特徴や生弓斎文庫などの紹介も交えた基本的な構成を決め、行事ごとにタイムリーにお知らせ欄を更新する運用としました。年度後半からは新入会員の申込も増え、コロナの動向を気にしながらではありましたが、活性化への手応えを感じた一年でした。

■今年度の取り組み

何と言っても本会創立一〇〇周年の記念すべき年であり、記念事業を実施します。会報も特別編集とし、原点回帰ともいえる文献を掲載しました。この機会に本会の目的を再認識いただき、共に本多流弓道普及・継承の道を歩んでいきたいと思います。

令和四年度行事実施報告

月／日	開催	行事名	場所
1/30（日）	中止	「新年射会」 兼「大島盾争奪支部対抗戦」	明治神宮至誠館
2/20（日）	中止	第31回大学OB・OG射会	東京武道館
3/26（土）午前	○	追悼射会	東京武道館
3/26（土）午後 3/27（日）	○	臨時特別研修会 臨時連合審査	東京武道館
5/3（祝）	○	京都研修会 定期中央・連合審査 懇親会	京都外大西高校
6/25（土） 6/26（日）	○	合宿研修会 臨時中央・連合審査	野辺山 帝産ロッヂ
6～8月	○	第43回通信射会	各支部
7/23（土）	○	第11回遠的大会	東京武道館
10/1（土） 10/2（日）	○	中央研修会	明治神宮至誠館
11/下	中止	第51回大学対抗懇親射会	東京大学育徳堂
12/4（日）	○	納射会	東京武道館

【評議員会・理事会・運営委員会】

1．定時評議員会　2/12

2．定時理事会　2/12、12/10　　臨時理事会　6/11

3．運営委員会　2/12、4/9、6/11、8/6、10/8、12/10

個別行事実施報告

■新年射会・大島盾争奪支部対抗戦

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

■第三十一回大学OB・OG親善射会

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

代替行事として、関東地区自由稽古会を開催

場所　東京武道館

参加者：約20名

■追悼射会

今回の対象者：後閑縫之介氏、山本実氏、嶋久雄氏

日時　令和四年三月二六日（土）

一〇時～十二時三〇分

場所　東京武道館

参加者：25名

今年度の追悼射会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期となっていた令和二年度・令和三年度の追悼射会の対象者を含め、永年にわたり本会の発展に尽力された三名の方々を追善するため、二十六日午前中に会員二十五名が参加し執り行われました。

■臨時研修会　臨時連合審査

日時　令和四年三月二六日（土）

一三時～十六時三〇分

令和四年三月二十七日（日）

九時三〇分～一六時

場所　東京武道館

参加者：45名（二日間延べ）

臨時研修会は、同じく新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりこの二年間公式行事がほとんど開催出来ていなかったことから、政府対策の終了にあわせて特別に企画・開催したもので、二十六日午後・二十七日あわせて会員延四十五名が参加しました。研修は師範会による講義・模範演武に始まり、射技研修を中心に熱心な的前稽古が行われ、研修時間中、十二個の的がほとんど空かないほどの熱気でした。

連合審査では二名が受審し、師範会の審査により、それぞれの進境に応じた印可が本多流宗家から許されました。

■京都研修会　定期連合・中央審査

日時　令和四年五月三日（祝）
一〇時～十七時

場所　京都外大西高等学校　三条グラウンド弓道場

参加者：23名

京都研修会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、ここ二年中止となっていたことから三年ぶりの開催で、宗家はじめ二三名が参加しました。冒頭、印可授与式が行われ、過日の審査に合格した会員に対し宗家直筆の印可状が宗家から直接手渡されました。研修は宗家による講義に始まり、師範会による講義・模範演武、射技研修、体配研修と盛りだくさんの内容で、特に射技研修では本多流伝統の指導法である「弦取り」により、宗家自ら参加者の弦を取って指導されました。

中央・連合審査では五名が受審し、師範会の審査により、それぞれの進境に応じた印可が宗家から許されました。

■第四十三回通信射会

日時　令和四年六月一日（水）～八月二十一日（水）

■合宿研修会　臨時連合・中央審査

日時　令和四年六月二十五日（土）
十二時三〇分から
令和四年六月二十六日（日）
十四時まで

場所　帝産ロッヂ「洗心弓道場」

参加者：32名（二日間延べ）

合宿研修会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、ここ二年中止となっていたことから三年ぶりの開催で、宗家は欠席でしたが三十二名が参加しました。両日とも晴天に恵まれ、さすが日本一標高の高い駅がある野辺山、吹く風も爽やかで、高原での稽古を満喫しました。

初日は帝産ロッジ・亀岡寛治会長のご挨拶、宗家挨拶（代読）、師範代就任委嘱（代読）に始まり、三月および五月の研修資料の紹介、師範会による矢渡し、軽装・素足での稽古、班別射技研修（スマホやタブレットを活用した動画撮影、会員同士による相互案内）、師範会による案内、印可審査、洗

心弓道場の歴史と伝統に触れる見学会、二日目は師範会講話、師範会・東海支部・関西支部による繰大前披露、洗心洞稽古会支部による普段の稽古の再現披露など、充実の研修会となりました。

特に、洗心弓道場は本会および本多流にゆかりの深い道場であることから、軽装・素足での稽古の了解をいただき、当流ならではのしっかりとした足踏・胴造を修業することができました。

印可審査では一名が受審し、進境に応じた印可が許されました。

■第十一回遠的大会

日時　令和四年七月二十三日（土）
　　十時～十六時
場所　東京武道館
射数　二〇射
参加者：12名

遠的大会は夏の恒例行事として、今年で十一回目の開催となりました。参加者十二名と小規模な射会でしたが、夏の一日、遠的でさわやかな汗を流しました。また会員二名から景品の差し入れがありました。

成績　優　勝　吉田　隆一　十四中（東京）
　　準優勝　杉原　庸介　十三中（東京）
　　第三位　坂本　武彦　十中（洗心洞稽古会）
　　第四位　飯野雄一郎　八中（赤門）
　　第五位　吉村　圭史　七中（洗心洞稽古会）

■第四十三回通信射会

日時　令和四年六月～八月
場所　各支部で実施
射数　二〇射
成績　優　勝　John Bush　十五中（欧州）
　　準優勝　杉原　庸介　十五中（東京）
　　第三位　村上　英俊　十五中（東京外語大）
　　第四位　中村日出男　十四中（東京外語大）
　　第五位　道家　義将　十四中（東海）
　　十支部・一七九名参加　詳細別紙

令和４年　第43回通信射会

	支部名	優勝	的中	準優勝	的中	第３位	的中	第４位	的中	第５位	的中	参加人数
1	洗心洞稽古会	坂本　武彦	11	佐々木晴子	11	松永　芳栄	10	星野　保	9	綾戸　岩雄	8	10
2	東京	杉原　庸介	15	中橋　信子	13	土谷　芽衣	13	鈴木　丈雄	12	今泉　文雄	12	18
3	東京外語大学	村上　英俊	15	中村日出男	14	藤野　俊幸	11	伊藤　ゆり	11	仮屋　尊春	9	18
4	横浜	佐藤美左子(非)	12	金松　貴子	11	守屋　景子	10	山下(非)	9	門奈(非)	9	14
5	埼玉東部	村上　節子	13	杉山　浩子	12	勝俣　俊一	11	堀井　剛	11	桐野　登	10	10
6	埼玉西部	関口　二郎	13	野瀬　武博	8	ｼﾞｪﾝｶﾝ･ｹﾞﾘﾗﾃｨ(非)	7	西嶌　紘一	6	秋山貴美雄	8	11
7	東海（岐阜）	道家　義将	14	北原　修	13	森　祐太	12	小栗　一治	11	奥村　秀喜	8	12
8*9	関西・指月庵	坂口　洋一	13	阿部ゆかり	13	山岸　稔明	10	山下　博美	8	新本　恭子	8	9
10	欧州	John Carder Bush	15	Lilia Tiebina	13	Jan Urbanowski	13	Manfred Riemer	12	Stefan Brendel	12	79
												179

入賞者

総合順位	氏名	（年齢）	的中
優勝	John Carder Bush	73	15
準優勝	杉原　庸介	53	15
第３位	村上　英俊	44	15
第４位	中村日出男	70	14
第５位	道家　義将	35	14

※同中の場合は年齢順で決定

【参考】参加支部と参加人数の推移

開催年	参加支部	参加人数
平成29年	１０支部	２２６人
平成30年	１１支部	２２３人
令和元年	１１支部	２４９人
令和2年	中止	
令和3年	６支部	１２４人

■第四十四回中央研修会　講演・射技射礼研修

日時　令和四年十月一日（土）
　十三時三〇分～十六時
　令和四年十月二日（日）
　十時～十六時
場所　明治神宮至誠館
参加者：82名（二日間延べ）

中央研修会は昭和五十三年に本部研究会として第一回が開かれて以降、本会の最も重要な研修会として全国から会員が集い、毎年秋の恒例行事として開催されてきました。

第四十二回・第四十三回はコロナ禍のため中止となったため、今回は三年ぶりの開催となりました。初日は「講演」と題して宗家講話に始まり、師範講話、会員発表二件および支部発表一件が行われ、会員の日頃の研究の成果や支部の活動内容が報告されました。あわせて、印可認許者に対し宗家から印可状が授与されました。初日の参加者は三十九名でした。二日目は参加者四十三名、「射技射礼研修」として、師範会による矢渡ののち、模範演武、会員射礼、師範による射技講話、射技研修および射礼研修が行われました。二日間にわたり本多流弓道について射学・射技・射礼の各分野で研鑽を積むとともに、さわやかな秋晴れのなか、大いに弓を楽しみました。

講演の内容

講　話　本多利永宗家
　「本多流弓術の目的」
講　話　坂木武彦師範
　「日本の弓術」
会員発表　渡辺純平氏（洗心洞稽古会）
　「竹弓の扱い方」
会員発表　飯野雄一郎氏（赤門）
　「本多流を支える基本文献」
支部発表　小林圭支部長（東海）
　「射法本紀と太子流の由来」

■第五十一回大学対抗懇親射会

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

■納射会

日時　令和四年十二月四日（日）

十三時～十六時

場所　東京武道館

参加者：18 名（稽古会もあわせ延べ 34 名）

納射会には十八名が参加し、今年一年を締め括りました。また午前および夜間も自由稽古として会場を確保し、納射会参加者とあわせて延べ三十四名が今年最後の稽古に励みました。一方で奨励賞として景品の差し入れや、余興的も催され、楽しい射会でもありました。

令和五年度行事日程（案）

月／日	開催	行事名	場所
1/29（日）	○	「新年射会」 兼「大島盾争奪支部対抗戦」（＊1）	明治神宮至誠館
2/12（日）	○	第32回大学OB・OG射会	東京武道館
4/2（日）	◆	追悼射会	渋谷区スポーツセンター
5/3（祝）	◆	京都研修会（＊2） 定期中央・連合審査（印可制限なし） 懇親会（＊4）	京都外大西高校
6/24（土） 6/25（日）	◆	合宿研修会（＊2） 臨時中央・連合審査	笹川 土善旅館
6～8月	◆	第44回通信射会	各支部
7/22（土）	◆	第12回遠的大会	東京武道館
10/28（土） 10/29（日）	◆	創立100周年記念事業（＊3） 1日目：講演会、祝賀会 2日目：射会	講演会：未定 祝賀会：帝国ホテル 射会：明治神宮至誠館第二弓道場
未定		研修会、臨時連合・中央審査 （外国人会員対象）（＊5）	上岐：久尻神社弦武館
11/下		第52回大学対抗懇親射会	東京武道館
12/中		定期中央・連合審査（印可制限なし） 納射会、稽古会	東京武道館
未定		師範研修会	未定
未定		指導者錬成研修会（単独実施）	未定
未定(令和6年)		研修会、臨時審査(＊6)	

【評議員会・理事会・運営委員会】　いずれもオンライン会議

1．定時評議員会　2/11　9時30分頃より（定時理事会終了次第）
2．定時理事会　2/11、12/9　いずれも9時より
3．運営委員会　2/11、4/8、6/11、8/5、10/14、12/9　いずれも午前中

【備考】

＊1．非会員の参加：新年射会については、原則、会員限定とする。
　　以降の行事については、各会場の人数制限を踏まえ別途検討する。
＊2．指導者錬成研修会：各研修会において、指導者錬成の研修を行う。
＊3．創立100周年記念事業のため、中央研修会は行わない。
＊4．新型コロナウイルスの感染症法上の分類見直しが決定したことから、本部行事として行う。
＊5．創立100周年記念事業の日程に合わせて行なう。
＊6．第4回世界弓道大会(令和6年2月29日：名古屋市)に合わせ検討する。

個別行事実施報告

■新年射会・大島盾争奪支部対抗戦

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

■第三十一回大学OB・OG親善射会

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

代替行事として、関東地区自由稽古会を開催

場所　東京武道館

参加者：約20名

■追悼射会

今回の対象者：後閑縫之介氏、山本実氏、嶋久雄氏

日時　令和四年三月二六日（土）

一〇時～十二時三〇分

場所　東京武道館

参加者：25名

今年度の追悼射会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期となっていた令和二年度・令和三年度の追悼射会の対象者を含め、永年にわたり本会の発展に尽力された三名の方々を追善するため、二十六日午前中に会員二十五名が参加し執り行われました。

■臨時研修会　臨時連合審査

日時　令和四年三月二六日（土）

一三時～十六時三〇分

令和四年三月二十七日（日）

九時三〇分～一六時

場所　東京武道館

参加者：45名（二日間延べ）

臨時研修会は、同じく新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりこの二年間公式行事がほとんど開催出来ていなかったことから、政府対策の終了にあわせて特別に企画・開催したもので、二十六日午後・二十七日あわせて会員延四十五名が参加しました。研修は師範会による講義・模範演武に始まり、射技研修を中心に熱心な的前稽古が行われ、研修時間中、十二個の的がほとんど空かないほどの熱気でした。

連合審査では二名が受審し、師範会の審査により、それぞれの進境に応じた印可が本多流宗家から許されました。

■京都研修会　定期連合・中央審査

日時　令和四年五月三日（祝）
一〇時～十七時

場所　京都外大西高等学校　三条グラウンド弓道場

参加者：23名

京都研修会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、ここ二年中止となっていたことから三年ぶりの開催で、宗家はじめ二三名が参加しました。冒頭、印可授与式が行われ、過日の審査に合格した会員に対し宗家直筆の印可状が宗家から直接手渡されました。研修は宗家による講義に始まり、師範会による講義・模範演武、射技研修、体配研修と盛りだくさんの内容で、特に射技研修では本多流伝統の指導法である「弦取り」により、宗家自ら参加者の弦を取って指導されました。

中央・連合審査では五名が受審し、師範会の審査により、それぞれの進境に応じた印可が宗家から許されました。

■第四十三回通信射会

日時　令和四年六月一日（水）～八月二十一日（水）

■合宿研修会　臨時連合・中央審査

日時　令和四年六月二十五日（土）
十二時三〇分から
令和四年六月二十六日（日）
十四時まで

場所　帝産ロッヂ「洗心弓道場」

参加者：32名（二日間延べ）

合宿研修会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、ここ二年中止となっていたことから三年ぶりの開催で、宗家は欠席でしたが三十二名が参加しました。両日とも晴天に恵まれ、さすが日本一標高の高い駅がある野辺山、吹く風も爽やかで、高原での稽古を満喫しました。

初日は帝産ロッジ・亀岡寛治会長のご挨拶、宗家挨拶（代読）、師範代就任委嘱（代読）に始まり、三月および五月の研修資料の紹介、師範会による矢渡し、軽装・素足での稽古、班別射技研修（スマホやタブレットを活用した動画撮影、会員同士による相互案内）、師範会による案内、印可審査、洗

心弓道場の歴史と伝統に触れる見学会、二日目は師範会講話、師範会・東海支部・関西支部による繰大前披露、洗心洞稽古会支部による普段の稽古の再現披露など、充実の研修会となりました。

特に、洗心弓道場は本会および本多流にゆかりの深い道場であることから、軽装・素足での稽古の了解をいただき、当流ならではのしっかりとした足踏・胴造を修業することができました。

印可審査では一名が受審し、進境に応じた印可が許されました。

■第十一回遠的大会

日時　令和四年七月二十三日（土）
　　十時～十六時
場所　東京武道館
射数　二〇射
参加者：12名

遠的大会は夏の恒例行事として、今年で十一回目の開催となりました。参加者十二名と小規模な射会でしたが、夏の一日、遠的でさわやかな汗を流しました。また会員二名から景品の差し入れがありました。

成績　優　勝　吉田　隆一　十四中（東京）
　　準優勝　杉原　庸介　十三中（東京）
　　第三位　坂本　武彦　十中（洗心洞稽古会）
　　第四位　飯野雄一郎　八中（赤門）
　　第五位　吉村　圭史　七中（洗心洞稽古会）

■第四十三回通信射会

日時　令和四年六月～八月
場所　各支部で実施
射数　二〇射
成績　優　勝　John Bush　十五中（欧州）
　　準優勝　杉原　庸介　十五中（東京）
　　第三位　村上　英俊　十五中（東京外語大）
　　第四位　中村日出男　十四中（東京外語大）
　　第五位　道家　義将　十四中（東海）
　　十支部・一七九名参加　詳細別紙

令和４年　第43回通信射会

	支部名	優勝	的中	準優勝	的中	第３位	的中	第４位	的中	第５位	的中	参加人数
1	洗心洞稽古会	坂本　武彦	11	佐々木晴子	11	松永　芳栄	10	星野　保	9	綾戸　岩雄	8	10
2	東京	杉原　庸介	15	中橋　信子	13	土谷　芽衣	13	鈴木　丈雄	12	今泉　文雄	12	18
3	東京外語大学	村上　英俊	15	中村日出男	14	藤野　俊幸	11	伊藤　ゆり	11	仮屋　尊春	9	18
4	横浜	佐藤美左子(非)	12	金松　貴子	11	守屋　景子	10	山下(非)	9	門奈(非)	9	14
5	埼玉東部	村上　節子	13	杉山　浩子	12	勝俣　俊一	11	堀井　剛	11	桐野　登	10	10
6	埼玉西部	関口　二郎	13	野瀬　武博	8	ｼﾞｪﾝｶﾝ･ｹﾞﾘﾗﾃｨ(非)	7	西嶌　紘一	6	秋山貴美雄	8	11
7	東海（岐阜）	道家　義将	14	北原　修	13	森　祐太	12	小栗　一治	11	奥村　秀喜	8	12
8*9	関西・指月庵	坂口　洋一	13	阿部ゆかり	13	山岸　稔明	10	山下　博美	8	新本　恭子	8	9
10	欧州	John Carder Bush	15	Lilia Tiebina	13	Jan Urbanowski	13	Manfred Riemer	12	Stefan Brendel	12	79
												179

入賞者

総合順位	氏名	（年齢）	的中
優勝	John Carder Bush	73	15
準優勝	杉原　庸介	53	15
第３位	村上　英俊	44	15
第４位	中村日出男	70	14
第５位	道家　義将	35	14

※同中の場合は年齢順で決定

【参考】参加支部と参加人数の推移

開催年	参加支部	参加人数
平成29年	１０支部	２２６人
平成30年	１１支部	２２３人
令和元年	１１支部	２４９人
令和2年	中止	
令和3年	６支部	１２４人

■第四十四回中央研修会　講演・射技射礼研修

日時　令和四年十月一日（土）
　十三時三〇分～十六時
　令和四年十月二日（日）
　十時～十六時
場所　明治神宮至誠館
参加者：82名（二日間延べ）

中央研修会は昭和五十三年に本部研究会として第一回が開かれて以降、本会の最も重要な研修会として全国から会員が集い、毎年秋の恒例行事として開催されてきました。

第四十二回・第四十三回はコロナ禍のため中止となったため、今回は三年ぶりの開催となりました。初日は「講演」と題して宗家講話に始まり、師範講話、会員発表二件および支部発表一件が行われ、会員の日頃の研究の成果や支部の活動内容が報告されました。あわせて、印可認許者に対し宗家から印可状が授与されました。初日の参加者は三十九名でした。二日目は参加者四十三名、「射技射礼研修」として、師範会による矢渡ののち、模範演武、会員射礼、師範による射技講話、射技研修および射礼研修が行われました。二日間にわたり本多流弓道について射学・射技・射礼の各分野で研鑽を積むとともに、さわやかな秋晴れのなか、大いに弓を楽しみました。

講演の内容

講　話　本多利永宗家
　「本多流弓術の目的」
講　話　坂木武彦師範
　「日本の弓術」
会員発表　渡辺純平氏（洗心洞稽古会）
　「竹弓の扱い方」
会員発表　飯野雄一郎氏（赤門）
　「本多流を支える基本文献」
支部発表　小林圭支部長（東海）
　「射法本紀と太子流の由来」

■第五十一回大学対抗懇親射会

新型コロナウイルス感染拡大のため中止

■納射会

日時　令和四年十二月四日（日）

十三時～十六時

場所　東京武道館

参加者：18 名（稽古会もあわせ延べ 34 名）

納射会には十八名が参加し、今年一年を締め括りました。また午前および夜間も自由稽古として会場を確保し、納射会参加者とあわせて延べ三十四名が今年最後の稽古に励みました。一方で奨励賞として景品の差し入れや、余興的も催され、楽しい射会でもありました。

令和五年度行事日程（案）

月／日	開催	行事名	場所
1/29（日）	○	「新年射会」 兼「大島盾争奪支部対抗戦」（＊1）	明治神宮至誠館
2/12（日）	○	第32回大学OB・OG射会	東京武道館
4/2（日）	◆	追悼射会	渋谷区スポーツセンター
5/3（祝）	◆	京都研修会（＊2） 定期中央・連合審査（印可制限なし） 懇親会（＊4）	京都外大西高校
6/24（土） 6/25（日）	◆	合宿研修会（＊2） 臨時中央・連合審査	笹川 土善旅館
6～8月	◆	第44回通信射会	各支部
7/22（土）	◆	第12回遠的大会	東京武道館
10/28（土） 10/29（日）	◆	創立100周年記念事業（＊3） 1日目：講演会、祝賀会 2日目：射会	講演会：未定 祝賀会：帝国ホテル 射会：明治神宮至誠館第二弓道場
未定		研修会、臨時連合・中央審査 （外国人会員対象）（＊5）	上岐：久尻神社弦武館
11/下		第52回大学対抗懇親射会	東京武道館
12/中		定期中央・連合審査（印可制限なし） 納射会、稽古会	東京武道館
未定		師範研修会	未定
未定		指導者錬成研修会（単独実施）	未定
未定(令和6年)		研修会、臨時審査(＊6)	

【評議員会・理事会・運営委員会】　いずれもオンライン会議

1．定時評議員会　2/11　9時30分頃より（定時理事会終了次第）
2．定時理事会　2/11、12/9　いずれも9時より
3．運営委員会　2/11、4/8、6/11、8/5、10/14、12/9　いずれも午前中

【備考】

＊1．非会員の参加：新年射会については、原則、会員限定とする。
　　以降の行事については、各会場の人数制限を踏まえ別途検討する。
＊2．指導者錬成研修会：各研修会において、指導者錬成の研修を行う。
＊3．創立100周年記念事業のため、中央研修会は行わない。
＊4．新型コロナウイルスの感染症法上の分類見直しが決定したことから、本部行事として行う。
＊5．創立100周年記念事業の日程に合わせて行なう。
＊6．第4回世界弓道大会(令和6年2月29日：名古屋市)に合わせ検討する。

個別行事実施要領（計画）

年度事業計画に基づき個別の行事実施要領をお知らせします。ただし、新年射会を除き令和五年二月の評議員会・理事会時点での計画ですので、各行事の企画の紹介としてご理解ください。実際の開催にあたっては、会場の都合等で日程や内容が変更になる場合があります。その際は、お申込みいただいた方々に個別にお知らせするとともに、公式ホームページやfacebook会員限定ページに最新情報を掲載しますので、あわせてご覧ください。

■本会の新型コロナウイルス対策について

いまだ新型コロナウイルスの感染が続いています。具体的な感染防止対策については会場が指定する対策を遵守することは当然のこととして、本会としての行事開催に関する基本的な考え方をお知らせします（令和三年四月十日運営委員会申し合わせ）。

新型コロナウイルス等の感染症対策に関する件

常務理事　飯野雄一郎

業務執行理事　（業務部）片岡　泰輔

新型コロナウイルス等の感染症流行期の、事業実施についての対策を下記の通り定める。

記

一、運営委員会において、感染状況を十分に把握し、事業開催・中止を適切に判断する。

なお、開催の判断は一カ月前迄に行うものとする。

二、開催を決定していた行事について、感染状況の拡大等により状況が変化した場合には、理事長・常務理事・業務部長の協議により延期または中止を決定する。

三、支部行事に関しては支部において適切に判断を行うものとする。

四、事業実施にあたっては、十分な感染予防対策を講じるものとする。

五、新型コロナウイルス流行期における感染予防対策を以下の通り原則として定める。

（一）政府による緊急事態宣言等が発令されている場合は事業を延期または中止する。

なお、自治体による独自の緊急事態宣言発令時につ

いては別途協議を行う。

(二) 参加予定者に対して、事前に体調管理に努めることを要請するとともに、新型コロナウイルスの症状が見られる場合については、参加をご遠慮いただくことについて周知徹底する。

【東京武道館の例】

当日及び利用前二週間において以下の事項に該当する場合は、参加を見合わせて下さい。

- 体調がよくない場合(例:発熱・咳・咽頭痛・倦怠感、息苦しさ・体が重いと感じる・疲れやすいなどの症状がある場合)
- 嗅覚や味覚に異常のある方
- 同居家族や身近な知人に感染が疑われる方がいる場合
- 過去十四日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等へ渡航又は該当在住者との濃厚接触がある場合

(三) 事業実施当日、参加者来場時に検温、手洗い・アルコールによる消毒を実施する。検温の結果、三十七度を超える発熱がある場合は参加をお断りする。

(四) 事業実施中は、ソーシャルディスタンスに配慮するとともに、マスク等の着用を義務づけるとともに、大声での会話を控える。但し行射にあたってはこの限りではない。

(五) 指導者は、射手との対人距離に留意し、アルコールによる手洗いを行うとともに、マスクを着用する。

(六) 事業実施時の会食は行わない。また、事業主催者による弁当の配給・手配等は行わない。

(七) 参加者は、事業終了後に感染が判明した場合には、速やかに本部に届け出るものとする。

以上

行事開催にあたっての共通事項

■注意事項

- 開催当日に撮影した写真はウェブサイト等で掲載される可能性があります。あらかじめご了承ください

・昼食は各自でご準備ください
・ゴミは必ず持ち帰ってください
・目録以上の印可受有者で、将来指導者として当流を支える強い意志を有する方は、宗家による指導者錬成研修を受講することが出来ます。別途ご案内を差し上げる予定です。
・会場の指定する新型コロナウイルス感染防止対策を遵守してください。
・新型コロナウイルス感染拡大の場合の中止の判断については、理事長・常務理事・業務部長の判断により決定します。

■連絡先・問合せ先

本多流生弓会事務局　常務理事　飯野雄一郎
または各業務部理事・運営委員
電子メール　event@hondaryu.net

■新年射会・大島盾争奪支部対抗戦

日時　令和五年一月二十九日（日）
　一〇時～十六時
場所　明治神宮至誠館弓道場
　東京都渋谷区代々木神園町一―一
集合　役員集合　八時五〇分
　受付開始　九時十五分
　射会開始　一〇時
会費　二、〇〇〇円（学生一、〇〇〇円）
次第　印可状授与
　巻藁射禮…本多利永宗家
　繰大前…師範会
　組立
　支部対抗戦
　余興的

■第三十二回大学OB・OG親善射会

本多流三世本多利生宗家の発案で開始されることとなった大学OB・OG親善射会です。本会の学校弓道普及活動の

一環でもあります。母校の栄誉のために奮闘努力した日々を思い返しつつ、旧交を温める機会となることを期待しています。また、これを機に本多流で弓道を再開したいという方をお待ちしています。

日時　令和五年二月十二日（日）
　一〇時～一七時
場所　東京武道館
　東京都足立区綾瀬三―二〇―一
集合　役員集合　八時三〇分
　受付開始　九時十五分
　射会開始　一〇時
会費　一、〇〇〇円
次第　矢渡…師範会
　競技　団体の部
　競技　トーナメントの部
　余興的

※大会中止の場合、関東地区研修会を開催予定

■追悼射会

会員の物故者のうち、本会の活動に大きな貢献をされた会員を対象として「追悼射会」を開催しています。

今回の対象者　茎田実氏
日時　令和五年四月二日（日）
場所　渋谷区スポーツセンター
　東京都渋谷区西原一―四〇―一八
集合　役員集合　十三時
　受付開始　十三時三〇分
　射会開始　十四時
会費　一、〇〇〇円
次第　黙祷
　（以下詳細未定）
　巻藁射禮…本多利永宗家
　矢渡…師範会
　追善射禮
　物故者関係者挨拶

■京都研修会　定期中央・連合審査（印可制限なし）

全日本弓道連盟の京都大会等と期を一にして、京都研修会を開催します。当流の射術の「十分な矢束を取り、緩みない離れで、鋭い矢を飛ばす」事をテーマに研修を行います。また、目録以上で希望する方を対象に宗家による指導者錬成研修も同時に行います。定期連合・中央審査も実施します。研修会終了後は懇親会も開催します。

日時　令和五年五月三日（祝）
　一〇時～十七時

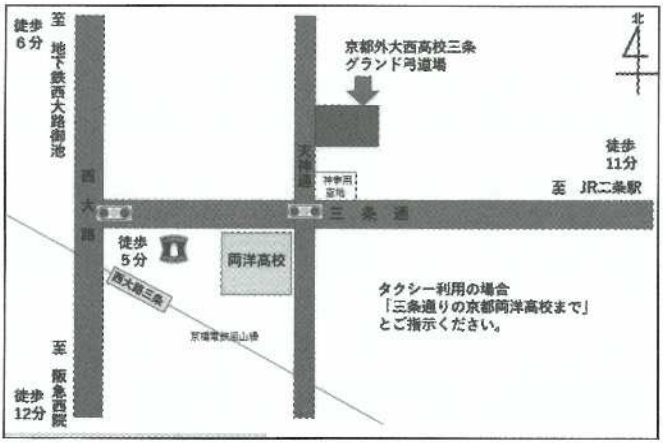
場所　京都外大西高等学校　三条グラウンド弓道場
　京都府京都市右京区山ノ内苗町三七
　※高校のキャンパスではありません

集合　役員集合　九時
　受付開始　九時十五分
　研修開始　一〇時

会費　二、〇〇〇円（学生一、〇〇〇円）

次第　本書第一巻序唱和
　矢渡…師範会
　繰大前・組立等

射技研修・射禮研修
連合・中央審査（初伝～免許）



▼印可審査申し込み要領

①印可審査受審希望の方は三月五日（日）までに師範会事務局長（尾木）ogi@kwansei.ac.jp まで、電子メールにてご連絡ください。師範会事務局より、受審可否について折り返し連絡を差し上げます（行事申込書で申込をされた方についても、改めてご連絡をお願いします）。

②印可審査受審を許可された方は、印可審査申込書と論文（小目録以上）は四月二日（日）までに以下宛に郵送してください。論文テーマは会報に掲載の内容です。

郵送先　〒665-0063
兵庫県宝塚市仁川高丸一―八―八　指月庵
尾木紹学　宛
電話　〇九〇―五〇六一―四七二六
電子メール　ogi@kwansei.ac.jp

※表面に「印可審査申込書在中」と朱書きください

③審査料（別掲）は当日受付にてお支払いください。

④審査終了後、合格者には、登録料（別掲）を当日お支払いいただきますので、必ずご持参ください。

■第四十四回通信射会

恒例の通信射会です。新型コロナウイルス感染拡大によりオンライン弓道大会が盛んに行われるようになりました。本会の通信射会は、その先駆けともいえるものです。国内外の会員の皆さまのご参加をお待ちしています。

日時　令和五年六月～八月
場所　各支部で定める
射数　二〇射（四ツ矢五回）

■合宿研修会　臨時中央・連合審査（印可制限なし）

恒例の合宿研修会を今年度はおなじみ関東の土善旅館で開催します。合宿ならではの夜の懇親会では、会員相互の親睦を深めるとともに、先達の方々から本多流についての貴重なお話を聞くこともできます。また、臨時連合・中央審査を実施する予定です。

日時　令和五年六月二十四日（土）
十二時三〇分から
令和五年六月二十五日（日）
十四時まで
場所　土善旅館
千葉県香取郡東庄町笹川い六二四

http://www.dozenryokan.com

集合　六月二十四日（土）十二時三〇分

会費　宿泊費　一四、〇〇〇円

参加費　二、〇〇〇円

▼一日目

次第　矢渡…師範会

射技研修

体配研修

自由稽古

▼二日目

次第　早朝稽古

模範演武…師範会

臨時中央・連合審査

射禮研修

射技研修

自由稽古

▼研修趣旨

稽古においては、「洋服」のままで行射いただきます。体の動きが良く見えることで、師範会の効果的な案内（指導）を行うためです。また、参加者自身も自分の射を自分自身で確認できるようにするためです。足踏の重要性を理解いただくためにも「裸足」で行射いただきます。射技においては、本多流の特徴である「十分な矢束を取って緩みない離れで

鋭い矢を飛ばす」ためには、足踏、胴造が重要であることを体感し、参加者に気付きがあることを期待しています。

▼印可審査申し込み要領

①印可審査受審希望の方は四月三十日(日)までに師範会事務局長(尾木) ogi@kwansei.ac.jp まで、電子メールにてご連絡ください。師範会事務局より、受審可否について折り返し連絡を差し上げます(行事中込書で申込をされた方についても、改めてご連絡をお願いします)。

②印可審査受審を許可された方は、印可審査申込書と論文(小目録以上)は五月二十八日(日)までに以下宛に郵送してください。論文テーマは会報に掲載の内容です。

郵送先　〒665-0063
兵庫県宝塚市仁川高丸一―八―八　指月庵
尾木紹孚　宛
電話　〇九〇―五〇六一―四七一六
電子メール　ogi@kwansei.ac.jp

※表面に「印可審査申込書在中」と朱書きください

③審査料(別掲)は当日受付にてお支払いください。

④審査終了後、合格者には、登録料(別掲)を当日お支払いいただきますので、必ずご持参ください。

■第十二回遠的大会

日時　令和五年七月二十二日(土)
場所　東京武道館
　東京都足立区綾瀬三―二〇―一
集合　役員集合　八時三〇分
　受付開始　九時十五分
　射会開始　十時
会費　一、〇〇〇円
射数　二〇射(四ツ矢五回)
※終了後、自由稽古

■創立一〇〇周年記念講演会・祝賀会

日時　令和五年十月二十八日(土)に都内で開催予定

(詳細未定、別途案内)

■創立一〇〇周年記念射会

日時　令和五年十月二十九日(日)に明治神宮で開催予定

(詳細未定、別途案内)

■第五十二回大学対抗懇親射会

本会の目的とする、学校弓道の普及と発展に寄与するため、恒例の大学対抗懇親射会を開催します。大学弓道部の学生の皆さんのご参加をお待ちしています。

日時　令和五年十一月下旬（詳細未定、別途案内）
　一〇時～
場所　東京武道館
　東京都足立区綾瀬三―二〇―一
集合　九時三〇分
射数　一チーム五名、計四〇射（四ツ矢二回）

■定期中央・連合審査（印可制限なし）

日時　令和五年十二月中旬（詳細未定、別途案内）
　九時～十二時
場所　東京武道館
　東京都足立区綾瀬三―二〇―一
集合　役員集合　九時
　受付開始　九時十五分

▼印可審査申し込み要領

①印可審査受審希望申込は十月十五日（日）までに師範会事務局長（尾木）ogi@kwansei.ac.jp まで、電子メールにてご連絡ください。師範会事務局より、受審可否について折り返し連絡を差し上げます（行事中込書で申込をされた方についても、改めてご連絡をお願いします）。

②印可審査受審を許可された方は、印可審査申込書と論文（小目録以上）を十一月十二日（日）までに以下宛に郵送してください。論文テーマは会報に掲載の内容です。

郵送先　〒665-0063
　兵庫県宝塚市仁川高丸一―八―八　指月庵
　尾木紹学　宛
　電話　〇九〇―五〇六一―四七一六
　電子メール　ogi@kwansei.ac.jp

※表面に「印可審査申込書在中」と朱書きください

③審査料（別掲）は当日受付にてお支払いください。

④審査終了後、合格者には、登録料（別掲）を当日お支払いいただきますので、必ずご持参ください。

■納射会

日時　令和五年十二月中旬（詳細未定、別途案内）
　十三時～十六時

場所　東京武道館
　東京都足立区綾瀬三―二〇―一
集合　役員集合　十二時
　受付開始　十二時三〇分
会費　一、〇〇〇円
次第　矢渡…師範会
　射禮
　納射
※終了後、夜間自出稽古会あり

■行事案内での電子メール活用のお願い

電子メールは　①速報性　②費用面　③送付・集計等の業務効率　の面で、郵送よりも優れている面があります。特に、新型コロナウイルスの感染状況によって、急遽、行事が中止となった場合など、緊急性が求められる場合に威力を発揮します。また、送付にかかる費用も年々増加しており、出費が少ない点も大きなメリットです。

会員の皆さまにおかれましては、可能な限りで結構ですので、電子メールでの案内への切り替えをご検討いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

■電子メールへの切り替え申込方法

本会の公式メールアドレスへご一報ください。
info@hondaryu.net

■行事専用メールアドレス

行事への参加お申込みやお問い合わせの際は、次のメールアドレスへご一報ください。
event@hondaryu.net

令和四年度　研修総括

師範会事務局

■令和四年度の研修主題
「十分な矢束をとって緩みない離から鋭い矢を飛ばす」

本年度の研修の主題は当流の特徴である「十分な矢束をとって緩みない離から鋭い矢を飛ばす」と設定した。その上で、この主題の意義について「本多流弓術の目的」をキーワードとして、門人各位に問いかけることに力を注いだ。

京都研修会（五月）、中央研修会（十月）においては宗家より「本多流弓術の目的」について、臨時研修会（三月）、中央研修会においては坂本師範による「弓術の目的」について、京都研修会においては尾木師範代より「流派の目的による射術の特徴」について講義が行われた。

■本多流弓術の目的

流祖本多利実翁は「今の射は応永時代より日置弾正政次と称せし人の、此伎芸熟心人の賭的に利益ある所の工夫、且花形ちといひて姿勢の美しき所を賞翫せし物の余波の残りしもの、其上慶長頃より一種の堂射という変化物出来しものの混合物なり。」と申されている。

『射法正規　上巻　全体論』流祖　本多利實

（現代語意訳）「今の射は応永時代（室町時代一三九四年～一四二八年）で、日置弾正政次という、弓術の中興の祖が的中に役立つ工夫とともに、花形といって射姿の美しいところを重んじた流れにあって、その上で、慶長（一五九六年か

流祖　会・離・残身
離で押手はぶれることなく、
弓が真直に立っている。

ら一六一五年）頃から盛んになった堂射（通し矢）という新たな射術とが混じり合ったものである。」

正面に打起し大三をとる射法（七道）に、堂射の技法を採り入れ（道具も堅帽子の四つ弾、強弓、竹林矢、押手弾を用いる）、十分な矢束を取り、緩みない離れで鋭い矢を飛ばし的中せしめる（矢早・中り）とともに、調和のとれた美しい射姿（花形）を体現することが本多流弓術の目的と言ってよいであろう。

この点について、門人各位が共通の認識を持って、稽古に取り組んで頂く事が、本年度の研修の狙いであった。残念ながら新型コロナウィルス感染拡大が続いており、研修参加者数は感染拡大前の水準には及んでいないため、次年度以降も引き続きこの主題を通じて、本多流弓術の目的への理解を深めていきたい。

【研修資料】

■本多流弓術の目的

本多流四世　本多利永

『弓術の改良に就て』―本多利實―～『射道』第五二号

以上述べた通り私の改良の大眼目と中すのは二つであります。即ち一は教授の方法なのであります。即ち達成的に上手になれる方法は一々手を取り弓と弦とを持ちて教えるという事であります。其の二は射法の統一であります。

『弓學講義』―本多利實―

第一に、弓は人の品行徳行を見る具に適当であろうと思います。是は今日始めて発明せる事ではありませぬ。既に古に於いて諸官員を選ぶに観射式によって登用し、支那にても人の徳行を見る事弓によりたる事あり。―中略―

第二には、体育の一端となる。鍛錬すれば体も自然に壮健になる。弓は実に適宜なる運動になるという事は既に医家にていうところにて、体育になり、又三に衛生の法となり、体の諸器官丈夫になる。実際其則は少なからず。将来弓の用として行うべきところは右の三条、品行体育衛生なるべし。

『竹林射法大意』―屋代鉞三―（やしろじょうぞう）

弓術は古来、武士道と終始せし特長ある技芸なるを以て、これを学びて尚武の気風を修め、剛健の精神を養い、沈着の意思を練り、且つ優雅の動作に倣いて自己の向上に資するは、文弱軽佻に流るる今日の社会状態に在りては識者の正に鼓吹、躬行に努むべき所なり。換言すれば、弓術は正心、養気の術として現時に在りて充分の価値あるものなり。

『本多流弓道』―碧海康温―

弓は今は全く、武事、或は狩猟の武器たる要素を失って、弓道は心身鍛錬の目的をもって、その術を修める時代になった。而してその技術に於ては、その三要素たるべき、

一、　中り
二、　矢早
三、　正しき射形

は、弓道修業上一つも欠くことを許さざるもので、徒らに中りをのみ望んで、弱き弓をもって的に中つる事のみに専心して、姿勢、態度を顧みざるは邪道の甚しきものにして、また徒らに儀礼、姿勢の末節に走り、又は強き弓力に誇って、中りを忘れたるものも、邪道たるは明らかなるものである。

又、技術の修業と共に、弓道の理論を学び、精神の修養を兼ね修むるにあらざれば、決して真に弓道を学びたりとはいうを得ざるものである。

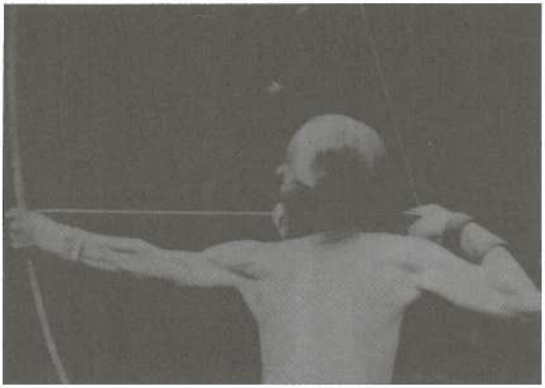
『弓術の医学的常識』―高木棐―

弓術は精神的方面を切り離しては、体育として最良の者と申す事は如何かと考えられます。其目的の為に考案された、体操の或種の者が勝って居るのではないでしょうか。只弓術は体育であると同時に、徳育其者であり、且高尚なる趣味となる点が体操の及ばない点と思います。他の何者よりも勝れている点と考えられます。

『本多流』―高木棐―

調和という事は美しい事です。両拳だけの調和であっても美しいし、又的中も生れます。一歩進んで両拳に両肩、胸が仲間入りした横軸の調和ができると美しさは更に増し、幾分の安定感が生れ、的中も増加します。尚更に一段と進ん

でこの上に縦軸（頭、胸、胴、足）が加わった調和が出来ると、始めて射の本筋（正道）に入ってきたわけで、益々美しく安定し、的中も確実となって来ます。更に此の上精神の働き、心の働きが加わると、射が生きて来るのです。生命のある射が生れて来るのです。調和は妥協であってはいけません。—中略—



流祖　裸形　会（背面）
肩胛骨は開いた状態でV字に働いている。
十分な矢束を取って、弓と体が極限まで近づいている。

気品ある香りの高い射が生れるか、俗悪な射が生れるか、平凡な射が生れるかは、射手の心の働き、人間性、人格等によるもので技術だけではないでしょう。気品の高い、香りの高い、生きた射が生れて来るよう努めていただきたいものであります。—中略—

東京帝国大学弓術部に掲げてあった綱領

“射は剛健典雅を旨とし、精神の修養と肉体の錬磨とを以て目的と為す。”

■「日本の弓術」（項目のみ）

師範　坂本武彦

各論

①射法・射術の必要性

・どのような矢を飛ばすか（飛中貫久）

・七道は「日置氏発明以来の射術なり」

②流派とは

・「（各流派）射形骨法日置の発明する処に拠らざるなし」

・五射六科「射に真行草あり」

・「射は剛健典雅を旨とし、精神の修養と肉体の錬磨とを以て目的とす。」

・「地球一周して的に中る矢を飛ばせ」高木先生

・「十分な矢束を取って緩みない離れで鋭い矢を飛ばす」

③射術の基本

・「先一本の矢を射んと欲するには、前に述し七道を連続して行ふなれば、夫々に教えあるを連続して一本の射成立なり」

・「弓は（中略）正法と心法との二つ和合して初めて業終わると知るべし」

④骨法論

・目的にあった射とは

・弓具との兼ね合い

・自分の体を使った行射とは（足踏・胴造・重心の移動・縦線）

・両肩の扱い・肩甲骨の扱い（弓と体の一体化）

二世宗家　会（背面）
流祖同様に肩胛骨が開いている。
左腰の働きが見て取れる。

令和五年度の研修について

令和四年度の研修主題
「十分な矢束をとって緩みない離から鋭い矢を飛ばす」

令和五年度の研修についても、引き続き「十分な矢束を取り緩みない離から鋭い矢を飛ばす」ことを主題として、「本多流弓術の目的」についての理解を深めていきたい。

また、本多流弓術を体現するための射術について研鑽を深めていく必要がある。特に、十分な矢束を取るために、足踏・胴造の基本を体得して頂き、宗家・師範会の弦取によって、弦道を覚えて頂くことが重要であると考えている。

流祖による弦取
流祖により考案創始された教授法として『弓道及弓道史』浦上榮・斎藤直芳著に紹介されている。

指導者錬成研修会について

本多流四世宗家　本多　利永

昨年度より、本多流生弓会では、新たに「指導者錬成研修会」を開設いたしました。開催の趣旨は、本多流の次期指導者の育成と、宗家の下に師範会や次期指導者の方々が一つになって当流隆盛のために一致団結頂くことにあります。

目録以上の印可を受有し将来指導者として当流を支える強い意志を有する方に、京都特別研修会、合宿、中央研修会や特別に開催する研修会において私から直接の案内を受けて頂きたいと考えております。

ご存知の通り、「日録」はその印可において「心技自師賢覚の境に至った者」とされています。白師賢覚とは、日置流竹林派においては八字五位の受、智、修学、白師、賢覚の最高位に位置付けられているものです。二世利時は「射は始め良師に就いて正しい射法を教はる事が必要でありますが、真の身心統一の境地を味得して真の自己の射となし、自己を発揮するには宜しく平静に真摯に自分が一人で行射しながらも亦自己で批判して行くことが必要であります。これこそ真理と理想と体験と一致した時の悟りが必要であって、これを自師賢覚と申します。」と説いています。この日録の位、さらに一段上の中王の位にある方々に、研修を通じて、「清澄円満」、「精心感通」のさらなる高い位に至ること、そして将来「斯道執心」の良き案内者になって頂くことを期待して実施するのが指導者錬成研修会です。

しかしながら、研修をただ受講したからと言っても、必ずや日指す位に至るわけではありません。宗家、師範、師範代はあくまでも案内者であり、皆さん自らが蘊奥に至ろうとする強い意志と鍛錬が必要となることは言うまでもありません。これまで以上に、射技、射禮、射學は勿論のこと弓器の扱いに至るまで研鑽を深め、皆さん自身が案内者になって頂くことを期待しています。

また、研修では印可を允許する私、そして審査に携わる師範会が皆さんの弓の位の進境を拝見する場でもあります。私や師範、師範代の先生方から、位に相応しい力を身に付けたので、印可審査を受けてはどうかとの進言があるまで、修学水鉄の如く、粘り強く、稽古に励んで頂きたいと思います。

皆さんの積極果敢な挑戦をお待ちしています。

本多流印可定め書

道を求め当流に志すを以て初めとし　稽古に勤め射学を修しその技壮
道半ばなれど射品生じ道の蘊奥に至らむとし　当流の隆盛に心する者には印可すべし

一、初伝　入門　当流の修行を志したる者
二、修学　射技骨法に叶ひつつある者
三、中伝　骨法を体得し射形整ひし者
四、小目録　味はひを知り気象合一成りし者
五、目録　心技白師賢覚の境に至りし者
六、中王　清澄円満の境涯に達せし者
七、免許　精心感通し品位生じし者
八、奥伝　射品生じ道の蘊奥に至りし者

本多流四世　宗家　本多利永

本多流印可定め書細則

一、当流印可は　初伝　修学　中伝　小目録　目録　中王　免許　奥伝の八段に分ち　宗家　之を允許す

二、宗家　初伝　修学　中伝　小目録　目録　中王　免許は　審査を一般財団法人本多流生弓会に委嘱す　同会は師範会をもってその任に当たらしめ　師範会より派遣され　審査員　之を判定し　宗家に推挙す　宗家　之を参考とし允許を決す

三、奥伝の印可　宗家之を所管す

四、審査は射技射禮に就いて行ひ　位に応じて論文及び口頭試問を加ふるものとす

五、宗家　当流発展に特に功績ありと認むる者に対し審査を経ずして印可を授与することを得

（令和四年一月吉日改訂）

本多流印可審査受審を目指す皆様へ

師範会事務局長　尾木　紹孚

印可とは古来、師が弟子の悟境を認めてこれを証明することであり、家元が平素の道場での門人の稽古や、仕合等を通じて悟境を確認し、門人に位に応じた証明書として与えるものです。

現在の本多流の印可は一般財団法人本多流生弓会に委嘱され、審査の形式を採ってはおりますが、白師賢覚の位である目録以上の審査にあっては、平素の活動の様子をふまえ、場合によっては師範会の先生方、支部長の先生方より平素の様子をお聞かせ頂くなどした上で審査を行っており、印可の根本的な精神は古来のものと何ら変わるところはありません。

前年度より指導者錬成研修会が開催されることとなりました。目録以上の印可を受有の皆さんにおかれましては、中王、免許の受審に向けて、宗家のご案内（指導）をお受け頂き、宗家より上位の位の受審の御勧奨を頂けるようご精進くださいますようお願い申し上げます。

■1. 印可審査日程

令和五年度は以下の日程で本多流印可審査を実施します。

五月三日（祝）定期連合・中央審査（初伝～免許）　於：京都外大西高等学校三条キャンパス弓道場

六月二五日（日）臨時連合・中央審査（初伝～免許）　於：土蓋旅館弓道場

九月または十月　臨時連合・中央審査（外国人会員対象初伝～免許）於：土岐久尻神社

十二月　定期連合・中央審査（初伝～免許）

於：東京武道館（予定）

※別途、外国人会員を対象とした印可審査を予定。

■2. 印可審査申込

①印可審査受審希望の方は各審査の実施要領に掲載の期日までに、師範会事務局長（尾木）ogi@kwansei.ac.jp まで、電子メールにてご連絡ください。目録以上を受審する方については、師範会事務局より、受審可否について折り返し連絡を差し上げます。

②印可審査申込書は各審査の実施要項掲載の期日までに、

以下宛に郵送してください。小目録以上の受審者については論文を郵送と電子メールでご提出頂きます。

〒665-0063　宝塚市仁川高丸一丁目八番八号　指月庵

尾　木　紹　学　（おぎじょうがく）

電話09050614716　email: ogi@kwansei.ac.jp

※表面に「印可審査申込書在中」と朱書ください。

③審査料は当日受付において支払ってください。

④審査終了後、合格者には、登録料を当日お支払い頂きますので、必ずご持参ください。

■3. 印可審査申込書について

記入見本(後掲)を参考にして作成してください。なお、提出頂いた印可審査申込書は審査終了後に宗家に保管頂くこととします。

■4. 論文審査について（小目録以上）

令和5年度印可審査における論文の内容について、次頁の通りお知らせしますので、ご準備をお願い致します。

論文①は手書きで、論文②についてはワープロで作成し、印可審査申込書と同封して師範会事務局に郵送頂くとともに、論文②は師範会事務局長メールアドレスにデータを送付ください。Mail ogi@kwansei.ac.jp

※論文審査①におきましては、「射法正規」に関する要約が課題となっています。射法正規については、流祖生誕100周年において、会員の皆様に頒布されています。お持ちでない方はご一報ください。

江戸時代の印可状（尾州竹林派）

石堂竹林坊如成から代々の家元の名前が列記されている。位に応じて、允許状とともに、日置流尾州竹林射弓術書の巻物が授与された。弓術書も当時は許し事として、家元が認めた者だけが見ることができた。

令和5年度　本多流印可審査論文題目

師範会事務局

一、小目録　「味はひを知り気象合一成りし者」

論　文

「本多流に入門してから現在までの取組、現在の稽古で師匠や案内者（指導者）から課題として指摘されている点、自ら取り組んでいる課題を書きなさない。」

（800字以上、1200字以内）

二、目　録　「心技自師賢覚の境に至りし者」

論　文

①「「射法正規」上巻における七道を要約せよ。」

（800字以内）

②「自分の師匠や案内者（指導者）から受けた、大三に関する教えについて記し、自分自身の見解を述べなさい。」

（1200字以上、5000字以内）

三、中　王　「清澄円満の境涯に達せし者」

論　文

①「「射法正規」上巻における全体論を要約せよ。」

（800字以内）

②「宗家、師匠などの案内者（指導者）から受けた七道に関する教え（口伝）の一つ一つについて記し、自分自身の見解を述べなさい。」

（1600字以上、8000字以内）

四、免　許　「精心感通し品位生じし者」

論　文

①「「射法正規」中巻の全ての目録を要約せよ。」

（800字以内）

②「宗家、師匠などの案内者（指導者）から受けた、七道に関する教え（口伝）をふまえつつ、正面に打起し大三を取る意義と、本多流の射術の特色について、自分自身の見解を書きなさい。」

（2000字以上、10000字以内）。

以上

本多流印可審査規程

第1条 この規程は、定款第5条第1項3号の規定により、これを定める。

第2条 本会は、本多流宗家（以下「宗家」という）より示された「本多流印可定め書」に基づき、印可審査を行う。

第3条 本多流宗家は、印可審査を本会師範会に委嘱する。

2. 他に理事会の議を経て理事長が師範会構成員以外の者にこれを委嘱することができる。

第4条 師範会は、初伝、修学、中伝、小目録、目録、中王、免許の印可審査を行う。

2. 理事長は師範会の決定に基づき本多流宗家に推挙する。宗家は理事長の推挙に基づき印可授与を判定する。

第5条 審査は地区審査、連合審査、中央審査の三種とする。

（1）地区審査—初伝、修学、中伝の審査を行う。各支部において師範会派遣の審査員1名と支部長が個別に審査を行い、合否の判定を行うことを認める。ただし、審査実施日を事前に業務部審査担当（以下「審査担当」という）を経て、師範会に連絡する。又、実施後は直ちに審査結果を審査担当に報告する。

（2）連合審査—初伝、修学、中伝、小目録の審査を行う。

（3）中央審査—目録、中王、免許の審査を行う。

第6条 師範会は、理事会で了承された年間行事予定に基づき実施される印可審査に、審査を担当する者（以下「審査員」）を派遣する。前条の審査における審査員の人数は以下のとおりとする。

（1）初伝、修学、中伝 —1名以上

（2）小目録、目録、中王 —2名以上

（3）免許 —3名以上

2. 師範会事務局は、審査員を選定の上、審査担当に連絡する。

3. 印可審査は、年間行事予定に基づくほか、臨時審査を行うことができる。

第7条 審査は、原則として射技、射礼、口頭試問、論文について行う。

但し、初伝、修学、中伝については、面接・論文を省略することができる。

2. 審査の合否は審査員の過半数をもって決する。

第8条 審査の実施場所及び実施時期は毎事業年度の事業

計画で策定し、理事会及び評議員会の承認を経て会員に告知する。

2. 会員への告知は会報に掲載する方法による。

第9条 審査を受けようとする会員は、所定の審査申込書に、審査料を添えて業務部審査担当に提出する。

2.審査申込書の推薦者欄への記載は省略することができる。

第10条 第4条の審査のほか、師範会は宗家に対して印可の推薦を行うことができる。

2. 推薦による印可取得を希望する会員は、次の何れかの推薦書（様式適宜）を添えて審査担当に提出する。

（1）初伝、修学、中伝は理事又は支部長、或いは目録以上の受領者2名の推薦を要する。

（2）小目録、目録、中王、免許は理事又は支部長、或いは免許以上の受領者2名の推薦を要する。

（3）推薦者は任意の様式の推薦書に、推薦事由を記載の上、記名捺印して審査担当に提出する。

（4）審査担当は推薦書を師範会に取次ぎ、師範会は推薦内容を判定し理事長に報告する。

（5）理事長は、師範会の決定に基づき本多流宗家に推挙する。

第11条 審査料は次の通りとする。

3. 【審査料及び登録料】			
	審査料	登録料	（推薦の場合）
初　伝	1,000円	1,500円	3,000円
修　学	1,500円	3,000円	5,000円
中　伝	2,000円	5,000円	10,000円
小目録	3,000円	10,000円	20,000円
目　録	5,000円	20,000円	30,000円
中　王	8,000円	30,000円	50,000円
免　許	10,000円	50,000円	80,000円

2. 第一回目の審査を無指定で受審する場合の審査料は、受審後に決定した印可の審査料を適用する。

第12条 審査料は本会に帰属し、登録料は宗家に帰属する。但し、推薦による登録料の内、審査料相当分は本会に帰属するものとする。

記入見本

印　可　審　査　申　込　書

(一財)本多流生弓会　御中

以下のとおり印可審査を申し込みますので、よろしくお取り計らい願います。

(フリガナ)　キュウ　ドウ　タ　ロウ		生年月日	1960 年 1月 1日
氏 名	弓　道　太　郎		
住 所	〒374－8976 埼玉県大宮区轟1丁目8番9号		
	電話　090－8946－1234		
種 別	免許　中王　(目録)　小目録　中伝　修学　初伝　無指定　※○印をつける		
弓 歴	1976年 4月　埼玉県立大宮轟高校弓道部入部　○○○○先生に指導を受ける。 1978年10月　国民体育大会　男子少年の部　8位 1979年 4月　日本学芸大学体育会弓道部入部，本多流 ○○○○先生に指導を受ける。 1981年 8月　全日本学生弓道選手権大会　男子個人8位 1981年11月　同部主将 1983年 4月　埼玉県弓道連盟大宮市弓友会に入会（現在、錬士五段） 1983年 9月　(財) 生弓会入会（埼玉中央支部） 1984年 2月　初伝 1988年 2月　修学 1997年 4月　中伝 日本学芸大学体育会弓道部コーチに就任 1998年12月　師範　○○○○先生に師事 2000年10月　国民体育大会　成年男子の部　埼玉県代表 2003年 1月　生弓会運営委員 2005年 4月　日本学芸大学体育会弓道部監督に就任 2008年 8月　日本学芸大学が全日本学生弓道選手権大会で団体優勝 2010年 5月　小目録 現在に至る。 **【弓歴記載上の注意】** **1．弓道を始めてからの履歴や指導を受けた先生について、できるだけ詳細に記載してください。** **2．大会等での入賞歴や表彰歴などがあれば記載してください。** **3．指導歴があれば役職、成果等（あれば）を記載してください。**		
推薦者	(推薦理由) **【記入上の注意】** **1．推薦による印可審査を受審する場合は、本書ではなく、推薦書(様式適宜）が必要です。** **2．推薦者はあなたが師事している先生や、あなたの弓をよくご存知の先生に記入頂くようにしてください。** **3．本欄は省略することも可能です。** (推薦者)　本多流生弓会師範　○　○　○　○　㊞		

2021年 12月 12日

(申込者)　弓　道　太　郎　㊞

(自署(手書き)・捺印のこと)

法人処理欄	審査担当	出納担当	審査料受付	会員整理番号

(令和4年版)

印可取得一覧表—国内（順不同）

（令和４年12月末）

奥　伝	大島　萬春	徳田　雅彦	坂本　武彦	杉山　卓		
免　許	頓宮　泰彦	勝俣　俊一	楽川　泰壽	北原　修	尾木　紹学	飯塚　誠一
中　王	綾戸　岩雄	田中　淳治	佐藤　史子	並木　幸子	西崎　明伸	吉田　初美
	中野　慎輔	水谷　旨智	櫛田　浩平	**小山　文夫**		
目　録	森山　邦男	秋山　貴美雄	金子　恒彦	菊田　幸志	下境　郁二	高橋　静夫
	土屋　志津	長浜　好晴	松永　芳栄	茂木　定男	吉本　清巳	多賀　由美子
	青江　純平	小林　圭	高山　光	雪島　伊乙夫	片岡　泰輔	飯野　雄一郎
	金松　貴子	高崎　やよい	増田　宗宏	**山岸　稔明**		
小目録	天野　雅弘	岡嶋　惇	羽石　幸一	川口　敏江	森岡　徹	大島　昭
	高橋　典子	姫野　登	吉川　幸子	増田　由紀子	星野　保	大橋　秀治
	吉田　隆一	**藤本　正治**	**井出　一志**	**榊　武志**	**中村　亮太**	
中　伝	磯崎　仁司	伊藤　三喜夫	上野山　誠	枝並　正容	城戸　晴美	斎藤　広美
	村上　節子	加藤　和真	川村　大	小宮山　浩正	杉山　浩子	鈴木　康弘
	上居　英樹	中村　敏一	原　幸男	多々良　茂	山下　博美	J.ルグラン
	C.A.ハーパー	寺島　幸子	飛鷹　茂和	眞下　眞弓	山田　勝	星野　昌行
	松前　翔太郎	三島　孔明	井藤　良子	森　巌	花田　篤	河野　寿一
	吉村　圭史	高橋　かおる	**杉原　庸介**	**野瀬　武博**		
修　学	奥村　秀喜	角谷　昌則	北山　紹玄	熊崎　晴人	宿岩　三男	小林　優子
	谷口　洋子	櫻井　馨	山口　賢一	山本　管子	篠崎　英治	関口　直樹
	曽我井　愛次郎	服部　昭利	高谷　文也	赤塚　正子	高山　幸子	辻井　大明
	西嶌　紘一	村山　光弘	細谷　恵美	宮澤　祐子	村木　賢春	黒田　昌代
	紺崎　光男	吉島　進	森　祐太	ｶﾞﾗﾝﾀ・ﾄﾞﾌﾗﾝ	道家　義將	加藤　潤
	河合　真歩					
初　伝	羽賀　久人	藤井　あまね	渡辺　充	大嶋　恭彦	恒川　敦宏	花村　治朗

①令和4年12月末現在の会員の印可取得状況を取り纏めたものです。近年、会員の高齢化の進展により会員の新陳代謝が進み、連絡のないまま会員資格の喪失が多くなっていることから、全面改訂を行っています。

②記載順は順不同です。

③誠に恐縮ながら、本表に記載が無い場合があればinfo@hondaryu.netまでご連絡ください。

【支部からこんにちは】洗心洞稽古会支部

洗心洞の建物、登録有形文化財に内定

洗心洞稽古会　多々良　茂

令和四年十一月十八日に文化庁は、文化審議会が洗心洞の建物を含む百九件の建造物を文化財分科会の審議・議決を経て、登録有形文化財に登録するよう文部科学大臣に答申したと報道発表しました。翌日の朝刊各紙の埼玉版では、洗心洞が登録有形文化財にと大きく扱ってくれました。

登録有形文化財とは、登録基準原則として建設後五十年を経過したもののうち、

① 国土の歴史的景観に寄与しているもの

② 造形の規範になっているもの

③ 再現することが容易でないもの

という条件の一つを満たせばよいものです。十一月十八日現在、一万三千六百三十九件の登録があります。文化庁の登録有形文化財制度について『私たちの周りには、残していきたい風景がたくさんあります。身近な建造物であっても、地域に親しまれている建物や時

③ 現役の近代和風弓道場

009 本多流洗心洞（髙木道場）弓道場　埼玉県久喜市　昭和７年頃／平成２３年改修

旧清久村の旧家で、東京大学弓術部師範を務めた医家の弓道場。高い天井で板間の射場を中心に、師範の席で床構え付きの上座、畳敷きの控え、弓置き場を周囲に配する。安土を置く的場とともに典型的な弓道場で、良質な近代和風建築。

提供：久喜市教育委員会

文化庁報道発表「今回の答申における主なもの」より引用 R4.11.18

代の特色をよく表わしたもの、再び造ることができないものは貴重な文化財です。この文化財建造物を守り、地域の資産として活かすための制度文化財登録制度が平成八年に誕生しました。』と書かれています。洗心洞の建物は、②造形の規範になっているものでした。

洗心洞の建物を登録有形文化財に申請しようと言う考えは、洗心洞がある久喜市文化財保護課が勧めてくれました。まず初めには久喜市文化財保護課が埼玉県の教育局文化資源課と調整して、文化庁の調査官の視察がありました。その時、調査官より各県に歴史的建造物の保全・活用専門家（建築士）としてヘリテージマネージャーが登録されているので、その人の所見をもらうようにとサジェスチョンがありました。その後ヘリテージマネージャーの調査があり、所見を書いてもらいました。道場と的場の配置図や道場の平面図は外部に依頼して、久喜市文化財保護課では申請資料を纏め、県とも擦り合わせて六月上旬に文化庁へ申請しました。

文化庁の報道発表では、洗心洞は今回答申された中で主な建造物六件として扱われ、写真と解説が付けられました。評価されたのは、築九十年でずっと弓道場として現役で使われ続けているからのようです。また、道場を作った高木棐（たすく）先生が弓道界の大立者というのも価値があったと思われます。

弓道場で登録有形文化財になっているのは、明治村にある旧第四高等学校の武術道場無声堂弓道場と福岡県朝倉郡筑前町多田家住宅弓道場がありますが、両方とも今は弓道場として使われていません。

洗心洞の建物は、かつては手矢場と呼ばれた個人のための道場で、その佇まいは昭和の初期の姿を残しています。現在弓道場と言えばスポーツ施設に併設されたものが一般的になっていますが、風情ある洗心洞での稽古することは貴重なものになっています。登録有形文化財になることで、後世に貴重な建物を残して行きたいと思うとともに高木先生の教えを伝えて行きたいと思います。

◇築九十周年を祝う

洗心洞の建物の竣工は昭和七年の秋頃なので、令和四年十一月六日に築九十周年祝射会を挙行しました。本多利永宗家にもお越しいただき、門人十七名が集まり、心込めて射礼をしました。各自の射礼の前に吉村圭史氏の天地祓いが行われました。一昨年の築米寿祝射会に続いて行いましたが、門人が集まり洗心洞の歴史に思いを馳せるよい機会でした。

吉村圭史氏による天地祓い

◇洗心洞の歴史Ⅰ（高木棐洞主時代）

洗心洞の歴史については、平成十八年（二〇〇六）の会報一二九号に『回顧・高木棐先生と洗心洞』と四十一ページの詳しい寄稿（小林暉昌氏）があります。また、本多流史下巻『洗心日新　本多流の百年』にも洗心洞のことは詳しく紹介されています。ここではそれらを基に紹介したいと思います。

洗心洞を作った高木先生は、明治二十六年一月三日に生まれで、昭和八年一月三日の誕生日に洗心洞の道場開きが行われています。先生が満四十歳の時でした。戦前の生弓会会報二号（昭和七年）の会員だよりに次のように書かれていました。

◆高木宗家顧問手矢場開き

本会宗家顧問高木棐氏は、今度御住いに手矢場を新築された。来春一月三日にその道場開きを左の次第により行われる由。

次　第

一、　開会の辞（午後一時半）
二、　本多利時先生古式射礼
三、　来賓射礼

四、　道場員射礼
五、　道場主射礼
六、　閉会の辞

次第に道場員とあるように建物がない時にも野立ちで引いていたようです。道場開きでの利時宗家の装束姿の射影は『洗心日新　本多流の百年』の口絵冒頭を飾り、介添に生弓会師範の小山悟楼先生が写っています。以来九十年道場内部の姿はほとんど変わっていません。洗心洞と揮毫された扁額は、桑崎村（現埼玉県行田市）の剣道家、小沢愛次郎氏によるものです。小沢氏は小野派一刀流で大日本武徳会剣道範士。剣道連盟が顕彰している剣道殿堂二十四名のひとりです。綱領は、「礼譲　精進　端正　澄心　品位」とかな文字の書の大家である折原水光氏の揮毫です。折原氏は洗心洞で弓を引かれました。道場内には本多利實翁直筆扇面も飾られています。

戦前の洗心洞は、当初地元の弓引きが来て楽しむ場であり、学生の頃から親しい盟友であった田村六兵衛氏も来られていました。生弓会の錚々たる方々も来ました。利時宗家を始め、碧海康温氏、北条憲政氏、香田愚氏が対抗戦をしています。一高などの幾つかの高校も訪れていますが、一高は洗心洞で合宿も行ったと聞いています。

利時宗家は昭和二十年秋にご家族が疎開している岩手県から帰京中に高熱を発し（腸チフス）、高木先生に診てもらうため久喜で途中下車し、高木家に辿り着きましたが十月六日に亡くなりました。享年四十五。洗心洞のある地が利時宗家の終焉の地でもあります。

道場開きにおける利時宗家の射礼
S8.1.3　後見は小山悟楼氏

昭和十五年に紀元二千六百年奉祝天覧試合が皇居内済寧館で行われました時に宮内省が選んだ指定選士の部（三十二名）に利時宗家は、選ばれ四位という成績でした。生弓会からは、宗家顧問の高木先生、師範の和田盛一氏、生弓会理事の古山春司郎氏、生弓会横須賀支部長の松本金義氏も指定選士に選ばれています。府県から選ばれた府県選士の部（五十二名）もありました。天覧試合はそれまでにも剣道と柔道はありましたが、弓道は初めてで当時は弓道家のとって非常に栄誉のあることでした。この天覧試合に出場した方の中には戦後弓界の指導的立場になった方もおられ、利時宗家が存命ならば、戦後の弓界を引っ張って行く指導者になられたと思い、利時宗家の早逝は真に残念なことでした。

高木先生は戦後、本多流宗家預、全日本学生弓道連盟初代会長、全日本弓道連盟副会長、全日本弓道連盟射法制定委員、範士十段、東大弓術部師範と弓界の指導者でした。

全日本学生選手権が昭和二十八年七月に第一回が橿原神宮道場で十八校により行われました。当時東大弓術部部員であった山口歓氏が当時の様子を『全日戦記』として、書き残しています。大会会長は、長谷川如是閑氏でメッセージは代読でした。来賓祝辞の中に日弓連会長千葉胤次氏もあり、学生の中央委員長の矢渡しの後に、弓術二派を代表して、小笠原流より千葉胤次氏、日置流より村上久氏、本多流より高木先生の射礼とあります。この頃は流派が弓道界の中心をなしていたことがわかります。高木先生の弓界での位置付けがわかる表現があります。『扨愈々東大チームが袴縁を射位に揃える段となると審判員が皆一膝乗り出したかに見えたのも道理、日本一の師範の聞えも高い高木師範の下の東大弓術部がどんな射を見せるかは、居並ぶ弓道関係者にとっておおきな興味と期待を寄すべき事だったに違いない』とあります。東大弓術部は予選を通過しましたが、決勝トーナメントに出場した八校（天理、関西、同志社、早生度、慶応、中央、立教、東大）の中、二回戦で敗退しました。負けましたが、高木先生は『良かった、良かった』と嬉しそうで、『高木師範

の言に依ると、本日の我々の射は射技、品位ともに学校弓道の Ideal Typus を示すものとして弓界識者をしていたく感激せしめたとの事であった。』とあります。

高木棐先生の射影 S11.5@京都済寧

昭和二十七年から高木先生が中心の本多流研究会が立ち上がりました。第一回本多流研究会は四月十八日に東京電力弓道場（新橋）で開かれました。会場として洗心洞も使われています。事務局は洗心洞二代洞守横山粂吉先生が担っていました。利生宗家が昭和三十八年の宗家襲名し、生弓会復活により本多流研究会の役割が終わりました。それまでの間に本多流が続いたのも本多流研究会があったからと言っても過言ではありません。

利生宗家は高木先生に教えを受けるためによく洗心洞に通われました。三代目洞守の山本実氏がよく洗心洞で一緒になったと思い出を言っていました。

昭和三十九年五月二十三日に高木先生が亡くなられました。享年七十一。

◇洗心洞の歴史Ⅱ（二代目・三代目洞守の時代）

高木先生亡き後に洗心洞を守ったのは、横山粂吉先生です。大正七年四月二十六日生まれで、戦前は利時宗家、碧海康温先生に東京電灯弓道部において教えられ、その後出征し、復員して弓を再開するにあたって、高木先生に師事しました。洗心洞には高木先生の名声により多くの射士が訪れたようです。横山先生は、小山晋一郎先生と堀切菊枝先生と共に内弟子として、本多流の真髄を体得されました。

横山先生が昭和四十四年頃から、久喜高校弓道部と

春日部高校弓道部の生徒を対象に月一回稽古会を開催するようになりました。私はこの頃に洗心洞に通いました。社会人の弓引きも来ていました。その後、社会人稽古と高校生の稽古日を分け、社会人の方は、担当を決めて座学を射技の前に行いました。

今から思うと横山先生の講話により弓道を通して人生に対するものの考え方を若い頃に教えていただきました。まさに松下村塾のようでした。五十年以上洗心洞に通ってみて、人間形成の場であったとつくづく思います。

横山桑吉洞守の射影 S44.1@洗心洞

横山先生と言えば、全日本実業団弓道連盟での貢献です。実業団的は点数的として、今では定着していますが、横山先生が考案しました。3点白、5点赤、7点緑といわゆる七五三です。今真ん中の金10点となっていますが、当初10点は点を付けずゴールド呼んだだけでした。洗心洞での横山先生は一途に本多流を追求する求道者のような感じですが、実業団の大会では参加者をいかに楽しませるか考えていて、自分のことを大会屋と称していました。アイデアマンで、大会の予選は持的でなく、団体は一列並んで一つ的で競うことにしたのは今も続いているようです。団体の持的であってもそれぞれ尺五、尺二、八寸と違えて、中る人をどこに持って行くか考えさせました。

戦後生弓会が復活してから、横山先生は生弓会とは一線を画していましたが、三世宗家より入会の要請があり、昭和五十五年に横山先生と弟子一同は生弓会に入会しました。その後洗心洞稽古会支部も立ち上げました。

平成十六年八月三日に享年八十六で亡くなりました。

横山先生が亡くなれば、道場利用を高木家に返上することになっていましたが、大奥様の高木久子さんは、皆さんが来られていれば、道場は使ってもよいですよと言ってくだされ、洗心洞での稽古は続くことになりました。三代目洞守として山本実氏が引き継ぎました。高木先生の一番若い弟子です。高木先生は『川合（旧姓）は、横山の弟子とする』と言われたようですが、道場に来れば射を見てくれたようです。高木先生は流祖の一番若い弟子と言われ、山本さんは高木先生の一番若い弟子で、流祖の孫弟子にあたり、流儀の継承とは年数ばかりでなく、師匠の教えをいかに会得するものかとつくづく感じます。

高木先生は道場に来た人達に『それじゃ七分の弓は引けない』とよく言われたようで、山本さんはその言葉があったせいか、三十四キロの強弓は普通に引いていて、その姿を高校生の頃から見ていて強い弓を引くのが当たり前と思っていましたら、世間一般ではそうではありませんでした。その山本さんでも七分（四十キロ）の弓は挑戦しましたが、引きこなすまでは行きませんでした。

山本実洞守の射影 H14.2@大宮公園弓道

洗心洞は、利時宗家、利生宗家、現利永宗家の三代に亘る稽古場です。山本三代目洞守の時に、道場における次の法度を作りました。

洗心洞法度

一　綱領「禮讓　精進　端正　澄心　品位」を銘じ　修養すること

一　本多流宗家の稽古を一義とす

一　本多流の真髄・奥儀を得んために精進すべきこと

一　高木家を敬うことを忘るるべからず

一　洞守の許可なき者は、道場に入ることを禁ず

洗心洞は、歴史的に宗家の稽古の場であることを第一優先とします。また洗心洞を高木先生亡き後も残して、我々に使わせてもらった高木家には恩義があり、敬ってまいります。

平成二十三、四年に道場管理上、大きな変化がありました。道場とその周りの土地（二百三十坪）を譲ってもらいました。所有権は変わりましても、法度にあるように高木家を敬い、旧家の中の道場という気持ちは変わりません。管理が私達でするようになり、今後の使用のことを考え、雨漏りがし始めた屋根は新しいものに葺き替え、道場の電気配線も直しました。令和四年にはトイレを洋式に替えました。

山本実氏は平成三十一年三月二十七日に亡くなりました。享年七十六。

◇現在の洗心洞

三代目洞守の山本さんの急逝に伴い、山本さんが高校生の時に創立した春日部高校弓道部の後輩で半世紀以上洗心洞に通った門人三人である小山文夫氏が長老としての役割、坂本武彦氏は稽古会会長としての役割、私が洞主として裏方を支える役割を担うこととしました。

洗心洞の門人・洞友は埼玉県に留まらず、関西・関東一円の方を含め二十名強です。大方は生弓会に属していても当然支部は異なっております。洗心洞の活動は、普段の稽古の他に東大・洗心洞交歓射会（コロナ禍で三年間中止）や伊豆合宿もやっております。

年間行事としては、新年射会と納射会の他に、初代洞主の高木先生の命日五月二十三日を先生の弓号を取って洗石忌、横山先生の命日八月三日を染石忌、山本さんの命日三月二十七日を弼石忌として命日の近くの土日に追善射会をしております。稽古会は月一回門人が集まって行っています。

生弓会洗心洞稽古会支部としては、支部員は現在十四名です。支部活動としては、第三土曜日に催している月例会において、生弓会会員であれば門戸を開いて

おります。また通信射会記録会は、地元久喜に方々も招いています。支部長は山本実氏の後、坂本武彦氏が務めておりましたが、令和五年より綾戸岩雄氏に替わります。洗心洞は九十年の歴史の中で、本多流の拠点としての役割があります。その中の一部が生弓会の支部活動になっています。

令和五年洗心洞稽古会支部月例会のお知らせ

令和四年のテーマは、令和三年と同様に、射法詳解（七回）と道具の扱い方についての弓具特論（二回）で、最後の十一月は弦取の稽古でした。射法詳解のそれぞれの内容は、実際月例会に来られる方々の射法上での共通課題を取り上げました。弓具特論は令和三年に引き続き、渡辺純平氏に一回目は「弓の成顔について」と二回目は「弓の矯正法と矢の手入れ」について話してもらいました。

令和三・四年はテーマを参加者で議論してもらいましたが、令和五年は参加者一人に話をしてもらう形式です。「私の気を付けるポイント：足踏・胴造（二月・三月）」「私の気を付けるポイント：弓構～打起～大三（五月・六月）」「私の気を付けるポイント：大三～引取（七月・八月・九月）」「私の気を付けるポイント：会・離（十月）」という自身が射法において大事にしているポイントを語ってもらい、皆さんの意見を聞くことにしようと思います。どんな形式でもよいのですが、参考用語として足踏・胴造は「日付、蜘蛛の曲尺、右足と左足の働き、姿勢（上体と下体の働き）、重ね」、弓構～打起～大三は「取懸、弓懐、肘肩の扱い、押手首の扱い、手の裏の扱い、上体下体の分離、肩甲骨の扱い」、大三～引取は「肩甲骨の働き、左肩の位置、左半身、左腰、二度の反橋、中高　縦線の使い方、押手の左肩、前腕の働き、剛弱、精神の詰」、会・離は「延合、一騎当千、帽子の起こし、帽子の抜け、切の離」などの用語を織り交ぜても構いません。　四月は弓具特論として、「弾の種類と構造」の講義があります。

◇洗心洞稽古会月例会の日時と連絡先

日時　二月から十一月の第三土曜日　十二時半集合

場所　洗心洞　埼玉県久喜市清久３９５（高木家内）

初めて参加する方は、洗心洞稽古会支部長　綾戸岩雄さんまで連絡をお願いします。

連絡先 e-mail　kuki.ayado@tbt.t-com.ne.jp

電話　〇四八〇―二四―〇九五一

ガラス窓の桟は矢羽をモチーフしている洒落た造作

	令和5年月例会 月別テーマ	
2月 3月	私の気を付けるポイント: 足踏・胴造	参考用語: 目付、蜘蛛の曲尺、右足と左足の働き、姿勢(上体と下体の働き)、重ね
4月	弓具特論	懸の種類と構造
5月 6月	私の気を付けるポイント: 弓構～打起～大三	参考用語: 取懸、弓懐、肘肩の扱い、押手首の扱い、手の裏の扱い、上体下体の分離、肩甲骨の扱い
7月 8月 9月	私の気を付けるポイント: 大三～引取	参考用語: 肩甲骨の働き、左肩の位置、左半身、左腰、二度の反橋、中高　縦線の使い方、押手の左肩、前腕の働き、剛弱、精神の詰
10月	私の気を付けるポイント:会・離	延合、一騎当千、帽子の起こし、帽子の抜け、切の離
11月	弦取	弦取り体験

【支部からこんにちは】欧州支部

Kiyo Hunn

２００２年、元欧州支部長のジャック・ノルマンさん(フランス)が生弓会へ入会なさったのがはじまりです。現在では6カ国、フランス、イギリス、ドイツ、ポーランド、オーストリア、ロシアの国々に広がり支部会員は 88 名になりました。今年は更に 20 人がすでに申請書を提出しています。欧州支部が何故ここまで大所帯になったのか少し過程をご説明いたします。

１９９０年代の欧州の弓道人口の大半は日置流が主流でした。特にドイツでは 90 % が斜面の弓引きばかりの道場で正面打ち起こしの人達は肩身の狭い思いで隅っこで引かせてもらっていたと言います。体配のお稽古などもっての外だったようです。とはいえ日弓連の欧州セミナーに参加するためには日置流であっても体配を練習する必要があるという認識が次第に強くなってきました。各国の指導者達が現在の欧州支部長ジョン・プッシュ氏に正面打ち起こし、体配の講習会を定期的に開催して欲しいと要請があり交流が盛んになっていきました。

ロンドンのホワイトローズ弓道場では毎年サマー講習会を行います。射面、正面問わず何方でも参加できる交流会のような場です。ホワイトローズ弓道場は徳田師範とのご縁で本格的に本多流のお稽古を始めました。夏の講習会に参加する人たちが本多流を体験し夫々の国に持ち帰ってまたその生徒さん達が影響を受けて、という流れで会員が増加しています。

コロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻の影響で3年間交流が途絶えていましたが今年からまた夏の講習会を再開します。

また、ロンドンのスカイプによるリモート指導はコロナ禍一時途絶えていましたが昨年から北原師範代が徳田師範から受け継がれLINEのビデオでご指導を受けております。今年はこのリモート支援を他国にも取り入れてもらいたいと思っています。

欧州支部と一纏めにいっても各国の会員は各都市、地方の道場に所属していますので一カ所の道場に集まってお稽古するという環境ではありません。本多流の講習会をロンドンだけではなくウィーン、ポーランド、ドイツにブッシュ氏、ジェフ・ハンム氏が赴いて年に一回各国で開催しています。現在常設の弓道場はフランクフルトとウィーンだけでほとんどのグループは体育館でお稽古しています。

欧州支部の会員が所属する道場

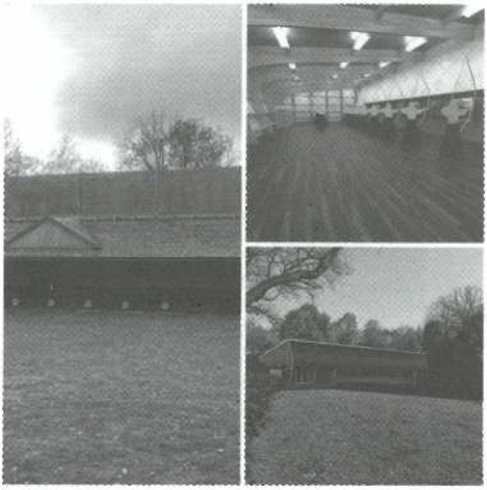
フランス：パリ　（現在閉鎖中）
イギリス：ロンドン（ホワイトローズ弓道場）
ドイツ：ミュンヘン、ベルリン、フランクフルト、エアランゲン、インゴルシュタット（ドナウ道場）
ポーランド：ワルシャワ（ウメミ道場、武道場）、クラコフ（スイレン道場）、ウッチ（アヤメ道場）
オーストリア：ウィーン（清心道場）、ザルツブルク音人
ロシア：サンクトペテルブルク

欧州支部のロゴマーク：　生弓会の盾のデザインへ五本の矢の意味は欧州会員五カ国の象徴です。（２０１９年時点）

英訳テキスト：射礼解説書の改訂に伴い七道/射技を追加し一冊にまとめました。

ロンドン　ホワイトローズ弓道場
2016 年クラブ創立 30 周年記念の各国からの参加者

オーストリア/ウィーン清心道場
2015 年徳田師範の研修会実施



ドイツ/フランクフルト 2022 年新設
2 回目の欧州研修会はここで開催予定でした。

ポーランド／各都市からクラコフに集合

ロシア/サンクトペテルブルク
中央はセルゲイ・ラゾ氏

【工房探訪】　長谷川弓具店

編集部

■工房のプロフィールをお願いします

初代長谷川三郎が郷里の焼津での修業を終えて上京し、都内の弓具店の仕事をしたのち大正十四（一九二五）年に独立しました。本多流生弓会は二〇二三年に創立一〇〇周年を迎えますが、当店はその翌々年に創業一〇〇周年になります。昭和元（一九二六）年に現在の場所に店を構えました。

英一さん（左）とお弟子の平田荘司さん

長谷川三郎は私、長谷川英一の祖父ですが、矢師増田平三郎の弟である増田英司が師匠です。増田氏は徳川幕府お抱え矢師でした。伝系としては父である長谷川康則が私の師匠になりますが、祖母ふじから多くを学びました。祖父は私が修業に入る前に亡くなりました。ふじは非常な熱心家で、いまで言う「アーチャーズ・パラドックス」を研究するため、大学の研究室に頼んで矢の飛び方やしなりを撮影してもらったりしました。祖父と同じく弓が盛んな静岡の出身だったからかも知れませんが、矢づくりだけでなく弓、弾など道具全般に詳しく、実際の師匠は祖母かも知れません（笑）。

私は大学卒業後、本格的にこの道に入りました。当時から当店は分業制でしたが、先にお話ししましたとおり、祖母から一通りを仕込まれました。

■お弟子さんは何人おられますか

現在五名です。従業員として雇い入れるのではなく、弟子として取ります。五名のうち三名は店にいて、道具のことだけでなく弓具店経営全般を含め修業中です。一名は千葉方面で竹の刈り取りから箆作りまでを主に担当しています。もう一名は青森方面で独立し、矧ぎを中心に仕事をしてもらっています。

■矢師として大事にしていることは

ずばり、箆張りですね。弓の強さと矢の重さの釣り合いなどは昔の伝書でも研究されていて、これらも当然重要ですが、私は箆張りが最も大事だと考えています。物理的な真実として、矢は発射されると箆がまず左側に撓み、的方向に進むに従って矢摺籐の辺りで最初の反動で今度は右に撓みます（矢摺籐に羽は触れない）。つまり矢は左右に蛇行というか振動しながら飛び出します。そしてある程度飛ぶとこの振動が収まり、その後に羽の効果で矢は回転しながら滑空し直進性が高まります。したがって、発射時に発生する振動をいかに早く収まらせるかが矢づくりの要点と考えています。

本多流は堂射を得意とした竹林派が源流ですので、まずその方面からお話しします。三十三間堂の堂射は全長一二〇mを射通すわけですが、そこで使われる矢は矢師の研究により概ね三〇mを目安に振動が収まるようになった。その矢は竹林矢と呼ばれ、袖摺節を最も太くし、そこから本末の両端に向かって細く削ります。本多流では矢飛びを尊びますので、この竹林矢を好む方が多い訳ですが、堂射で使った矢をそのまま的前で使うわけではありません。堂射で研究された竹林矢の考え方で手先十五間の的前矢として仕立てます。しかし、ここである問題が起こります。射によっては、この振動が充分に収まらないうちに十五間に到達してしまうのです。つまりその射手からすれば「この矢は荒れる」というように思うわけです。ところが実はそれは射手の腕前の問題なのです。うまく引ければ「糸を引くような」素晴らしい矢飛びを楽しむことが出来ます。その代わり、失敗矢も出やすい。ということで、昔は本多流で正射を求める方は皆さん竹林矢を使って、いい射を出そうと励んでおられました。

私としては、理想は的前矢なら五間程度で振動を収めたい。「一文字」や「杉成」といった形もあるし、竹林矢の一歩手前には麦粒という形もある。麦粒も矢飛びを重視した形状ですが、それでも七間半で振動を止めたい。あとは先ほどお話した箆張りの問題。弓の力をどう吸収するか、という話です。その上で重さの問題や矢の重心の問題もある。紙面ではとても書ききれませんので、ぜひご来店いただき、いろいろとお話ししましょう。また、矢飛びのためには筈は「ふ

くみ筈」とし、中仕掛けの矢を番える部分は柔らかく、フンワリと作ることをお勧めします。仕掛麻は使い古した麻弦を「ほぐし弦」にしたものが一番良いようです。接着剤は一般的な木工用ボンドで結構です。

■矢にも色々と歴史がありそうですね

その通りです。その昔は矢と言えば征矢でした。獲物を捕ったり戦で使ったり。その時は自然の竹をそのまま使って、形としては「一文字」とか「杉成」でした。それが江戸時代になって戦が無くなり、征矢が不要になったわけです。その代わりに「通し矢」が盛んになって、徹底的に「矢飛び」が研究されました。その研究の中で、火を強く入れるようにもなった。形状も「麦粒」だとか「竹林」などが発明されました。重心の研究も進みました。またこの頃までは、五〇mまでが近的で、遠的は九〇mが標準でした。それが平和な世の中になって、老若男女が弓を引けるように、矢を水平にして誰でも垜に届く距離、ということで二十八m、手先十五間が近的の標準になりました。

釣合については堂射一二〇mで一寸上がり、昔の遠的九〇mで中釣合、他は五分下がり位です。上がり、というのは板付を下にして矢を立てた時、重心が本筈側、すなわち上方に寄るという意味です。ちなみに的前では矢を水平に発射して十五間先の的に中るように射手の体力に合わせて道具の釣合を取りますので、垜では矢は水平に刺さるはずです。下向きの角度が付いているということは、釣合が下がり過ぎているか、弓の力を充分に引き出せていない、などの原因が考えられます。ぜひ一度、垜に刺さった矢の角度を測ってみてはいかがでしょうか。

■会員の皆さんに一言お願いします

当店には、本多流の先生方が昔から沢山おいでになり、色々と教えて頂きました。私自身は石岡先生や戸倉先生が思い出深いですね。矢の話は、中央研修会でも何度かお話させていただきました。とても語り尽くせませんので、ぜひ、お店にいらしていただいて、じっくりお話ししながらご注文を伺いたいと思います。稽古矢で四ツ矢五〇、〇〇〇円からが目安です。皆さまのお越しをお待ちしています。

◎長谷川弓具店　連絡先

〒一〇八－〇〇七三　東京都港区三田四－八－三四

最寄駅：京急線泉岳寺、東京メトロ白金高輪

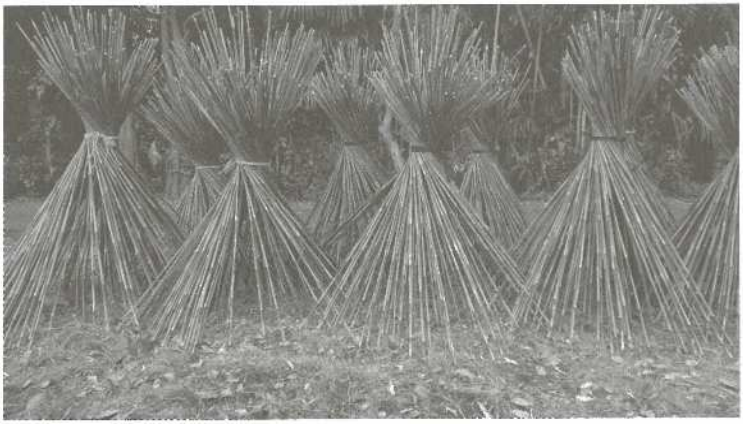
営業時間　午前九時半～午後七時

定休日　第二・四日曜日

TEL　〇三－三四五一－七四四〇

FAX　〇三－三四五一－七〇九九

ホームページ　http://www.hasegawa-kyuguten.com/



昨年初冬に千葉県で刈り取った矢竹

堂射に関わる弓具と射法研究について(四)

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科　相澤　岳

日置流竹林派弓術書の当初構想

「日置流竹林派弓術書」には、当初の構想を示した「50「弓術書豫約廣告」「法學協會雑誌 明治四一年一月」所収(国会図書館デジタルコレクション)」がある。(以下全文)

「一　今般弓術部は射道の爲め有志相謀り師範本多利實翁に請ひ師範翁四十年間の研鑽になれる弓術書を上下二卷に分つて刊行し實費を以て普く之を頒たんとと欲す苟(いやしく)も斯道に意あるの士は此際機を　錯らず御申込めらん事を希望致し候

一　本書載する處は我部の宗とする竹林派及日置流正統書一切の書傳と之に對する師範の註解と及び師範翁一切の著述に有之候即ち

上卷　竹林派諸註解合計十四冊

下卷　日置正統書諸註解合計十冊及

本多生弓齊著述九冊

一　製本出來期は明春早々よりし　尚ほ出來の上は直ちに御報せ申すべく候

一　代價は凡そ各六十錢位とし豫約者は御氏名住所に　豫約金四十錢相添え四十一年一月二十日迄に御申込相成度尚ほ期日後の御申込は謝絶するやも計られず候

明治四十年十二月十一日

東京帝國大學運動會弓術部委員」

利實翁の日記では、構想通り作業が行われている。

「明治四〇年十二月一日　弓書出版致候に付　自分の草稿拾冊及び著書六部〆拾八冊原稿同人へ貸渡し遣す」[51「弓道本多流史 上 朝嵐松風 本多利實伝」]

この草稿十冊とは註解が済んでいた竹林派の十書、生弓齋文庫の帙(ちつ)53(整理番号600−609)。実際に刊行されたと考えられる。刊行されたものは以下の通り。

「日置流竹林派弓術書」(生弓齋文庫803)

刊本一冊　明治四十一年四月刊、東京帝國大學運動會弓術部編、本多利實註解、同本三百冊　菊版　四百卅頁

本多利實翁七道コロタイプ版七葉入、氣象合活力感通表一枚を附す。目置流竹林派の弓術書の中で、本多利實翁家傳の秘書中、最も信憑出來るるのを十六巻を搾び上梓したもの。即ち竹林派の「自他射學師弟問答(生弓斎文庫604)、射學短話(607)、射學小目錄傳書(600)(附、射法新書(竹林派 平瀬光雄 [「平瀬光雄弓道論集(弓道資料集第1巻) 入江康平」 所収 国会図書館デジタルコレクション])、本書(609)、目安の巻(605)、尾州竹林派中學集(608)、射學中目錄(606)、射知要法(601)、射法輯要(602)、射學聚方集(603)、竹林派秘書指矢前日月星巻(907)」の十一書と、日置流正統の「日置流美人草(612)、裏學集(611)、中學集(日置流中学集)(613)、大乗巻(614)、備忘集(615)」の五書を收め、附錄には日置流正統(610)及竹林派射術傳系を收む。[2「弓道講座辞典」道鎮實国会図書館デジタルコレクション] ※前回までに、太字の書は採り上げた。

[51]にある利實翁の日記から、刊行時に採録されなかったものは推定できる。

「明治四〇年十二月十五日 「自他問答」読合致す「弓書目録書」一冊貸渡す」

「明治四一年一月二日 出版弓書の件尋問有り。「竹林派童蒙射譜 騎射法」一冊貸渡す」

「明治四一年二月一六日 弓書原紙貸呉れ候様依頼に付(略)竹林派の方(略)茶紙細書上下付「外ノ物(とのもの)」一冊(略)都合五冊、日置流の方(略)、都合五冊、竹林派、日置流両様にて合拾冊貸渡す」[51]

竹林派諸註解の残る三冊は以下のようだ。

「竹林派系傳並弓書目録」(生弓斎文庫794)

寫本一冊 竹林派の傳系及び竹林派弓書目録を收めたもの。[2] 安政二年 本多利實著作。[51 資料II]

「童蒙射譜 騎射」(生弓斎文庫599)

寫本一冊、半紙版廿枚、五井藤純實著、享保十六年八月上弦、馬射法及び序、布、絹、綾、錦の位等を説いたもの。[2]

「日置流外之物 第一 二六」(生弓斎文庫129)

第一、二、六　寫本一冊　美濃版　五十三枚　第一、本文二十二枚、第二、本文七枚、第六、本文廿一枚。第一の冒頭に「夫歩射之式體兩家相傳之射禮集委雖有之當代略儀多故　陰其詞野　懸之小的可　用裡拔ケ條一卷作人初心成時者道之始終細知事難成者歟　然則愚紙之罫以若傍着爲可令知大體也」とあり、**射學外之物**第一には「一、堋(埈)築様之事、一、小的金的さいはい、矢車之事、的場へ出る次第の事、的弓の事、的矢矢代の事、足踏繪圖のこと、弓の取扱、矢取の事、小串之的の事」第二には「一貴人に弓と矢參らする事、外十條　弓の名所、矢の名所、空穗、弓小手、行縢、名所繪圖」第六「弓矢の取扱圖示、空穗の取扱、挾物射様圖示」等である。[2]

「外ノ物」とはこのような射法の外のものである。(補筆[63]第十一参照)竹林派と日置流の混在する峡にあること、射学とあることから推定した。生弓斎文庫には、来歴から竹林派の外之物と判断できるものは無いようである。

[52「弓之書(内題:外之物)」星野勘左衛門茂則自筆稿本　貞享三(一六八六)年　名古屋市鶴舞中央図書館所蔵]は、「日置流外之物　第一　二　六」冒頭、第一ほぼ同様で、第四、第五の四冊。[53「**射學外之物**(内題:外之物)外物)」(松井智信寄贈本　大正三年)東京大学総合図書館南葵文庫所蔵]の一、二巻は同内容。第三は「當流之射形武用之取專要為家傳の秘事　**射形**相傳之巻謂**内書顕然法量之書外之物**」とし、弓具のこと。[52]と第四　矢之積(矢の法量)、第五は同様。

松井智信(とものぶ)

嘉永元(一八四八)年八月二三日生。真之助。父智忠(和歌山藩江戸定府武術館の竹林派弓術指南役)に竹林派を学び、明治十一(一八七八)年二月指南免許、三三年一月より和歌山中学校、和歌山県師範学校弓術教授、四二年十二月より大日本武徳会和歌山支部弓術教授、大正一五(一九二六)年五月大日本武徳会弓道教士、昭和二(一九二七)年七月より武徳会和歌山支部長、のち和佐尚寛に印可。四年七月二三日卒。[1「弓道人名大事典」小野崎紀男]

また、[54「外之物　竹林」石堂幸右衛門武勝(遠州榛原郡秋間・菅山)渥美源五兵衛　享保一〇(一七二五)年(大伴英邦寄贈本)中京大学豊田図書館所蔵]は、同様の内容で編集が異なる五巻、計三百二拾ケ條。[「掛川市史　中巻」国会図書館デジタルコレクション]

石堂武勝（たけよし）名古屋藩士

幸右衛門、定勝。若林三郎左衛門（石堂美勝。石堂貞次の庶長子。遠江横須賀藩士、天和二（一六八二）年、藩主本多越前守利長除封により浪し改姓、遠州一宮に寓居）の嫡子。石堂本家断絶後、父と共に尾州に帰り、五十人組、後御弓役 享保（一七一六―一七三六）ノ比。門人に荒木十内ら。

［1、6 「尾張藩弓術竹林教典」大伴英邦 国会図書館デジタルコレクション、「国史大辞典」、「名古屋市史 政治編第二」国会図書館デジタルコレクション］

利實翁の著書六部は、著作がまとめられている帙55と年代から推定した。

「射道百首」（生弓齋文庫618-619）

寫本一册、本多利實著、半紙版八枚、「足踏は扇子の曲尺に蜘の曲尺闇の夜のかね云々」より「天地の道を備へし弓と矢を何とか人は思ひそめけむ」に至る。奥書に「右射道百首ハ徒然なる折から三十一文字にならひ書つゝるになむ、明治三十四年彌生初九日 生弓齋利實書」とある。［2］［51 資料Ⅳ採録］

「弓學図解」（生弓齋文庫620）

寫本一冊 本多利實著 半紙版 九枚 十二行六百字詰原稿ペン書 七道圖解の總説を述べ、射術の七道 足蹠、胴造、弓構、打起、引取、會、離及び五味の目附、引込、延合、離を述べ、終に射學圖解を擧ぐ。奥書に「此射學圖解は射形改良の中祖日置彈正正次大人の本書五卷竹林如成老の中學集に據て射術を學ぶ規矩法則を圖解して童蒙の便とし待りぬ、共奥襖に至りては一首を以て悟るへし。千萬のそのことはりのよしあしは直に射させん爲と思へは 此圖解斯道の有志者の僞師の爲め却て射道の横道に入らん人の爲に此は記し置き待りぬ 穴賢 明治四十一年四月上旬 竹林末弟 七拾三歳 生弓齋本多利質」とある。［2］

これは、日置流竹林派弓術書冒頭の「氣象入呂活力感通表一枚」。前回会報145号「射法改革と密接な五味七道図解、明治三十五年には完成していた-新発見」参照。

「的場去離考」（生弓齋文庫623）

寫本一冊　本多利實著。的場の距離に就いての論考である。[2] 明治三九年著作 [51 資料Ⅱ]

「三復弓話」（生弓齋文庫624）

寫本一冊　本多利實著　半紙版、廿二枚「時勢の變遷は矢なり、予弓馬の家に生れ武を以て業とせり、生れて六歳にして父利重に弓を學び初め年月經て慶應の末に至り西洋の利器舶來せしより皇國の兵制一變し軍事皆西洋の兵制と成し以來別て弓の如きは地に堕て手にする人もなき一時の勢ひなりき、然れども予熟々考ふるに是時の勢ひ止むなし、然とも我國の弓矢は萬に冠したるは各人の知るところ、叉己れ獨りなしたりとて世の害となるもせまし云々」とて弓話を講じたもの。終りに明治卅九年霜月十あまり二日生弓齋本多利實述」とある。[2]

「弓道大意」（生弓齋文庫626）

寫本一冊　本多利實著　半紙版　三十三枚　四百字詰原稿　弓道の大意を述べたもの。その目次は次の通りである。即ち「第一編、總論（明治三十五年彌生上旬記）第二編、各論、第一章弓具、第一節的、第二節弓、第三節矢、第四節韓、第五節弦、第六節附屬品。第一款弓卷、第二款矢袋、第三款韓袋、第四款仕掛箱、第五款卷藁製造法。第二章射法、第一節素引法、第二節卷藁前、第三節的前。第三章射形（射法）第一項足踏、第二項胴造、第三項弓構、第四項打起、第五項引取、第六項會、第七項離、五味、第一項目付、第二項引取、第三項會、第四項離、第五項見込。第三章射禮、第一節卷藁射禮、第二節的前居射禮、第三節立射禮、第三編、結論」である。[2]

「射學要言」（生弓齋文庫629）

寫本一冊　本多利實著。半紙版　六十七枚　五百字詰原稿用紙使用、射形に開する五味之事　七道之事　指矢前の條々。弓矢弦弾等用具に關するものを收む。終りに「此書物　射形の五味七道より起し射術の大略を記載し中卷に至り射形の中頃の教授荒を記載し終りに弓具の製造法の大方を記して田舎人の斯道に熱心の人々自ら製造して此器械調達自己に學ぶ時は躰格の運動となり叉ひとつには反求して己れの邪正を明らかにし古への明徳を

明らかにせは君子行正とも成なんと此道に辟するの病の爲す事か、かくは物し、穴賢　明治四拾年二月下旬　七十三翁本多生弓齋利實」とある。[2]

著作六部を貸渡したのは二月一日であり、射學要言と推定するのは無理がある。帙55には書名不明の欠本が三冊ある。うち一冊は、大正十二年編の[2]に記載があった。

「射法本紀略解」（生弓齋文庫616）欠本

寫本一冊　本多利實著。「射法本紀」に解説を加へたもの。[2]

「明治三八年四月二七日夜　（立入春太郎から）自著の**「射学大意」「射法本紀詳略」**が戻ってこないと記している」

「明治四一年二月七日　**「射道大意」**誤候分、坂本氏へ屆呉様菅依頼」[51]

[51　資料Ⅱ　本多利實著作集]には、後年「射法本紀詳解」https://dl.ndl.go.jp/pid/860039/1/1 刊行はあるが、前記三冊は無い。欠本二冊、残る著作一部は、「射学大意」または「射道大意」か。さらに、以下より、書名不明の欠本二冊は大正十二年までのことと推定される。

「明治四一年四月二十七日　坂本氏参り、先日より貸し与へ置候弓書悉皆持参返却す、印刷相成候弓書出来持参、一部受与被致。」[51]

当初構想における本多生弓齊著述九冊は、著作六部と以下三冊と推定できる。

「明治四〇年十二月二十一日　「射法正規」上中下三冊出来に付持参　坂本氏へ相渡す」[51]

「射法正規　上中下」（生弓齋文庫628）

寫本一冊　本多利實著　半新版　上中下、七十二枚、四百字詰原稿　上卷　廿三枚は射術、足踏、胴造、弓構、打起、引取、會、離　全體論を收め、中卷（廿五枚）は一、始て射道に入る人卷藁を多く射べき事、一、弓を射ん事を思へ命中を思ふ事勿れといふ事、一、些なりとも邪心を起す事を禁する事、一、射道は何事に附ても正しきを思ふて其理りを忘れさる事、一、射術練膽の修業専門の大事と云事、一、初心の中猥に強弓を引事を慎む事、一、射手たる者ハ弓箭ハ云までもなく却て調子といふ事を肝要と心得て居る事、一、姿勢の崩るゝ共命中

を以て主にするは終身の理りを合點せさる事、一、放心を恨み安心決し躰豊かなる所を忘却せきる事、一、一卒は求め安し自分の射一將は得かたし一の弓といふ事忘却すへかさる事等を收め、下巻（廿四枚）は弓矢並に韘弦等の大旨を述べてある。即ち、弓力の強弱ハ大事のものなる事、弓の張顔及び弓の長短の事、弓の竹木材料の事、弓村の善悪分別の事、弓の弛の廣挾宜しく覺悟すへき事、矢の法式の事、矢の軽重の事、韘のこと、韘に品々ある事、弦の事、弓と矢の懸合及ひ弦の釣合の事、矢の羽根に種々ある事、弓矢韘弦等の手當直く方の大概の事等の項目を立てゝある。奥書に「此射學正規は彼の明末高穎と云し射に熱心にして深く修業し種々の癖を射出し終りに射術の眞味を發明せしに依て射の本分を記して後者の戒めを著しし一種の一顧を發明せし事を著したるを射學正宗と號し著しゝか是か舶來して徃徠か訓點したる物あり然るに我國人として射に志深き人は此射學正宗見る人多し我國在來の弓書ハ紊亂して不通と成す有様なり、射は和漢共さして相違ハ無と雖 器械の寸尺其他と雖少しつゝの相違あり殊更姿勢も替りて概似たりと雖も違ふなり故に其正宗の順席に倣ひて射法正矩と名付者ものなり見る人大和心を柱として弓の如く正しく直き事を望むと云爾　千時明治四十年極月十八日　生弓齋利實記」とある。[2]

採録されなかった文書の推定に関し、異論は少なくとも二つあり得る。第一に、「大學弓術部に於て弓術書発行に関する書類」（生弓斎文庫９２７）に依拠していないこと。第二に、推定候補から排除するのに十分な理由が担保されていないことである。

また、以下の中に採録されなかった文書の可能性も排除できない。

「弓書類（きゅうしょるい）草稿案」（生弓斎文庫９２１）
寫本一册、本多利實、半紙版　百枚、射術圖、射法本紀、本書、雁金打、打根主用、弓歌、七道、五眯七道略解、弓矢の長歌并短歌、射知要法附錄、日置流弓書目錄、竹林派弓書目錄、武田流弓書目錄（若狭）武田流弓書目（甲斐）　大和流弓書目錄、漢籍弓書目錄、雜弓書目錄、弓術談（遊樂雜誌中）　日置流弓術秘書、中學集、目

安目録、自他問答目録、戰場射事教導次第等收む。

［2］

日置流竹林派弓術書冒頭の凡例で、採録文書の位置符けとしたい。

「一　**此書を收むる所十六卷其著者の姓名著述の年代等一々これを確知する事能はざるは頗(すこぶ)る遺憾とす** 元和年間 瓦林成直の著したる自他射學師弟問答 及び寶暦年間 内藤正傳の物せる射法輯要は稍々(やや)其 明かなるものなり 其他は疑問を挾むものに非ざれば全く不明なるものなり 例之**本書五卷**の如きは 或いは日置彈正の著述に係ることなし 或いは**竹林坊如成の手に成りしもの**と傳ふ 然れども其**内容を視れば後説を是とすべ**きに近し 依に暫く**取って竹林派弓術書中に編入せり** 茲(ここ)に吾人は所謂日置の本書五卷及び末書五卷と稱するものに付て疑を存す

一　此書は年代の順序によりて排列せしものに非ず 唯 思ひ付きの儘(まま)に配置したのみなり 但し(自他射學)師弟問答以下本書迄は竹林派の大義を知るに便なるを以て之を前に出し 射形直しを記す目安の巻を之に次がしめ中學集以下の諸巻を後に置きたるは多少意を用ひたる所なり」

何故、日置流竹林派弓術書に、日置流の文書が採録されているかは、以下と同様の認識によると考えている。

「日置一流とは**元来日置は二流あり**、伊賀の日置大和の日置なり。当流は伊賀の日置弥左衛門範次なり。応永年中 伊賀の国に住す よって伊賀の日置と称す。唯授ける一人 同国安松左近烝吉次なり、時に応永二十五戊戌(一四一八)年三月五(この時新次郎といいたる説あり) 後 吉次より唯授一人近江の国、弓削弥六繁次なり、時に正長二(一四二九 己酉)庚戌(※干支では永享二 一四三〇)年正月 二十日、後甚右衛門と号すこれなり。子孫とれなく授くべき者又無く伝受の書悉く、三島大明神に籠め年暦を経て天文二十辛亥(一五五一)年八月十六日近江の国蒲生上郡須恵村の住、北原竹林坊如成 右の書受下げたり、名匠たる故悉く熟得し一編の射と云書を篇集す。後 石堂と改め次男 弥蔵為貞にこれを与り、時に天正二十壬辰(一五九二)年六月吉日、弥蔵後石堂竹林と呼ぶ名も貞次と改め、**貞次一遍の射を又改 当流五巻の書なり。**初巻七道・歌知射・中央・父母の巻これを

四巻の書という、又 灌頂の巻合せて五巻の書という。四巻を外伝とし灌頂を内伝とす。竹林中興の祖と為す 依て又**竹林流**とも称す。ここに因って**日置一流と書れたり**。大和の日置は弾正政次なり(範次と政次とは七十余年間ありとの説あり) 明応(一四九二―一五〇一)年中の人なり **吉田流**の祖なり。」[「日置一流射形師弟子の起請秘記の事」 6所収 国会図書館デジタルコレクション]

日置流正統傳系による文書

日置流竹林派弓術書に採録されなかった、日置正統書諸註解の残る五冊の推定は困難を極める。まず、採録された文書を確知してみる。前号会報の続きでもある。

「吉宗の身近に仕える事になったのは、紀伊藩より随行した四十人余りの者たちである。吉宗が将軍に就任後も、紀伊藩は存続するため、一部の家臣のみ江戸城へ入った。その点については、館林藩主時代、甲府藩主時代の家臣をすべて連れて江戸城に入った、綱吉や家宣と大きく違う。となると、当然、吉宗のお気に入りを選抜してきたと思いがちだが、そうではなかった。たまたまその日の当番だった者をそのまま連れてきており、誰かを抜きん出て使っているということもなかったようだ。」[45「将軍と側近 室鳩巣の手紙を読む」福留真紀]

以下の一人が供奉しているが、紀州竹林か判らない。

土岐朝直(とき ともなお) 幕臣

元禄八(一六九五)年生。藤之丞、左兵衛、造機。和歌山藩主徳川吉宗に仕え、享保元(一七一六)年吉宗が将軍となり江戸へ供奉、延享二(一七四五)年西の丸勤務、宝暦十(一七六〇)年 寄合となり、十一年六月二四日卒。六七。著書に「騎射秘抄句解」等。[1]

国立公文書館デジタルアーカイブ 騎射秘抄句解 検索 https://www.digital.archives.go.jp/

「〇享保元(一七一六)年九月九日 「(略)**鈴木丈右衛門安貞**本城小納戸になる。」この日宣下の事にあづかりし右筆のともがらに。時服。金を賜ふ。(日記、家譜)

○享保四(一七一九)年十月十日東叡山　(略)韓人に歩射。騎射をなさしむ。東叡山の車坂下に。長さ百二十間。幅六間の地を射圃となし。又同じ所より屏風坂の下にいたりて。長さ百二十間。幅六間の馬埒(らち)をほどこし。傍に棧敷を構へて。對馬守義誠。(七人略)小納戸山本八郎兵衛茂明。鈴木丈右衛門安貞。大島雲平以與まかりてこれをみる。射技の徒八員。事はてゝくたものをたまふ。其他判事二人。理馬一人。中官八人。その事にあづかるをもて。常照院にて吸物。酒をたまふ。(日記)

○享保十七年九月廿一日　吹上の御園にて諸番士に命ぜられ。草鹿の射法つかみまつらしめて御覧あり。これ講武の御こゝろ深かりしをて。紀藩におはしましける時より。射藝の古式を査検し給ひしかば。大統つがせ給ひしのちは。廣く諸家の舊(旧)記をめして御覧ありしに。**小笠原縫殿助持廣が家傳の書**。共證ことにたしかなりければ。近侍とともに御みづからかうがへ(考)合せたまひ。漸(ようやく)大成せしにより。**目賀田幸助守成。鈴木丈右衛門安貞**に命ぜられて。**持廣にさとさせたまひ。やがて近侍および諸番士をして。みな持廣が門にいれ。その式ならはしめられ。**先の己酉(享保十四)のとし弓場始の式行はれ。其後けふ(今日)の草鹿をはじめ。賭弓。笠掛。丸物の式しばしば御覧ありて。永くとしごとの例とはなれり。(日記、家譜(四字據(拠)ト補))

○廿二日　葛西に御狩あり。御弓もて鴻一。御拳にて眞鴨二を得給ふ。きのふ射手の番士に褒賞の時服二を賜はり。小笠原縫殿助持廣に時服二。共子織部持賢に二。教導の賞として同じく賜はる。」[55「徳川実紀 有徳院殿御實紀」]

小笠原持廣(もちひろ) 幕臣

貞享二(一六八五)年生。初め政廣、萬五郎、頼母、縫殿助。杉浦政盛の三男で小笠原源六郎持真の養子。元禄一五(一七〇二)年十二月御小姓組の番士、宝永六(一七〇九)年七月遺跡を継ぐ。**享保元(一七一六)年七月家伝の書籍九一部および源頼朝の牒などを台覧**、十一年二月御徒頭、一四年二月吹上にて御弓場始め采配、一六年十月御先弓頭、一七年九月小的草鹿を台覧、元文二(一七三七)年二月百手的式を行い、延享二(一七四五)年正月御鎧奉行に進み、宝暦九(一七五九)年十二月二十一日卒。七五。法名了哲。門人に目賀田守成、鈴木安貞、能勢頼忠、岡山之英ら。[1]

鈴木安貞(やすさだ) 幕臣

丈右衛門、のち(享保二〇年十二月 布衣着することをゆるさるゝ)対馬守。紀伊徳川吉宗に仕え、享保元(一七一六)年江戸に移り、九月小納戸三百俵、九年閏四月「笠懸抄」「弓法書抄」を賜い、目賀田守成と共に射礼を研究、九月二の丸勤務、二〇年九月 近習頭取千五百石、小笠原持廣に射礼を詳しく受け、延享二(一七四五)年五月「**大乗巻**」を岡山新十郎に伝え、寛延元年二月西城の御留守居、宝暦五(一七五五)年正月御旗奉行に移り、七月二〇日卒。七三。法名了傳。[1、55]

「○享保十一年五月廿二日 西城の小納戸 岡山左五八之於が養子新十郎之英 射技に研精せるをもて。あらたにめし出されて小姓組の番士となる。(家譜)

○享保一二年五月廿一日 (略)西城小納戸(略) 岡山左五八之於が養子新十郎之英。(略)これ等が父。年久しく布衣以上の職にありて勤勞せしかば。めしいたされしなり。その中にも**岡山新十郎之英**はかねて射技に達し。しば〳〵御覧じ給ふこともありしをもてなり。

○享保十四年二月五日 吹上の御庭にて はじめて弓場始めの式行はる。射手は小姓**能勢河内守頼忠**。西城小納戸岡山新十郎之英。小姓組城織部厚茂。富永平助記浮(のりちか)。内藤左門忠如。諏訪源十郎頼直。書院番**小長谷喜八郎友長**。木下主秘長保。各烏帽子。水干を着せり。的奉行。記録役は諸大夫の小納戸。朝夕矢申の役は吹上奉行等これをつとむ。射手は各矢數十本。皆中のものに紅裏の時服を賜ふ。少老。御側。大番書院小姓組の番頭みなみる事をゆるさる。すべて射體の事は紀藩におはしませしときより。ひろく古體をさぐりもとめたまひしが。大統うけつがせ給ひし後も。小笠原縫殿助持廣が傳家の古書をはじめ。其外家々の舊傳。古土佐氏の繪巻物までをめしあつめ。考合せ給ひしうへ。猶御みづからの御心をて。新にとゝのへたまひ。この年頃近臣をして。しば〳〵こゝろみたまひしに。漸く御心のごとくになりしかば。その御旨を持廣につたへ給ひ。かれをして御家人を教薄せしめ給ふ事と成りしが。去年二月四日既に近臣のみをゑら(選)ばれ。この事こゝろみ行はれしに。盛慮のごとくとゝのひしかば。ことしは近習。外様をわかたず。その門弟の中より。進退に熟したるものどもゑらばせ給ひ。はじめ

てとの事行はれ。これより後水例となりて。今百年ごとにたえず。（日記）

○六日　きのふの射手に各金二枚をたまふ。其師小笠原縫殿助持廣も教導よくかなひたるを褒せられて。金三枚。時服一襲（かさね）下さる。介添の徒目付。表火番等にも銀を給ふ。（日記）」［55］

「○宝暦七（一七五七）年十二月廿五日　船手頭岡山新十郎之英。萬次郎君に射術を傳ふべき旨命ぜらる。

○宝暦七年十二月廿九日　先手頭岡山新十郎之英（清水）宮内卿の方に射法を傳へまいらせらるをもて時服賜ふ。（日記）」［56「徳川実紀　惇信院殿御實紀」］

清水重好（しげよし）御三卿清水家初代

延享二（一七四五）年生。九代　徳川家重次男。宝暦八（一七五八）年江戸城清水門内に屋敷をあたえられ、翌年本丸からうつり家をおこす。十万石。寛政七（一七九五）年七月八日卒。五一。［日本人名大辞典］

岡山之英（おかやまゆきふさ）幕臣

小森頼英次男、岡山之於の養子。主計、新十郎。享保三年七月初めて将軍徳川吉宗に拝謁、十二年五月御小姓組に列し、御弓場始めの射手をつとめ、十三年十月西城御小納戸、宝暦三年十人月御船手。八年十二月西城御先鉄砲頭（先手頭）、延享二（一七四五）年五月鈴木安貞師に日置流を学び、「日置流大乗巻」を伝受、安永四（一七七五）年八月三日卒。七八。法名一無。［1］

岡山之典（ゆきのり）

元文二（一七三七）年生、岡山之英次男。新之丞、のち主計。宝暦五年十二月召出され（清水重好）萬次郎君に付属、近習番百俵月奉十口、八年十一月小姓、九年十一月清水家に付属小姓頭取小十人頭などを経て月付、寛政九（一七九七）年七月致仕。父之英に日置流を学び免許。門人に橋本仲ら。［1］

「之典雑話」（生弓齋文庫212）は彼によるものだろう。［2］に書誌無し。

「正統日置流大乗之巻」（生弓齋文庫614）

寫本一冊　（第五）本多利實書　半紙版十四枚　延享二（一七四五）年乙丑五月　鈴木對馬守安貞判岡山新十郎殿へ印可の條として渡したものによる。［2］

「大乗巻聞書　附諸口傳雜記　完」（生弓齋文庫１２５）

寫本一冊　**日置流正統の弓書**。［2］

紀州で星野勘左衛門が属したとされる組頭、妻木助九郎（勝教か）［２８］は**日置流正統傳系（吉田流出雲派）**であり、この伝承の文書が日置流竹林派弓術書に採録されている。

［１０　「日置流竹林派弓術書」所収　東京帝國大學運動會弓術部編　名古屋市立鶴舞図書館所蔵　※「自他射學問答」と、附錄「日置流正統及竹林派射術傳系」のみの寫本）、１］。

……吉田出雲守方鄕（重高）（青木権之助栄清縣鄕［１］）→石川光重（彌五右衛門）（付記２１）→荒川（芦川　甚五兵衛）公勝（和歌山藩士）→佐野傳兵衛盛教（調査中）→妻木助九郎勝教（以下　和歌山藩士）→**泊彌三郎永英**→小川彌七郎祐興　小川三郎兵衛知興以下代々。［1，１０、２８「南紀徳川史第十七冊」堀内信］

https://www.google.co.jp/books/edition/南紀徳川史/hMffndC1qNEC?hl=ja&gbpv=0

吉田重高（しげたか）

吉田重政の嫡子。平十郎、助左衛門、出雲守、豊倫、方卿、真重、茂雄、実茂、露滴。佐々木（六角）承横（義賢）の養子となり、父に射術を学び、日置（吉田）流弓術唯授一人を受く。天正三（一五七五）年十一月五日卒、七七。一白露滴大居士。門人に吉田重綱、池田成政、吉田業茂、田中秀次、片岡家次ら。［1］

池田成政（なりまさ）

吉田重高の次男。池田三右衛門の養子。兵助、良心。父・養父に日置流を学び免許。門人に能勢頼次、野村善右衛門ら。［1］

能勢頼次（のせよりつぐ）幕臣

竹重丸、助十郎、惣右衛門、伊予守、摂津守。池田成政、吉田実重師に日置流を学び印可。初め豊臣家に仕え、のち徳川家康に仕え、関ケ原の役後、能勢郡三千石を知行、元

和元(一六一五)年二千三百石加増、二年(三男)頼之に分地、七(一六二一)年致仕、寛永三(一六二六)年正月一八日卒。六五。法名日揮。門人に(五男)能勢頼永ら。[1]

岡田忠明(ただあき)

太郎助、元心。**吉田流(出雲派)を迫永英(和歌山藩士)**師に学び指南免許。門人に山田正依ら。多治見図吾(水戸藩士宝暦二(一七〇五)年出仕))の記事「幕士(幕臣)岡田忠明に学ぶ」[1]

[57「柳營補任」]になし(大番か)。

岡田忠明→鈴木安貞→能勢頼忠→山田勝喜[58「水戸藩の武術」小野崎紀男]

能勢頼忠(のせ よりただ) 幕臣

大助、万之助、助十郎、俊三、のち八兵衛、河内守、俊参。吉田流を父頼永に学び印可。寛文四(一六五四)年八月初めて徳川家綱に拝謁、延宝六(一六七八)年三月御小姓組、天和元(一六八一)年十二月小普請、貞享三(一六八一)年十一月御小姓組番士、享保八(一七二三)年七月致仕、一七年三月二四日吹上御苑にての百手式上覧で九十九本射当てその日の随一。元文三(一七三八)年三月二十一日卒。八七。法名日達。門人に能勢頼喬ら。[1]

山田勝喜(かつよし) 幕臣

主水、平右衛門、主計。延享元(一七四四)年九月初めて徳川吉宗に拝謁、安永五(一七七五)年十二月御書院番士、しばしば騎射をつとめ、七年八月遺跡を継ぎ四百石、寛政八(一七九六)年十二月より西城に勤務。[1]

額田通門(ぬかだ みちかど) 水戸藩士

幕臣山田勝書の次男、額田通久の養子、求馬、久兵衛。実父勝喜に学び印可。天明二(一七八二)年九月御前小姓、寛政二(一七九〇)年五月家督を継ぎ、八百石寄合指引、五年十月進物番頭、六年五月書院番頭、享和三(一八〇三)年閏正月大番頭となり与力を付く、文化元(一八〇四)年七月二〇日卒。四二。門人に榊原照員、加藤直浮ら。[1]

「日置流美人草註解 完」（生弓齋文庫１１０）

寫本一冊　美濃版、十九枚。美人草に註解を加へたもの。奥書に、「右此三十首者當流之秘歌口修等不可勝計能々修學而自師賢學之位可至者也、猥於他見有之者蒙神罰永可失武名者也 仍美人草如件」とある。尚本書には次の様に書き加へられている。「此美人草註解一本 山田氏傳來の趣にて鈴木泰政示さる、蓋 **山田氏は能勢頼忠の門弟**筋なれば此註本恐くは頼忠の手錬せられし者なるべし、然るに其説の中 **岡山(新十郎)**師に傳ふる處の聞書と多く齟齬する事有り 最不審しされと、**頼忠にも正しく(鈴木對馬守安貞)對州先生の直弟**なれば、必ず受る所あり、説明にも知るべからずよりて姑く考異の爲にそのまゝを寫し置り。嘉永二年巳丙(一八四九 己酉)四月十八日　**政行**識」とある。[2]

三島政行　幕臣

安永九(一七八〇)六月四日生。政蔵、六郎、知還老人、凸凹斎。政蕃の六男、寛政六(一七九四)年一族の三島政世の養嗣子となり、文化十二(一八一五)年世禄を継ぎ御書院番、清水家物頭、天保十三(一八四二)年致任、安政三(一八五六)年九月二九日卒。七七。著書に「古弓名」等。[1]

[59 古弓名]「には、「岡山先生 此ヲナゲキテ常ニ門人ニ示教アリシナリ(後略)　文政十一(一八二八)年戊子　三島政行識」とある。

https://kotenseki.mjl.ac.jp/biblio/100332406/viewer/1

「正統日置流美人草註解」（生弓齋文庫６１２）欠本

寫本一冊 半紙版、廿九枚、本多利實註解、美人草所收の三十首を註解したもの。奥書に「此書正統日置流の弓書なる事順次の次第意味尤正し故に再註を加へて書記し置ぬ穴賢、明治三十八年八月末旬　生弓齋本多利實」とある。[2]「[日置本流秘歌 美人草註解」平野栄助　「弓道」昭和四七年四－六月採録]

「日置流美人草」（生弓齋文庫１０９）

寫本一冊　美濃版　十五枚。頭書に「夫當流之射者從日置彈正政次江州吉日出雲守道寶正統也　因之卷射形骨法之埋記剛弱之專用也　此秘歌者術理之二示自師賢學之位爲

至也　其教様々分登麓之道以教置也」とあって、本文には弓歌「武士のしらでかなわぬ弓の道弓馬二つは左右とぞく」……等を収めてある。又奥書に「右此三十首者當流之秘歌口傳等不可計能々修學而自師賢學之位可至者也者蒙神罰永武名可失者也　仍如件　寛政丙辰(八(一七九六))年十月十日　**大村藤右衛門高德**花押　齊藤忠三殿　此一卷高德先生より傳授之秘書之貴殿射術執心深仍厚情心之志令與書者也。文政十一子(一八二八)年二月十日　**柘植清左衛門尉平盈孝**花押　齋藤政太郎殿」とある。

柘植清左衛門盈孝

文化八未(一八一一)年四月一五日御先手組ヨリ西丸御小姓組(七番組)溝口備後守組與頭、文政七申(一八二四)年七月八日先手鉄砲頭、文政十二丑(一八二九)年七月一八日辭［5 6］

「日置流弓術美人草巻」(生弓齋文庫１１２９)

手寫一軸、巻頭に「夫當流之射者從日置彈正政次江州吉田出雲守道實傳正統也、因巻之射形骨法之理記剛弱之心專用也、此秘歌者術理之二示自前賢學之爲至也、其教様々分登麓之道多者哥道以教量也、何道工关鍛錬可極者也」とあり、美人艸秘歌として、「武士のしらでかなはぬ弓のみち弓馬二つも左右とぞきく」等三十首を收め、猶各歌に註書を加ふ。終左記の奥書がある。「右此三十首者當流之秘歌口傳等不可勝計能々修學而自師賢學之位可至者也　猥於他見在之者蒙神罰永武名可失者也　仍如件　安政六巳未(一八五九)年五月吉日　黒川左京正則花押　石野建之助殿」［2］

［6 0「美人草講義」日置彈正正次十七代　齋藤與一郎用正　弓道講座編輯部「弓道講座第２１巻」採録　国会図書館デジタルコレクション］は類似三十首。

「日置流備忘集」(生弓齋文庫６３７)

寫本一册　半紙版　**日置流正統の弓書**。序に「予習二弓矢茲有レ年矣其於二鍛錬之中一、多有所會得是皆傳受之心法也　雖然常玩之則心請乎熟少モ無所忘也　若忽之則心ニ欲記憶心有所忘故筆之盡欲以備忘盡秘慮終作此書名日備忘集假雖有所忘依開此書則瞭然而盡得之矣　是非予欲ル不忘而已欲令後覺者不忘也　若後學者無此書口傳之則一

目雖得之及其懈也 心有所忘而愈失其眞失如此則鍛錬之切廢而不得傳序唯恐其功廢而云爾」巻之一は、弓矢の起の事、巻藁の事、一間中墨之事、足踏定る事、胴作之事、外四十八條。巻之二は十文字と云事、外四十一條。巻之三は、弓之剛弱之事、外三十二條。巻之四は車射の次第、外四十二條。巻之五は、弓稽古人起請端作我心に書事、外三十六條を收む。奥書に「右此書者日置弾正江州吉田雲守入道道寶傳正統之秘書也 先師代々秘而容易不傳然貴殿當流之射執心深年來之修學其志爲深功射術被得妙依而秘書傳之畢猥他見於左之者蒙神罰永武名可失者也 依備忘集如件」とある。「日置流竹林派弓術書」所收。[2]

「備忘集 一二三四五」(生弓齋文庫720-724)

一至五、寫本五册 日置流正統の弓書「日置流備忘集」の條參照。「日置流竹林派弓術書」所收收。[2]

「正統日置流備忘集註解」(生弓齋文庫615)

寫本一册 本多利實著 半紙版、正統の日置流備忘集に註釋を加へたもの。「備忘集」は東京帝国大学運動会弓術部編「日置流竹林派弓術書」に所收さる。[2]

「弓術備忘集 自一巻 至五巻」(生弓齋文庫112)

一至五、寫本一册、美濃版八十八枚、「備忘集」の條參照。**日置流正統の書**。奥書に「右此書者從日置彈正江州吉田出雲守入道道寶傳正統之秘書也、先師代々秘而容易(タヤスク)不レ傳然貴殿當流之射執心深年來之修學其志爲二深効一然射術被得レ妙依而秘書傳之畢猥他見於在レ之者蒙神罰永武名可レ失者也依備忘集如件 **岡田元心忠明 山田新十郎正依 小長谷喜太郎友清**花押 寶暦四甲戌(一七五四)年正月 **大村兵部殿**」とある。[2]

山田新十郎

((牛込)神楽町三丁目 現在の神楽坂三丁目)一帯は(略)享保一〇(一七二五)年に神楽坂南側に屋敷を拝領していた御家人余語金十郎らの屋敷が火除明地として取上げられ、**元文二(一七三七)年この明地の一部が山田新十郎の大的稽古場拝借地**となった。同四年には植木屋

長助の植溜拝借地も設定され、寛保二(一七四二)年には、残りの明地が穴八幡(別当放生寺)の拝借地(御旅所)となった。**延享五(一七四八)年には山田の拝借地は明地**となり、寛政四(一七九二)年には穴八幡の拝借地の西半などが取上げられ旗本肥田家の拝借地となった。[「日本歴史地図体系」]

山田新十郎正依(後改 十次郎 [10])による拝借期間は、深川三十三間堂吹潰期間(享保一六(一七三一)―宝暦元(一七五一)年)である。彼は[57]に無いが、剣術に山田新十郎某。[56]

小長谷友清(こながや ともきよ) 幕臣

政芳、喜太郎。山田正依師に日置流を学び印可、享保八(一七二三)年十月吉宗に初めて拝謁、一五(一七三〇)年八月小姓頭、翌年九月月、師の跡を継ぐ。宝暦五(一七五五)年五月道奉行、八(一七五八)年十一月組頭、十二(一七六二)年十二月西城に勤任、十三(一七六三)年八月四日卒。五三。門人に大村高徳ら。[1]

大村高徳(たかのり) 幕臣

元文五(一七四〇)年生。兵部、のち藤右衛門。安永元(一七七二)年四月家督を継ぎ、天明八(一七八八)年八月鉄砲筆筒奉行。日置流を小長谷友清師に学び印可。門人に大村高雅、和田有儀、関方富ら。[1]

「裏尊集」(生弓齋文庫98)

巻一、二 寫本一冊 日置流正統の弓書。日置弾正より吉田出雲守道寶へ傳へた正統の秘書。射術の法度に従って中りを捨てないことを眼目とする。「日置流竹林派弓術書」所収。[2]

「日置流裏尊集」(生弓齋文庫635)

寫本一冊 日置流正統の弓書。**日置三大弓書の一**。半紙版 十六枚 巻頭に「禮記義曰 射者進退周還必中禮内志正外體直 然後持弓矢審固 然後可以中言故心平體持弓矢固則射中」とあって本文には、「世間に弓延稽古の人奇妙を受し習教すと雖 法度を立て傳授する人稀なり 先世の中に多くは的を射て手前の花形かなわす手前の花形を射んとすれば的中することあたはずと見へたり 當流には

初めての足踏より初めて目中より習學し終に紅葉重に至るまで中りを捨る事なし　修行して自師賢學の位に至る問　的を射ると生物を射ると其外目中に至る迄も中りる花形も崩る事なく相調ふものなり、弓の魂と云は中り也不中は鐵壁を十重貫くことも用にたゝす遠く射遣りても無用なり弓の本地と云は中りて矢早なるを本とす　當世は華形遊興の意のみ稽古して本の眞實の儀は薄くなりしなり　必ずしも法度を破て不可相傳也」と冒頭にある。目錄は日置一遍秘記として、「一、惣十文字之事。　一、騷靜之事。一、邪正口傳。一、分限口傳。一、剛弱之事。一、輕重之事。一、表裏之事。一、延緒之事。一、思無邪之事」等の項目を收め、奥書には、「右此書從日置彈正江州吉田出雲守道實傳正統之爲秘書　然貴殿當流之射執心深年來之修學其志爲深切然得射術妙依秘書傳之者也　紙面雖記猶口傳等不可勝計者口傳以當流之深教猥他見於在之者蒙神罰永武名可失者也　仍裏學集如件」とある。用紙は西久保八幡神社的文字入の罫紙で本多利實の自筆本である。「日置流竹林派弓術書」所收。［2］

「正統日置流裏學集註解」（生弓齋文庫６１１）

寫本一册　本多利實註解　半紙版、廿四枚、奥書に「右此書從日置彈正江州吉田出雲守道實傳正統之爲秘書然貴殿當流之射熱心深年來之修學其志爲深切得射射術妙依秘書件之者也、紙面雖記猶口傳等不可勝計去者口傳以當流之深教猥他見於在之者蒙神罰永武名可失者也仍而裏學集如件　岡田太郎助忠明　山田新十郎正依・小長谷喜太郎友淸・大村藤右衛門高德・齋藤忠三郎殿」更に「此書正傳日置氏之正傳と覺へ待へる然といへとも日置氏遺書にあらす後人傳へ言處の口傳たるものと愚考す依て奥書如件、明治三十八年六月、生弓齋本多利實記」とある。［2］［「日置本流伝書裏学集註解」平野栄助「弓道」昭和四八年三－五月採録］

齋藤忠三郎正心　六郎右衛門

文政十二丑（一八二九）年三月二四日田安殿用人ヨリ船手、天保三辰（一八三二）年八月二四日小十人頭、天保五午（一八三二）年四月二三日卒［５７］

https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/idata/850/8500/07/0703/0317.tif

[61「裏覺集」日本体育大学民和文庫所蔵]

https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100338249/viewer/1

(楷書で美書、易読)は[62「裏學集講義」弓道講座編輯部「弓道講座第21巻」所収 国会図書館デジタルコレクション]と上下巻が入れ替わったもので、共に「**日置一遍射**秘記」という位置付けである。(石堂)貞次の一遍射、元来日置は二流より、採録は妥当である。

※前回から引用番号継続、適宜補足等同様。(末了)

付記 補筆

(付記21) 石川光重

この時代には、豊臣鶴松(天正一九(一五九一)年卒)の守役であった、石川光重(文禄五(一五九六)年卒)がいる。弓に関すること、彌五右衛門の名は調査中。彼の政治的後継者が石田三成。[63「秀吉の側近六人衆と石川光重」寺沢光世 日本歴史 1997(586) 61-79、64「寛政重修諸家譜 第2輯」巻第三百二十三(石河) 國民圖書版]

https://dl.ndl.go.jp/pid/1082719/1/400

孫の光忠は尾張家付属となり、付家老に次ぐ一万石。その七代光籌(いしこ みつかず)[65「徳川林政史研究所所蔵 石河家文書目録(九)]

https://rinseishi.tokugawa.or.jp/image_holder02/ishiko-mokuroku-9.pdf による、天明(一七八一)—享和(一八〇四)年間頃とおぼしき、射形図入の[66「(仮題)竹林流弓道書」徳川美術館蓬左文庫所蔵]がある。

補筆(前回(三) 付記6)

「付き縁拾九間半以射 星野小左衛門」[40「京都三拾三間堂通矢明細記」天理大天理図書館所蔵]とあるが、尾州に関する随筆集[41「塩尻」巻三十 天野信景]には、上野小左衛門とある。

https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100213714/viewer/962

石堂林左衛門尉貞直の妻は、上野小左衛門娘。[6、42「射弓之傳」荒川治右衛門良清 享保一八(一七三三)年五

初春「弓道史料集 第二巻」所収 入江康平 国会図書館デジタルコレクション」には慶長八(一六〇三)年、清須においての的興行の射手に二人の名があり、どちらとも言えない。

[8「尾州竹林流四巻の書詳解」富田常正 所収の「48「尾張國竹林派繁昌記」富田常正」によると、上野小左衛門は「(石堂)如成取立の士」と、竹林派のように見えるが、これは松平忠吉の御弓之衆と、その他の取立の士のようである。以下「師弟雑話」において、彼は道雪派に名がある。

[66「**師弟雑話**」「鈴鹿家文書 第五三六号」所収「弓道資料集第12巻」所収 入江康平 国会図書館デジタルコレクション」

[7]に要約されたと思われる、瓦林與次右衛門成直の経歴と同一内容、「第九 一 問て、弓縁の作法ハ何之筋を御聞候哉。答て、拙者事ハ」であり、**瓦林成直による述作と推定できる**。第九は続いて、

「ケ様(斯様)にいへばとて努々弓法者にてハなし。唯日置流の射形用方の分ハ望深き方へ相傳の事ハ随分と存る間、何時も承れ。去共**あとかたもなき事**を問ハ少思案不レ仕而其返答當座に明成事ハ有べからず。去バ愚身半十四五歳より親の相傳成射形を稽古する事廿五歳迄の間、其年数拾年余、**廿五歳にて竹林に寄依して日置流を傳授し、今七拾歳に及べバ**、凡五十年余鍛錬修行の道を思ふにさへ、まして況(いわん)や一流一通を細に傳授したりと思ひ、未 修行にも不至してかりそめにも廣言過言をいふ人を尤となおもひたまひそ。」

「第十一 一 問て、如レ**仰外之物**に一通の様 子細に見えて候へども、元来有来る所の様子ハ如此そとの子細ハ見へず候故、易と云所を不知迚(とて)の事ニ其異儀を承度候也。

答て、取あつかふ道ハ廣く知るが能候間、指當る事を以て云べし。 仮令(たとえ)バ巻藁前の躰配に矢放て はだぬぎを入、馬手に立たる弓を弓手へ渡し馬手にて衣紋を引つくろひて、弓手に弓を持たる侭に巻藁によりて弓持たる拳を巻藁に押當て早矢をぬき、其早矢の根を巻藁にあて、手の内へ押入、則 其手にて乙矢を抜て乙矢の根を畳にて突揃て、弓を横たへ、矢を袖の下へ かいこんで罷張立作法也。

此仕形は目に立ち、其上 大名高家の御前にては不可レ仕レと云て、外之物に見ゆる通也。亦(また)弓靫(ゆぎ：矢入)を一人して披露の事など、いかに小笠原流にてもあれ、見る所悪けれバ當(竹林)家に易レ之なり。的歩立(かちだち)の作法ハ小笠原流なる永田を本とす。同小笠原流といへども少宛(ずつ) 易る事有。皆是私に非ず。若州の屋形 武田殿の風を以なり。

「一 **其後名古屋**若宮八幡之神前四射礼的之有。此時采拜(采配)と云もの拵、中り外れ、打矢前矢を分けて矢取の者にふらせたりと聞ゆ。此事古き人に尋ねけれ共不分明也。第十二 一問て、先のケ条にあとかたもなき事をと承るハ如何成儀ぞや。

答て、去バ そねみ の上よりハ此前跡かたもなき事を云出したる例の候。それをいかにと云に、四十年に及ぶ事にて候。**尾州清須**にて**伴喜左衛門**(道雪)と我等師匠竹林と相双て竹林方 喜左衛門方と立分たる弟子共、我等互に吟味仕しに、喜左衛門方ハ**上野小左衛門**(御弓之衆 三百五拾石 是ハ清須ニて罷出かうか(甲賀)のもの)・鴫目新右衛門(物集)物集女(もずめ) 御弓之衆 三百石 是ハ清須ニて罷出山城之者)・**河路権内**(河地(サ「内」) 御弓之衆 三百五拾石 是ハ清須ニて罷出みの(美濃)ゝもの)・串田次左衛門((櫛田) 御弓之衆 四百石 是ハ清須ニて罷出みのゝもの)など、其外にも古弟子餘多ハ扶持人に出し各弓の衆にて竹林に負じと思ひ、竹林は家中古参衆の内若手の侍 共新弟子に取事数十人にて、 古き弟子には**野村角之丞**(御弓之衆 喜右衛門/作右衛門)一人成し時、喜左衛門方よりハ **くり矢(繰矢)**を専に射て我が筋より外にくり矢を飛する道を知たる者ハ余になき様に云ひたるを、當家の射手共も未(いまだ)初心にて我々がくり矢をかせがざりし間はさこそあらめと思ふ 所に、竹林もこれを遺恨におもひ彼方随分の射手共の自慢してくり矢射るをたい野と云場へ竹林ハ弟子をも不同道、唯一人行。

扨 喜左衛門方のくり矢自慢の射手共と打まじりて射られしに、其日ハ各不出来にゃ有けん、三丁六七反(二百二十二間≒414m)間の矢を漸(ようやく)に射たる所に、竹林は三丁九反三杖(二百三十四間三〇尺≒454m)の矢を射られたるを、折節 木村寿徳(寿徳派の祖)印可の弟子 伴治兵衛(次兵衛 御弓之衆 三百石 是ハ清須

ニて能出 近江之者)と云仁是も御弓の衆成が、其日ハくり矢を射ずして見物に出たりしが、竹林の矢を見出し古川に水不絶のたとへ是也。

小矢束と云ひ力も弱き弓にて如レ此の手柄成ぞと諸人にいわれたるにて、竹林手柄の沙汰成しを、弟子共も是をよろこびて各くり矢をかせぎ 手柄のくり矢射手餘多出来て、彼おたい野と云 くり矢場は初 喜左派の衆 我矢場の様に思ひたりし所を逼迫して須加口と云所へしりぞき、おたい野ハおのづから竹林方の矢場に成たるごとく、中(あたり)わざも作法も後には當家の衆 張臂に成たる時、彼方腹立て そねみの上より 跡形もなき事を云出したるや。それをなにぞと云に、竹林が流に はこひたる事有に し辛螺(にし 巻貝 [49「日本国語大辞典」])殼はれつ(**死にし から 破裂の離**と云事 有と聞。扨(さて)も珍敷(めずらしき)ことぞと同士共として云ひ、そしりの種としたる由也。是を喜左衛門が弟子 京邊の茶屋餅屋絃作、亦 本福寺のあんどうにげんしん など云し賤者共に傳へいはせたる由也。

其頃某ハ牢人にて有つるが、當竹林弟子の内印可初めに野村と同学に修学をとげ、一字も不レ残旨歸起請の修学の内に 辛螺からやらん 栄螺から(さざいから：尻のすわらぬ者 [49])哉らん。爰(ここ)にも聞ぬ事成しを彼倭人方より云出したる事なれば 今云ふ詞もそれに関しての事也。」

瓦林が七十歳頃(「矢数指南師弟問答」再書の寛永十三(一六三六)年前後か)の著作で、その四十年前、竹林に入門していたが牢人。のち、慶長十一(一六〇六)年には吉良義定の臣[11「日本武術名家伝」飯島唯一 国会図書館デジタルコレクション]となり、「慶長十二(一六〇七)年、(松平)忠吉の旧臣に暇を下さる(未年の浪人払)」[6]と整合する。

また、[48]の典拠の一つとしている[「竹林流弓術覺」荒川良清 享保一八(一七三三)年春]は、同一著者、同年の[42]に類似と推測される。[42]の続く以下の記載は、杉山三右衛門 寛永四(一六三七)年印可、佐武源太夫 寛永六(一六二九)年八月印可[1]以降と推測される。**杉山三右衛門が紀州から移籍し、さらに紀州の佐武源太夫が、印可の前年**

に、野村作左衛門指南で堂に上がっていても、紀州と記しながらも並列させている。

「一　其後名古屋若宮八幡之神前四射礼的之有。此時　采拜（采配）と云もの拵、中り外れ、打矢前矢を分けて矢取の者にふらせたりと聞ゆ。此事古き人に尋ねけれ共不分明也。

一　竹林為貞（貞次）印加（允可）之輩

沖津伴左左衛門　朝岡平兵衛
安部勘兵衛　太田太兵衛
大沢五郎大夫　岡寺谷右衛門

紀州御家中

杉山三右衛門　佐竹源太夫
芳賀次郎兵衛　内藤左平
星野小左右衛門　岡部藤左衛門
平岩弥五助　長屋六左衛門
松井平八郎　岡部長五郎

二代目藤左衛門之事

飯沼左源太

林左衛門之事

右外他國にも印可之有り。不分明也。」［４２］

吉見臺右衛門の蔵書リストには、「雑話問答」に似た「師弟雑話問答」がある。［２０「南紀徳川史 第六冊」堀内信］https://www.google.co.jp/books/edition/南紀徳川史/YVeMr3G5D3oC?hl=ja&gbpv=1&dq=南紀徳川史%E3%80%80 第6冊&pg=PP9&printsec=frontcover

「雑話問答」（生弓齋文庫６３３）が、日置流竹林派弓術書の採録文書の帙５６にある。文書採録に関して役割があったかもしれない。［2］に該当な書誌く詳細不明である。

ほぐし弦の作り方

岡山支部　頓宮　泰彦

最近は合成の弦が安くて長持ちするので多くの方が使用していますが「中仕掛けほぐし弦」は如何していますか？私が弓道を習い始めた頃は切れ弦で「ほぐし弦」を作っていました。今のように合成弦の無い頃でしたから、最初は切れ弦をそのままほぐして使用していましたが、一度だけ煮込んで「くすね」を取り除き、ほぐし弦を作りました。それを見た私の恩師・故大守麟児先生からくすねの除去の仕方を教わったほぐし弦の作り方です。ご存知の方もおられると思います。最近はほぐし弦を作る方もいないと思いますので、お知らせします。

私は麻の切れ弦からほぐし弦を作ります。私の学生時代には「干し弦」と云っていましたが本当の名は解りません。今はほぐし弦としておきます。

材料の弦ですが、質の良い「くすね」を使用した弦。くすねが悪いと弦からくすねが上手く取れません。それと弦の麻の繊維の長さです。

一、作り方を説明します。まず切れ弦の仕掛け部分を切り取り弦の下部「月の輪」を除き二等分。弦の上部を下部の二等分した長さに切断します。弦の上部「日の輪」の部分も布、補強麻を取り除きます。弦切れの場所「中切れ」で一本の弦からだいたい六本のほぐし弦の原型が出来、これを弦五本分ほど貯めて本格的にほぐし弦作りに進みます。（写真①）

二、まずくすねを溶かす為の液体を作ります。米のとぎ汁の一番濃い汁、但し自分で玄米を精米した米、もしくは米穀店で研いでない米のもの。量販店の米ではとぎ汁が薄いので。（写真②）

三、とぎ汁の中にほぐし弦原型を一晩から二晩漬け込みます。くすねの溶け具合を確認し不充分なら重曹を少々加え一晩漬けます。（写真③）

四、くすねの溶けたほぐし弦を、水もしくは湯の中でほぐしながら麻の繊維の短い部分を取り除き一定の長さにします。（写真④）

写真①

写真③

写真②

写真④

五、全てのほぐしが終れば全てを纏めてもう一度水洗いをして再度短い繊維を取り除きます。（写真⑤）

六、これから乾かしになります。新聞紙等の給水質の良い紙にほぐした弦を挟み込み数日かけて乾かします。冬季は暖房機の近くで、その他の時期は太陽の下で乾燥させます。（写真⑥・⑦）

写真⑤

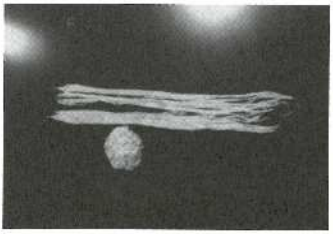
写真⑥

七、完全に乾燥したほぐし弦がくっついていますから「ほぐして」いきます。その時に短い繊維を取り除きます。（写真⑧・⑨）

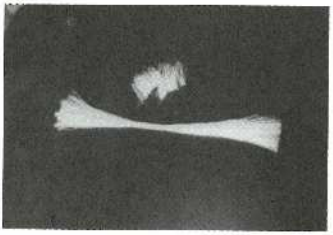
八、七の作業が終れば紙で一部を纏め両端を切り揃えて完成です。（写真⑩）

写真⑦

写真⑨



写真⑧



写真⑩

私がほぐし弦を作り出したのは今から半世紀前、その頃は米のとぎ汁くらいしか無かったと思います。今は中性洗剤、重曹などで出来ると思いますが私は今でも米のとぎ汁でやります。

追伸一　切れ弦を裁断し、弦の上部（日の輪）の方向を纏めてくすねを溶かし、必ず弦の上部（日の輪）の方から繊維を「ほぐす」こと。

追伸二　弦をほぐした短い麻繊維は丸く整えて乾かして、麻の繊維の長いものがあれば刺し子をして「まぐすね」にする事が出来ます。

野辺山合宿研修を終えて

洗心洞稽古会支部　吉村　圭史

■はじめに

眼前に八ヶ岳連峰を望む長野県は野辺山の地で開催された本多流生弓会合宿研修会に初参加致しました。令和五年度会報一四六号発刊にあたり、拙文ながら合宿研修会参加の雑感を寄稿致します。

■野辺山、帝産ロッヂ

六月二十五、二十六日、関東平野は六月観測史上初となる気温四十度越えの猛暑のニュースが驚きをもって報じられる中、標高一千三百四十五米の野辺山は快晴冷涼の絶好の弓道日和となりました。合宿場の帝産ロッヂは本多流の高名な射手で師範の故亀岡武さんが後進育成のために設立された宿泊施設を伴う弓道場で、初参加の私は背筋が伸びる思いで合宿に臨みました。また全国津々浦々からご参集の弓友諸兄姉におかれましてもコロナ禍の影響で三年ぶりとなる帝産ロッヂでの合宿に夫々期するものを持っておられたように感じました。

■六月二十四日、前日稽古

二十四日金曜日は会社に有休の届けを出し、普段洗心洞で一緒に稽古している先輩の星野さんと飯野さん、私の三人で前日入りしました。

前泊組には同じく洗心洞の坂本師範、松永さんがいらしており五人での稽古となりました。

私は、会の伸び合いが弱く離が小さい悪癖を正すべく、坂本師範から熱心なご案内頂きました。先輩お二人は学生さながらの矢数稽古で、飯野さんは四時間でなんと八十射。これには感服致しました。星野さんは持参した二張とも弦切れの不運があったもののこちらも三時間弱で約五十射。流石の一言でした。

到着！駅前で記念写真

■六月二十五日、合宿初日

先輩のお一人は四時起床で稽古されたとか。私は七時から道場に出て道具の準備、八時から稽古しました。十時頃から参加者の皆様が続々と到着され、一気に合宿の雰囲気が盛り上がって参りました。

初日の研修日程は以下の通り。

十二時半　開会・矢渡
十三時　座学
十三時半　班別研修（及び印可審査）
十七時　初日の研修終了
夜　夕食・懇親会

開会にあたり帝産ロッヂ会長で亀岡師範のご子息である亀岡寛治氏からご挨拶がございました。ご挨拶の中では四世利永宗家が高校生の時、ここ帝産ロッヂで三世利生宗家と親子お二人きり、一週間のそれはそれは厳しい合宿をなさったエピソードをご披露頂き、大変感銘を受けました。

班別研修は支部を跨いだ班分けで、私は指月庵の水谷さんが班長、埼玉西部の秋山さん、静岡の船崎さん、増田さんと同班。普段とは違う弓友との熱のこもった稽古となりました。班内ではスマートフォンの動画を活用しながらお互いの射技について率直な意見交換が行われ各々に新しい発見や再確認がありました。

夕食後は懇親会。感染対策を徹底しながらの酒宴となりましたが、其処彼処で身振り手振りの弓道談義に花が咲きこれまた楽しい会でした。私はつい酒量が過ぎてしまい少々反省。

楽しい懇親会でした

■六月二十六日　最終日

二日目の研修日程は以下の通り。

八時半　師範会の模範演武（繰大前）
九時　北原師範代ご講演「弓から習ったこと」
九時半　射礼研修・射技研修
十一時半　昼食
十三時　自主稽古
十四時　講評・閉会

二日目、冒頭の師範会による模範演技（繰大前）に続き、北原師範代から斎藤孝太郎さんや戸倉章さんとの思い出を交えつつ「弓から習ったこと」というテーマでご講話を頂き、弓を学んでいくうえで大切なことを多く教わることが出来ました。また北原師範代は常々「本多流で先生は宗家だけ、僕のことは先生と呼ばないでね」と仰います。このような姿もしっかり見倣って参りたいと感じました。

洗心洞での稽古風景
（稽古は裸足です）

射礼研修・射技研修では星野さん、私がモデルとなり普段の洗心洞での稽古風景を再現して皆さんに見て頂きました。小山さんの解説付きで、皆さんに興味深く見て頂けたのではないかと思います。

また昼食後は第二道場に飾られた書画について飯野さからご案内頂きました。書の中には亀岡氏の事績を綴ったものや鳴弦蓋日の儀で使用された祝詞など、普段お

飯野さんのご案内で貴重な
書画を見学しました。

目にかかることのない興味深いものが多くありました。

■最後に

全日程を大きな事故もなく無事に終えることができ閉会。この合宿で得た手応えと課題をしっかりと持ち帰り、また洗心洞で稽古を重ねて参ります。

最後に合宿期間中、的確な一寧なご案内を頂いた弓友諸兄姉に対し改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

故山本師範との思い出

東京支部　青山　とき子

寒川先生に勧められ本多流の研修会に出席させていただいたある日、ある方からの『あなたは本多流に入っているんでしょ？』との問いに、『いいえ未だです。』と答えたら、『それはモグリだよ！』と言われ、慌てて入会させていただいたのが本多流入会の切っ掛けでした。

弓に触れて間もない私が「本多流」に入会するなんて、烏滸がましいと考えていたのです。

ある日の射技研修会で、故山本師範に『何で本多流に入ったの？』と質問され即答できませんでした。間を置かず『はい、あなたは巻藁前へ行って！』と言われたのですが、それが何を意味するのか解る由もなく、山本師範に見ていただけるものと思い込み、巻藁前で師範がお越しくださるのを、ひたすらお待ちしていたことを思い出しました。

いま、思い起こしますと、全く「弓」になっていないというご判断だったのでしょう。

あれから何年も経過しましたが、お恥ずかしいことに、いまだにまともに弓が引けていないと思っています。もう一度、山本師範に見ていただけたら『はい、巻藁前』と言われるかしら⁉、あるいは、少しは上達した姿をお見せでき、「おう、上手くなったな！」と、言って貰えるかしらと思っています。今となってはなつかしい貴重な思い出となりました。

二〇一九年三月二九日にご逝去されました山本師範のご冥福をお祈りいたします。

東京支部の研修会では杉山師範にお世話になっており、二月二〇日の自由参加の時には坂本師範にお世話になりました。

有難うございました。

本多流生弓会に入会して

東京支部　大塚　美希

学生時代はじめて弓を習い教わった流派、それが本多流でした。しかし当時の私は自分が何流なのかも分からず、ただ教わるがまま弓を引きそれで満足していたのです。卒業し、弓から離れて十数年を経た時、それまで沸々としていたものがある日、爆発しました。弓が引きたい。その思いで門を叩き出会ったのが、本多流生弓会でした。そしてそこで初めて、自分の流派を知りました。これはもうご縁だと思いました。自分の射法の流派を知った時、ぼやけていたものが晴れたようなそんな心持ちだったのを今でも覚えています。

まさかこうして入会が叶うとは弓にも思わず。今は羨望が現実になったことへの喜びと同時に、身の引き締まる思いがいたします。このような機会をいただけたこと、そして素晴らしい先生方の射を間近で拝見できる機会をいただけたことに深く感謝いたします。この偉大な流派の名に恥じぬよう、少しでも剛健典雅に近づけるよう精進して参る所存です。

茎田実師範を偲ぶ

東京外語大支部　森　巌

この度の突然の訃報に接し、言葉もなくしばらくの間呆然としていました。それほど茎田師範の逝去は、東京外国語大学弓道部（以下外大弓道部）にとって大変衝撃的なことでした。謹んでご冥福をお祈りします。

■茎田さんとの出会い（以後親しみを込めて「茎田さん」と書かせていただきます）

私が茎田さんと初めてお会いしたのは今から四十五年前（一九七八年）の学生時代に遡ります。部内コンパの席で弓道初心者の心得についてお伺いすると、「最初はとにかく中てることを目標に稽古しなさい」という助言をいただきました。これは学生弓道は中らなければ面白くないし、また続けられないという意味であると理解しました（『中外論』にも「初心者を引き入れるには何でも最初より中てさせるに限ります」とあります）。

当時の外大弓道部は、創部者でありまた師範でもあった本多利生三世宗家と、当時師範代であった茎田さんのご指導を仰いでいました。実際にはお二方とも仕事が大変忙しく、ご指導いただく機会はそれほど多くはなかったのですが、たまに茎田さんが道場に顔を出されて、部員の前で模範の射を行じられたときの射影は、今でもしっかりと眼に焼き付いています。ガッチリとした体躯から遠く高くとったきれいな形の大三、大きく力強い引き取り、そして微動だにしない深い会へとつながり、澄ましが入って押手がぶれる

ことなく軽妙で鋭い離れが出るのを見たとき、「ああ、これが剛健典雅の本多流か」と部員一同感激したものです。

■生弓会（現本多流生弓会）での活動

当時茎田さんは生弓会において『会報』の編集委員として活躍されていました。大学を卒業した弓道部員には卒業後しばらく『会報』が送られてきました。そのとき戴いた創立六十周年記念号（昭和五十八年十一月一日・第一〇六号）では、「本多流創立六〇周年記念祝典並びに祝賀射会」の写真が巻頭に掲載されており、本多利生宗家の鳴弦、石岡久雄師範の天地祓、柳原光春師範の蟇目、小山晋一郎師範の矢渡などがあり、当時の錚錚たる指導陣のもとで生弓会の運営に携わりつつ、本多流弓道の研鑽を積まれていたことがよく分かります。特に三世宗家とは一緒に弓を引きながら本多流のあるべき姿についてよく議論されたそうです。東京大学に続き大学弓道部を母体とした生弓会支部を作ることにも尽力されました。その後も理事、評議員、顧問として生弓会の発展に大いに寄与されました。

■学生弓道への貢献

平成六年（一九九四年）に三世宗家が逝去されたあと、茎田さんは外大弓道部の師範として最期まで学生弓道の指導に貢献されました。本多流はもともと本多利実翁が体育と精神修養を目的に学生弓道に力を注がれていたことは有名ですが、生弓会はその伝統を引継ぎ、昭和五十七年（一九八二年）時点では、指導陣が一年間に全国で約七万七千人を指導し、その三分の二は学生であったという記録が前述した『会報』に載っています。

茎田さんは外大弓道部の師範として様々な新しい試みを実践されました。その一つが留学生に日本の伝統文化としての弓道を指導し、弓道の海外普及を目指すことでした。外大弓道部には毎年多くの留学生が入部を希望してきます。そのほとんどが日本での留学時代に日本的な武芸を学んで帰りたいという希望を持っています。大学弓道部の使命の一つとしてこのような留学生のニーズに積極的に対応されていました。さらに留学生の弓道体験談をまとめた英文の部内冊子、『Kyudo & Me』を発刊されました。

私自身は茎田さんからの強い勧めもあって、卒業後二十

年以上たってから弓道を再開し、外大の道場で指導を受けました。稽古が終わった後は、行きつけの居酒屋で弓道談議に花を咲かせたことが懐かしく思い出されます。その話題の中には必ず歴代師範であった戸倉章先生や三世宗家の遺訓が含まれていました。荃田さんは学生に対し、卒業してからも弓道を続けることを強く希望され、特に四年生に対しては一段高いレベルの本多流弓道を「本多流勉強会」を開催して伝授し、社会人弓道への足がかりを作ることに熱心でした。そのため三年生から、秋のリーグ戦終了後に「引退する」という言葉を聞くと、とても残念がっておられました。

荃田師範は本多流弓道に生きた方です。晩年に肩を壊され、弓を引けなくなってからも道場に顔を出されて学生を親身に指導しておられました。私はその姿や生き方を良く知る者の一人として、微力ながら外大弓道部で本多流弓道を伝えて行きたいと思っています。

『Kyudo&Me』

学校会員活動報告　帝京大学
（令和四年三月～令和五年二月）

弓道部指導員（横浜支部）　片岡　泰輔

■東京都学生弓道連盟　令和四年度新人戦（百二十射）
令和四年三月五日～二十日　オンライン
第一回戦○帝京大学　四十九中
芝浦工業大学　三十五中
第二回戦○慶應義塾大学　六十九中
帝京大学　四十八中

■東京都学生弓道連盟　第六十回女子部記録会（四十射）
令和四年四月三十日　明治神宮至誠館第二弓道場
吉永衣里（三年生）　二十八中
上見結羽（二年生）　十五中
玉木千賀（二年生）　十五中

■東京都学生弓道連盟　第六十回百射会
令和四年五月　一日　明治神宮至誠館第二弓道場
保坂龍星（四年生）　五十六中

■第五十二回全関東学生弓道選手権大会
令和四年五月二十八日～二十九日　オンライン予選
六月　十一日～　十二日　日本武道館
予選　男子団体（二十四射）　十三中
女子団体（十二射）　八中　通過
男子個人　通過者なし
女子個人　吉永衣里（三年生）　通過
決勝　女子団体
一回戦○帝京大学　九中
日本大学工科　五中
二回戦　帝京大学　八中
○日本大学　十中
女子個人　吉永衣里（三年生）
射詰尺二〇〇×

■第七十回　全日本学生弓道選手権大会
令和四年七月二日～　三日　オンライン個人予選

八月十日～十二日　日本武道館

予選　男子個人　保坂龍星（四年生）　通過
　　加藤篤志（三年生）　通過
　　諸井遠和（一年生）　通過
　女子個人　吉永衣里（三年生）　通過
　男子団体（二十射）　九中
　女子団体（十二射）　五中

決勝　男子個人　保坂龍星（四年生）
　　射詰尺二〇〇〇　八寸〇×
　　加藤篤志（三年生）
　　射詰尺二〇〇〇　八寸×
　　諸井遠和（一年生）　第十位
　　射詰尺二〇〇〇　八寸〇〇×
　　八～十位決定遠近競射
　女子個人　吉永衣里（三年生）
　　射詰尺二〇〇〇　八寸×
　　八～十位決定遠近競射

■第五十三回全日本学生弓道遠的選手権大会

令和四年八月十三日　全日本弓道連盟中央道場

予選　男子個人　通過者なし
　　女子個人　通過者なし

■東京都学生弓道連盟　令和五年度リーグ戦（百六十射）

令和四年九月十日～十月三十日　オンライン

Ⅲ部Ａブロック　四位（的中率　五割三分六厘）

第Ⅰ週　〇東京大学　百　六中
　　帝京大学　七十八中
第Ⅱ週　〇東京都立大学　百　五中
　　帝京大学　八十八中
第Ⅲ週　空き週
第Ⅳ週　〇立教大学　八十七中
　　帝京大学　七十三中
第Ⅴ週　明治学院大学　八十九中
　　〇帝京大学　百　四中

■東京都学生弓道連盟　令和五年度女子部リーグ戦（八十射）

令和四年九月十日～十月三十日　オンライン

Ⅲ部Bブロック　三位（的中率　四割六分三厘）

第Ⅰ週　先攻　明星大学　二十九中
後攻○帝京大学　四十二中

第Ⅱ週　先攻○東京外国語大学　四十八中
後攻　帝京大学　三十二中

第Ⅲ週　空き週

第Ⅳ週　先攻　東京医科歯科大学　十七中
後攻○帝京大学　三十九中

第Ⅴ週　先攻○東京工業大学　四十五中
後攻　帝京大学　三十五中

■新年射会兼大島楯争奪支部対抗戦（三十六射）

令和五年一月二十九日　明治神宮至誠館弓道場

団体戦　第三位　帝京大学A　十七中
①保坂龍星（四年生）　六中
②廣瀧小夏（一年生）　六中
③赤堀正治（一年生）　五中

■在外公館長表彰（日本大使表彰）

令和四年五月三十日　在中国日本大使館
北京澄明（すみあき）弓道場　許　博堯（OB）、他
https://www.cn.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000858.html
https://www.kyudojournal.com/?p=478

■第七十三回全日本弓道遠的選手権大会

令和四年十月二十九日～三十日　全日本弓道連盟中央道場
男子　鶴田訓弘（OB・静岡県）　予選六射二中

■日中国交正常化五十周年記念レセプション

令和四年十一月一日　駐中国日本大使公邸
弓道デモンストレーション　許　博堯（OB）
https://www.cn.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000945.html

■第三十二回大学OB・OG親善射会（三十六射）

令和五年二月十二日　東京武道館

団体戦　準優勝　帝京大学帝弓会A　二十一中
①磯田一貴（OB）　八中
②佐藤大輝（OB）　四中
③鶴田訓弘（OB）　九中

・Twitter　：https://twitter.com/teikyo_kyudo
・Instagram：https://www.instagram.com/teikyo_kyudo/

第 70 回全日本学生弓道選手権大会
男子個人第 10 位　諸井遠和（１年生）

評議員会・理事会・運営委員会報告

常務理事　飯野　雄一郎

令和四年度より、新型コロナ対策およびデジタルツール活用による遠隔地委員の参加拡大、および経費節減の観点から、会議体はすべてオンライン開催を原則としました。

■評議員会

①令和四年二月十二日（土）

・令和三年度計算書類承認（決算）

・二月の定時開催のみとすることを申し合わせ

■理事会

①令和四年二月十二日（土）

・令和三年度計算書類承認（決算）

・令和四年度予算計画

・各種申込書改訂

②令和四年六月十一日（土）**臨時**

・創立一〇〇周年記念事業実行委員選任

③令和三年十二月十一日（土）

・令和五年度運営方針

・令和五年度事業計画及び令和四年事業実施報告

・令和五年度予算及び令和四年度決算見込み

・令和五年人事案（内定）

・創立一〇〇周年記念事業内容

・令和四年度運営方針に基づく取り組みと成果

・東京リスマチックとの取引基本契約締結

■運営委員会（主な議題）

①令和四年二月十二日（土）

・評議員会、理事会内容共有

・会報準備状況

・行事準備状況

②令和四年四月九日（土）

・行事準備状況と実施報告

・欧州支部への会報発送遅延（ウクライナ侵攻）

・アジア地区三名に会報PDF配信

・公式ホームページへのニュースリリース整備

・創立一〇〇年事業内容検討

・「本多流」の商標登録検討

③令和四年六月十一日（土）

・行事準備状況および実施報告

・会報寄贈先の検討

・「入会案内パンフレット」リニューアル

・『月刊弓道』に暑中見舞い広告出稿

・創立一〇〇周年記念事業実行委員会発足

・『射法正規』増刷検討

④令和四年八月六日（土）

・行事準備状況および実施報告

・下期行事案内準備

・公式ホームページ「本多流について」改訂

・中間決算見込み

・『射法正規』第二版出版決定

・会員名簿の在り方検討

・会費未納者督促

⑥令和四年十月八日（土）

・行事準備状況および実施報告

・次年度行事計画素案

・欧州支部への会報発送完了

・次年度会報内容検討

・次年度運営体制検討

・『本多流弓術書』データ引取（印刷業者より）

⑦令和四年十二月十日（土）

・理事会内容共有

・行事実施報告

・次年度上期行事案内段取り

・『月刊弓道』に年賀広告出稿

・学生弓道大会（全関、全日）への広告出稿確認

・射礼DVD増刷完了

・会員章金型保持

・創立一〇〇周年記念事業関係意見交換

・公式グッズ試作品報告

会員異動

会員管理担当理事　水谷　旨智

令和四年度の会員異動は次のとおりです。

（敬称略、五十音順）

■国内会員

▼入会

安達　りえ（東京）　阿部　ゆかり（関西）
阿部　隆之介（東京）　今泉　文雄（東京）
大嶋　恭彦（赤門）　大塚　美希（東京）
大西　陸貴（東京）　岡田　章（関西）
木村　源輝（東京）　高島　淳（関西）
瀧川　史子（横浜）　竹田　法子（東海）
恒川　敦宏（赤門）　永松　布美子（横浜）
萬澤　ふくこ（東京）　宮本　和子（赤門）

▼逝去された会員

茎田　実（東京外語大）

▼退会　十四名

■海外会員

▼入会

Poland
Adam Stepien　Agnieszka Gradecka
Aleksandra Salamon　Dominika Wawer
Kacper Florianski　Karolina Wiacek
Katarzyna Ozog　Liwia Maslanka
Maciej Gornicki　Olga Zwalska
Urszula Wojtowicz
Russia
Diana Zhukova　Rutsam Khusainov

▼退会　二名

■会員総数　四〇五　名

（令和五年二月一日時点）

▼国内会員　二九九名

普通会員　二一〇名
維持会員　六七名
終身会員　一〇名
学生会員　一名
学校会員　二校

▼海外会員　一〇六名

九九名
一名
一名
七名
一校

※弓具店等の広告会員は合計にのみ含む

には、行事の参加や新会員の獲得などにご協力をお願い申し上げます。令和五年度も引き続き、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

決算報告

業務執行理事経理部長　花田　篤志

■令和四年度の決算について

平素より、当会の活動に格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。このたび、令和四年度の決算報告をいたします。

当会は、今年度も新型コロナウイルスの影響によりいくつかの射会が中止となりましたが、京都、中央、合宿研修会は無事に開催され、会員の皆様には大変ご好評いただきました。また、運営側の取り組みとして、オンライン会議を活用することで会議室費用や移動交通費を大幅に削減することができ、黒字での決算となりました。今後も事業継続を続けるためには、より効率的な支出の方法を模索していく必要がありますが、引き続き会員の皆様とともに、より良い会運営に努めてまいります。収入面では会員の皆様からいただいている会費や事業への参加費が主なものになりますので、今後の会の安定的な運営を行うにあたり、会員の皆様

貸　借　対　照　表

令和4年12月31日現在　　（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金	166,873	146,559	20,314
預金	5,012,481	5,003,484	8,997
棚卸資産	245,453	264,966	△ 19,513
前払費用			
預け金			
流動資産合計	5,424,807	5,415,009	9,798
2　固定資産			
(1)基本財産			
文庫書籍	1,000,000	1,000,000	0
預金	3,000,000	3,000,000	0
基本財産合計	4,000,000	4,000,000	0
(2)特定資産	0		0
特定資産合計			0
固定資産合計	4,000,000	4,000,000	
資産合計	9,424,807	9,415,009	9,798
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
前受金	0	25,000	△ 25,000
預り金			0
流動負債合計		25,000	△ 25,000
負債合計		25,000	△ 25,000
Ⅲ　正味財産の部			
1　指定正味財産			
民間寄付金	1,000,000	1,000,000	0
2　一般正味財産	8,424,807	8,390,009	34,798
前期繰越正味財産	8,390,009	8,611,649	△ 221,640
当期正味財産増減額	34,798	△ 221,640	256,438
正味財産合計	9,424,807	9,390,009	34,798
負債及び正味財産合計	9,424,807	9,415,009	9,798

令和４年度　正味財産増減計算書

令和4年1月1日から令和4年12月31日まで

（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1　経常増減の部			
（1）経常収益			
財産運用収益	2,416	2,161	255
基本財産利息	2,135	2,135	0
特定資産利息	0	0	0
その他資産利息	281	26	255
受取会費	1,302,500	1,352,000	△ 49,500
受取年会費	1,279,500	1,348,000	△ 68,500
受取入会金	23,000	4,000	19,000
受取寄付金	13,000	3,000	10,000
	0	0	0
受取寄付金	13,000	3,000	10,000
事業収益	909,000	135,500	773,500
事業大会収益	68,000	12,000	56,000
研修会収益	695,000	0	695,000
広告料収益	50,000	55,000	△ 5,000
記念出版物収益	28,500	9,000	19,500
審査料収益	24,000	46,000	△ 22,000
物品頒布収益	43,500	13,500	30,000
雑収入	0	0	0
経常収益計	2,226,916	1,492,661	734,255
（2）経常費用			
事業費	1,912,638	1,191,401	721,237
期首商品棚卸高	264,966	271,128	△ 6,162
当期商品仕入高	0	0	0
販売諸経費	0	2,842	△ 2,842
期末商品棚卸高	△ 245,453	△ 264,966	19,513
会場使用料	169,500	71,000	98,500
旅費交通費	539,696	19,360	520,336
通信費	22,370	273,577	△ 251,207
表彰費	13,400	237,700	△ 224,300
対技交歓会費	5,712	0	5,712
会議費	15,728	0	15,728
事務用消耗品費	182,296	70,124	112,172
諸経費	92,214	5,030	87,184
印刷製本費	732,120	435,600	296,520
電気代	30,089	40,006	△ 9,917
建物借料	90,000	30,000	60,000
管理費	279,480	522,900	△ 243,420
評議員・理事会費	0	18,674	△ 18,674
旅費交通費	0	103,100	△ 103,100
通信費	43,795	16,368	27,427
会議費	30,790	3,524	27,266
事務用消耗品費	1,229	35,856	△ 34,627
慶弔交際費	0	0	0
広告宣伝費	87,110	18,980	68,130
租税公課	70,000	70,000	0
諸経費	46,556	256,398	△ 209,842
経常費用計	2,192,118	1,714,301	477,817
当期経常増減額	34,798	△ 221,640	256,438
2　経常外増減の部			
(1)経常外収益	0	0	0
(2)経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	34,798	△ 221,640	256,438
一般正味財産期首残高	8,390,009	8,611,649	△ 221,640
一般正味財産期末残高	8,424,807	8,390,009	34,798
指定正味財産期首残高	1,000,000	1,000,000	0
指定正味財産期末残高	1,000,000	1,000,000	0
Ⅲ　正味財産期末残高	9,424,807	9,390,009	34,798

注記：借入限度額　0円

令和４年度　収支計算書

令和4年1月1日から令和4年12月31日まで

（単位：円）

科　　目	予算額A	決算額B	差異B-A	進捗率
Ⅰ　事業活動収支の部				
1　事業活動収入				
財産運用収入	2,000	2,416	416	120.8%
基本財産利息収入	2,000	2,135	135	106.8%
特定資産利息収入	0	0	0	0.0%
その他利息収入	0	281	281	皆増
会費収入	1,466,500	1,302,500	△ 164,000	88.8%
受取年会費収入	1,442,500	1,279,500	△ 163,000	88.7%
受取入会金	24,000	23,000	△ 1,000	95.8%
受取寄付金	0	13,000	13,000	皆増
受取寄付金	0	13,000	13,000	皆増
事業収入	1,215,000	909,000	△ 306,000	74.8%
事業大会収入	336,000	68,000	△ 268,000	20.2%
研修会収入	735,000	695,000	△ 40,000	94.6%
広告料収入	50,000	50,000	0	100.0%
記念出版物収入	24,000	28,500	4,500	118.8%
審査料収入	48,000	24,000	△ 24,000	50.0%
物品頒布収入	22,000	43,500	21,500	197.7%
雑収入	0	0	0	
事業活動収入合計	2,683,500	2,226,916	△ 456,584	83.0%
2　事業活動支出				
事業直接費支出	2,185,013	1,893,125	△ 291,888	86.6%
販売諸経費	8,590	0	△ 8,590	0.0%
会場使用料支出	349,000	169,500	△ 179,500	48.6%
旅費交通費支出	835,000	539,696	△ 295,304	64.6%
通信費支出	227,200	22,370	△ 204,830	9.8%
表彰費支出	99,000	13,400	△ 85,600	13.5%
射技交歓会費支出	11,000	5,712	△ 5,288	51.9%
会議費支出	16,000	15,728	△ 272	98.3%
事務消耗品費支出	98,000	182,296	84,296	186.0%
諸経費支出	96,300	92,214	△ 4,086	95.8%
印刷製本費支出	366,923	732,120	365,197	199.5%
電気代支出	18,000	30,089	12,089	167.2%
建物借料支出	60,000	90,000	30,000	150.0%
管理費支出	485,000	279,480	△ 205,520	57.6%
評議員・理事会費支出	53,000	0	△ 53,000	0.0%
旅費交通費支出	81,000	0	△ 81,000	0.0%
通信費支出	9,000	43,795	34,795	486.6%
会議費支出	30,000	30,790	790	102.6%
事務用消耗品費支出	50,000	1,229	△ 48,771	2.5%
慶弔交際費	50,000	0	△ 50,000	0.0%
広告宣伝費	55,000	87,110	32,110	158.4%
租税公課	70,000	70,000	0	100.0%
諸経費	87,000	46,556	△ 40,444	53.5%
事業活動支出合計	2,670,013	2,172,605	△ 497,408	81.4%
事業活動収支差額	13,487	54,311	40,824	
Ⅱ　投資活動収支の部				
1　投資活動収入	0	0	0	
2　投資活動支出	0	0	0	
投資活動支出合計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
Ⅲ　予備費支出	0	0	0	
当期収支差額	13,487	54,311	40,824	
前期繰越収支差額	5,340,521	5,340,521	0	
次期繰越収支差額	5,354,008	5,394,832	40,824	

財　産　目　録

令和4年12月31日現在　　（単位：円）

		金額		
Ⅰ　資産の部				
1　流動資産				
現金		166,873		
通常貯金	ゆうちょ銀行	2,989,981		
振込口座	ゆうちょ銀行	575,581		
普通預金	みずほ銀行	446,919		
定期預金	ゆうちょ銀行	1,000,000		
棚卸資産	体配書	245,453		
		5,424,807		
流動資産合計			5,424,807	
2　固定資産				
(1)基本財産				
文庫書籍		1,000,000		
定期預金	みずほ銀行	3,000,000		
基本財産合計		4,000,000		
固定資産合計			4,000,000	
資産合計				9,424,807
Ⅱ　負債の部				
1　流動負債				
前受金	R5年度会費	0		
預り金		0		
流動負債合計			0	
負債合計				0
正味財産合計				9,424,807

貸借対照表に対する注記

1 棚卸商品の評価方法
最終仕入原価法を採用している。

2 特定資産の増減額及びその残高
特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

（単位：円）

科　　目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
百周年記念基金				
預金	0	0	0	0
合　計	0	0	0	0

3 基本財産及び特定資産の財源等の内訳
基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。

（単位：円）

科　　目	当期末残高	(うち、指定正味財産からの充当額)	(うち、一般正味財産からの充当額)	(うち、負債等に対応する額)
基本財産				
文庫書籍	1,000,000	(1,000,000)	(0)	－
預金	3,000,000	(0)	(3,000,000)	－
小計	4,000,000	(1,000,000)	(3,000,000)	－
百周年記念基金				
預金	0	(0)	(0)	－
特定資産小計	0	(0)	(0)	－
合　計	4,000,000	(1,000,000)	(4,000,000)	－

正味財産増減計算書に対する注記

1 消費税の会計処理
消費税は税込み方式を採用している。

2 関連当事者との取引
関連当事者との取引の内容は、次のとおりである。

属性：本多理事との親族	法人等の名称：本多洋子	住所：東京都豊島区巣鴨4-35-4
議決権の所有割合：なし	関係内容：なし	取引の内容：不動産の賃借
		取引金額：年間60,000円

収支計算書に対する注記

1 資金の範囲
資金の範囲には、基本財産及び特定資産を除く現金、預金、未収入金、前払費用、前受金、未払費用を含めている。なお、前期末及び当期末残高は、下記2に記載するとおり

2 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

（単位：円）

科　　目	前期末残高	当期末残高
現金	146,559	166,873
預金	5,003,484	5,012,481
合　計	5,150,043	5,179,354
前受金	25,000	0
未払金預り金	0	0
合　計	58,000	0
次期繰越収支差額	5,340,521	5,179,354

監　査　報　告　書

一般財団法人**本多流生弓会**

理事長　　本多　利永　殿

一般財団法人**本多流生弓会** 定款第12条の規定により、令和5年2月5日に経理担当理事から提出された、令和4年の収支計算書、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録について、関係書類を監査した結果、その内容は適正なものと認めます。

以上を証明し、記名捺印して監査報告とします。

令和5年2月5日

一般財団法人**本多流生弓会**

監事　　飯塚　誠一

監事　　青江　純平

令和5年 収支予算書（資金ベース）

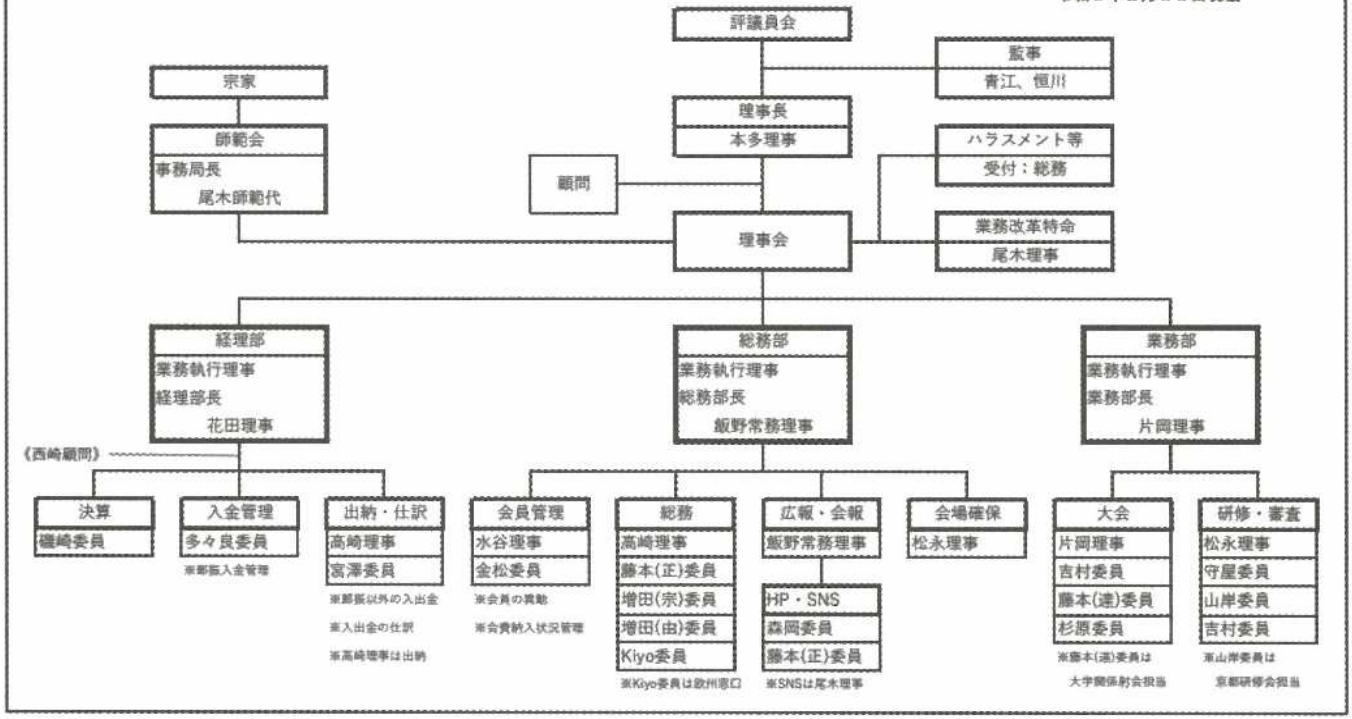
令和5年1月1日から令和5年12月31日まで

（単位：千円）

科目	予算額A	R4決算見込	前年度B	差異A-B	備考
Ⅰ 事業活動収支の部					
1 事業活動収入					
財産運用収入	2	2	2	△ 0	
基本財産利息収入	2	2	2	0	
特定資産利息収入	0	0	0	0	
その他利息収入	0	0	0	△ 0	
会費収入	1,320	1,294	1,467	△ 147	
受取年会費収入	1,300	1,271	1,443	△ 143	
受取入会金	20	23	24	△ 4	
受取寄付金	5,000	13	0	5,000	
寄付金収入	5,000	13	0	5,000	100周年寄付金目標額 ：5,000千円
事業収入	2,986	916	1,215	1,771	
事業大会収入	1,284	87	336	948	記念事業（祝賀会）見込収入 ：1,000千円
研修会収入	504	694	735	△ 231	
広告料収入	65	50	50	15	
記念出版物収入	1,065	24	24	1,041	本多流叢書販売見込収入 ：1,000千円
審査料収入	38	24	48	△ 10	
物品頒布収入	30	37	22	8	
雑収入	0	0	0	0	
事業活動収入合計	9,308	2,225	2,684	6,624	
2 事業活動支出					
事業直接費支出	7,951	1,722	2,185	△ 234	
当期商品仕入高	0	0	0	0	
販売諸経費	29	0	9	20	
会場使用料支出	213	191	349	△ 136	師範会交通費311千円、合宿宿泊費390千円
旅費交通費支出	722	603	835	△ 113	
通信費支出	104	30	227	△ 123	会報等発送委託により減少（印刷製本費が増加）
表彰費支出	90	9	99	△ 9	
射技交歓会費支出	11	6	11	0	
会議費支出	10	3	16	△ 6	
事務用消耗品費支出	64	17	98	△ 34	
諸謝費支出	70	128	96	△ 26	
印刷製本費支出	560	615	367	193	会報、督促、100周年寄付などの発送委託費用含む
電気代支出	18	30	18	0	
建物借料支出	60	90	60	0	
100周年事業予備費	6,000	0	0	6,000	100周年記念事業関連予算を概算計上
管理費支出	337	339	485	△ 148	
評議員・理事会費支出	25	0	53	△ 28	リモート会議の推進により削減
旅費交通費支出	31	0	81	△ 50	〃
通信費支出	3	51	9	△ 6	
会議費支出	0	31	30	△ 30	
事務用消耗品費支出	20	51	50	△ 30	
慶弔交際費	10	0	50	△ 40	
広告宣伝費	55	87	55	0	
租税公課支出	70	71	70	0	
諸経費支出	123	48	87	36	役員変更登記81千円（R5役員改選）
事業活動支出合計	8,288	2,061	2,670	△ 382	
事業活動収支差額	1,020	164	14	1,006	
Ⅱ 投資活動収支の部					
1 投資活動収入	0	0	0	0	
特定資産取崩収入	0		0	0	
2 投資活動支出			0		
特定資産繰入支出	0		0	0	
基本財産繰入支出	0		0	0	
投資活動支出合計	0	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	0	
Ⅲ 予備費支出	0		0	0	
当期収支差額	1,020	164	14	1,006	
前期繰越収支差額	5,505	5,341	4,383	1,121	
次期繰越収支差額	6,525	5,505	4,339	2,186	

組織図

令和５年２月１１日現在



役員等名簿（令和五年二月現在）

（）内は所属支部。新は新任

理事長　本多　利永（宗家）

常務理事　飯野雄一郎（赤門）

理　事　片岡　泰輔（横浜）
花田　篤志（横浜）
尾木　紹学（指月庵）
高崎やよい（東京）
松永　芳枝（洗心洞稽古会）
水谷　旨智（指月庵）**新**

監　事　青江　純平（洗心洞稽古会）
恒川　敦宏（赤門）**新**

評議員　岩田　覚（赤門）
亀岡　英司（信州）
川端　文夫（伊勢崎）
北原　修（東海）
小林　圭（東海）
多々良　茂（赤門）
頓宮　泰彦（岡山）
並木　幸子（洗心洞稽古会）
長野　敦市（地方）
星野　保（洗心洞稽古会）
本多あずさ（東京）
宮崎　英一（上毛）
村上　節子（埼玉東部）

運営委員　磯崎　仁司（指月庵）
金松　貴子（横浜）
杉原　庸介（東京）**新**
多々良　茂（赤門）
田中　俊光（東京）
藤木　達也（赤門）**新**
藤本　正治（指月庵）
増田　宗宏（東海）**新**
増田由紀子（東海）**新**

宮澤　祐子（横浜）
森岡　　徹（関西）
守屋　景子（横浜）
山岸　稔明（関西）
吉村　圭史（洗心洞稽古会）
Kiyo Humm（欧州）**新**

宗家　本多　利永

顧問　勝俣　俊一（埼玉東部）
寒川　泰壽（東京）
西崎　明伸（埼玉西部）
村田　洋子

師範　大島　善春（伊勢崎）
徳田　雅彦（東海）
坂本　武彦（洗心洞稽古会）
杉山　　卓（東京）

師範代　頓宮　泰彦（岡山）
寒川　泰壽（東京）
勝俣　俊一（埼玉東部）
北原　　修（東海）
尾木　紹学（指月庵）
飯塚　誠一（静心洞）

指導員　田中　淳治（関西）
佐藤　史子（関西）
中野　慎輔（東海）
西崎　明伸（埼玉西部）
綾戸　岩雄（洗心洞稽古会）

支部長　川端　文雄（伊勢崎）
飯塚　誠一（静心洞）
宮崎　英一（上毛）
綾戸岩雄（洗心洞稽古会）**新**
寒川　泰壽（東京）

鈴木　千暉（赤門）
中村日出男（東京外語大）
雪島伊乙夫（横浜）
齋藤　秀一（茅ヶ崎）**新**
勝俣　俊一（埼玉東部）
西崎　明伸（埼玉西部）
亀岡　英司（信州）
小林　　圭（東海）
佐藤　史子（関西）
磯崎　仁司（指月庵）
頓宮　泰彦（岡山）
福本　賢一（広島）
John C. Bush（欧州）

■退任

理　事　吉田　隆一（東京）
監　事　飯塚　誠一（静心洞）
運営委員　熊崎　晴人（埼玉東部）
　　斎藤　広美（東京）

顧　問　並木　幸子（洗心洞稽古会）
　　水谷　旨智（指月庵）
　　宿岩　三男（埼玉東部）
　　和田　宣夫（東京）
　　茎田　　実（東京外語大）

会員名簿（令和五年二月現在）

支部順、五十音順

宗家　本多　利永

伊勢崎支部

普通　浅野　浩之
普通　新木　源助
普通　飯塚　勝亮
普通　大島　昭　小目録
終身　大島　善春　奥伝
普通　小保方直行
普通　川端　文夫
普通　下境　郁二　目録
普通　高橋　静夫　目録
普通　武田　節夫

静心洞支部

維持　飯塚　誠一　免許
普通　金子　恒彦　目録
普通　篠原　拓夫
普通　神保　範子
普通　須藤　雅明
普通　髙山　幸子　修学
普通　髙山　光　目録
普通　羽石　幸一　小目録
普通　増山　弘
普通　山田　憲一

上毛支部

普通　奥山　誠治
普通　笠井　信夫
普通　鈴木　康弘　中伝
普通　宮崎　英一
普通　宮崎　順子

洗心洞稽古会支部

維持　青江　純平　目録
維持　綾戸　岩雄　中王
普通　小玉　博之
普通　小山　文夫　中王
維持　坂本　武彦　奥伝
普通　坂本　松枝
維持　高橋かおる　中伝
維持　並木　幸子　中王
普通　服部　昭利　修学
普通　原　幸男　中伝
普通　星野　保　小目録
維持　松永　芳栄　目録
普通　三島　孔明　中伝
維持　吉村　圭史　中伝

東京支部

普通　青山とき子
普通　安達　りえ
学生　阿部隆之介
普通　天野　雅弘　小目録
普通　荒川　桃子

普通　今泉　文雄
普通　大塚　美希
普通　大西　陸貴
普通　大橋　秀治　小目録
普通　岡嶋　惇　小目録
普通　小川香緒里
普通　小沼　康弘
普通　小野田美知
終身　小畑　紘一
普通　鏡　玲子
普通　金子　成人
普通　城戸　晴美　中伝
普通　木村　源輝
維持　櫛田　浩平　中王
普通　小平　稠
普通　近藤　禮之
維持　斎藤　広美　中伝
普通　山藤千代子
普通　下澤　粛公

普通　杉原　庸介　中伝
維持　杉山　卓　奥伝
普通　鈴木　丈雄
普通　鈴木　拓人
普通　世良　禎子
終身　寒川　泰壽　免許
維持　高崎やよい　目録
普通　多賀由美子　目録
普通　田中　俊光
維持　谷津　七重
維持　谷津　正彦
普通　土谷　芽衣
普通　土屋由美子
学校　帝京大学弓道部
普通　寺島　幸子　中伝
普通　仲澤慶太郎
普通　中橋　信子
普通　野中　善裕
維持　長谷川英一

普通　早川　和彦
普通　藤井あまね　初伝
維持　藤井美由紀
普通　保坂　有香
普通　堀　澄雄
維持　本多あずさ
普通　増尾　泰世
普通　増田　恒夫
普通　升谷　衛
普通　松浦　司
普通　萬澤ふくこ
普通　三輪　一貴
普通　森山　邦男　目録
普通　安田　史子
普通　吉川　幸子　小目録
普通　吉田　隆一　小目録
普通　和田　宣夫

赤門支部

維持　天野　寛二
維持　飯野雄一郎　目録
普通　岩田　覚
普通　大嶋　恭彦　初伝
普通　岡本　和年
普通　角谷　昌則　修学
普通　川崎伸太郎
維持　川村　大　中伝
維持　小林　暉昌
普通　ジュリアン・ルグラン　中伝
普通　鈴木　千輝
維持　高山　裕
維持　多々良　茂　中伝
維持　恒川　敦宏　初伝
普通　寺部　孝平
維持　那須　弘平
維持　濵部　勝
維持　藤本　達也
普通　宮下　敏行
維持　宮本　和子
普通　横山　明彦

東京外語大支部

終身　榎本　英雄
維持　大坪　憲生
普通　北原　町子
維持　栗林　佳紀
普通　小宮山浩正　中伝
普通　渋谷　佳行
維持　白井　春海
普通　関口　守彦
普通　高谷　清泉
普通　高柳　恒忠
学校　東京外国語大学弓道部
維持　中村日出男
維持　西田　紀男
普通　細川　友二
維持　細野　桂司
維持　村上　英俊
普通　森　厳　中伝
普通　陸　秀雯

横浜支部

普通　石井富士美
普通　伊藤佐江子
維持　片岡　泰輔　目録
維持　金松　貴子　目録
普通　許　博堯
普通　瀧川　史子
普通　チャールズ・A・ハーパー　中伝
普通　永松布美子
普通　中村　千絵
普通　羽賀　久人　初伝
普通　花田　篤志　中伝
普通　日高　恭吾

普通　益田　禎祐
普通　宮澤　祐子　修学
普通　守屋　景子
普通　山田　一雅
普通　山田　勝　中伝
終身　雪島伊乙夫　目録
普通　渡辺　正幸

茅ヶ崎支部

普通　臼井　道太郎
普通　江尻　富雄
普通　齋藤　秀一
普通　水島　実幸

埼玉東部支部

普通　有沢　久嗣
普通　伊藤三喜夫　中伝
終身　勝俣　俊一　免許
普通　熊崎　晴人　修学
普通　篠崎　英治　修学
普通　杉山　浩子　中伝
普通　栂野　登　小目録
普通　星野　昌行　中伝
普通　細谷　恵美　修学
普通　水島　恒郎
維持　村上　節子　中伝
普通　宿岩　三男　修学
普通　山口　賢一　修学
普通　山本　管子　修学

埼玉西部

普通　秋山貴美雄　目録
普通　石川　宏
普通　小川　雄三
普通　勝山　彩
維持　櫻井　馨　修学
普通　関口　二郎
普通　高橋　典子　小目録
普通　直井　良一
終身　西崎　明伸　中王
普通　西嶌　紘一　修学
普通　野瀬　武博　中伝
普通　幡谷　俊一
普通　星谷　哲哉
普通　山本　絵美

信州支部

普通　笠井　政一
維持　亀岡　英司
普通　深澤　一正
普通　山本千比呂
普通　依田　晴樹

東海支部

普通　青島　進　修学
普通　赤塚　正子　修学
普通　石原　千瑛

普通　市田　哉代
普通　伊東　直紀
普通　大村三恵子
普通　小木曽　浩
普通　奥村　秀喜　修学
普通　小栗　一浩
普通　加藤　和俊
普通　加藤　潤　修学
普通　ガラニク・ドリアン　修学
普通　河合　真歩　修学
維持　北原　修　免許
維持　北山　紹玄　修学
普通　黒田　昌代　修学
普通　小塚　亮
維持　小林　圭　目録
普通　近藤　哲量
普通　榊　武志　小目録
普通　崎山　純子

普通　鈴木　晴雄
普通　竹田　法子
普通　谷口　洋子　修学
維持　土屋　志津　目録
維持　土居　英樹　中伝
普通　道家　義将　修学
終身　徳田　雅彦　奥伝
普通　中島　幸子
終身　中野　慎輔　中王
普通　船崎　光男　修学
維持　増田　宗宏　目録
普通　増田由紀子　小目録
普通　森　祐太　修学
終身　吉田　初美　中王
普通　渡辺　充　初伝

関西支部

普通　阿部ゆかり
維持　井藤　良子　中伝

維持　因藤　常子
普通　枝並　正容　中伝
普通　大原　吾朗
普通　岡田　章
普通　川口　敏江　小目録
普通　河野　寿一　中伝
普通　黒田　豊幸
普通　小林　優子　修学
維持　佐藤　史子　中王
普通　高島　淳
維持　田中　淳治　中王
普通　辻井　大明　修学
普通　堤　毅
普通　日高　颯太
維持　村山　光弘　修学
普通　森岡　徹　小目録
維持　山岸　稔明　目録
普通　山下　博美　中伝
維持　横沼由美子

普通　吉本　清巳　日録

岡山支部

普通　石北　一海
普通　井出　一志　小日録
普通　末田　順子
普通　曽我井愛次郎　修学
普通　高谷　文也　修学
普通　高橋　雅彦
普通　寺田　早岐
維持　頓宮　泰彦　免許
普通　中谷　淳平
普通　西藤　魁
普通　迫　哲夫
普通　羽柴　裕

広島支部

普通　新宅　孝博
普通　福本　賢一
維持　長門美登利
普通　吉海　邦博

指月庵支部

維持　磯崎　仁司　中伝
普通　上野山　誠　中伝
維持　尾木　紹学　免許
維持　加藤　和真　中伝
維持　中村　亮太　小目録
維持　藤本　正治　小目録
維持　松前翔太郎　中伝
維持　水谷　旨智　中王
維持　脇本　紹久

地方会員

維持　菊田　幸志　目録
普通　洪　子甯
普通　黄　威堯
普通　太古　俊男
普通　高橋　佑弥
普通　長岡　強
普通　長野　敦市
普通　花村　治朗　初伝
普通　花村　千恵
維持　飛鷹　茂和　中伝
維持　丸岡　隆芳
普通　村木　賢春　修学
普通　森　幹雄

欧州支部

■Austria

普通　Alexander Kreil　小目録
普通　Beatrix Kromp　初伝
普通　Christian Ofenbauer　小目録
普通　Christian Tucek

修学

普通 Diethard Leopold

小目録

普通 Ingeborg Frischengruber-Trimmel

中伝

普通 Kitti Menczel

普通 Minori Zemann

修学

普通 Petra Zdarsky

初伝

普通 Shen-je Chang

■France

普通 Anne-Marie Camerini

修学

普通 Bernadette Moissette

初伝

普通 Claire Touret

中伝

普通 Didier Labaille

修学

普通 Florimond Ployette

修学

普通 Gilles Maucout

初伝

普通 Guy Collet

普通 Jacques Normand

目録

普通 Jean Jacques Robertine

普通 Lida Lin

普通 Marie-Lin Robertine

普通 Michelle Postel-Vinay

初伝

普通 Olivier Schann

普通 Pascal Margueritat

修学

普通 Pierre Carne

普通 Pierre Helardot

初伝

普通 Pierre Quinton

普通 Remi Ha Minh Tinh

小目録

普通 Thierry Barbier

中伝

普通 Veronique Perdriel

中伝

■Germany

普通 Achim Hassler

普通 Beate Dorst-Lehmann

中伝

普通 Christoph Heiduschke

修学

普通 Dirk Conrad

初伝

普通 Elene Sylvia Sieglen

初伝
普通 Erik Eisenkolb
普通 Horst Riechers
普通 Mario Richter
普通 Martin Lenz
修学
普通 Matthias Obereisenbuchner
普通 Michael Lehmann
中伝
普通 Nadine Wolfsteiner
中伝
普通 Naoko Otani Heiduschke
中伝
普通 Reinhold Volkert
中伝
普通 Stefan Brendel
小目録
普通 Thomas Kerscher
普通 Ulrich Grussendorf
修学

■Poland

普通 Adam Kuziow
初伝
学生 Adam Stepien
学生 Agnieszka Gradecka
普通 Aleksandra Salamon
普通 Amadeus Ostaszewski
初伝
普通 Andrzej Nawrocki
初伝
普通 Bozena Doszyn
初伝
学生 Dominika Wawer
普通 Emilia Iwaniuk-Rychlowska
中伝
普通 Filip Benedykczak
修学
普通 Helena Eva Pawlowska
修学
普通 Iga Ostaszewska
学生 Jan Rychlowski
初伝
普通 Janusz Surma
小目録
普通 konrad konieczny
初伝
学生 Karolina Wiacek
普通 Liwia Maslanka
普通 Magdalena Fedorowicz Jackowska
初伝
普通 Kacper Florianski
普通 Katarzyna Ozog

普通 Maciej Gornicki
学生 Magdalena Gradalska
普通 Michal Zaremba
普通 Monica Syslo
学生 Olga Zwalska
普通 Piotr Podobinski
普通 Radoslaw Laszkowski
初伝
普通 Urszula Wojtowicz
普通 Witold Fedorowicz Jackowski
中伝
普通 Witold Rychlowski
学生 Zofia Forys

■United Kingdom

普通 Akos Nagy
中伝
普通 David Findlay
普通 Francesca Leung
初伝
普通 Giulia Coccoli
普通 Jennifer Bernstein
普通 Jan Urbanowski
修学
普通 Jeanette Payne
中伝
普通 Jeffrey Thomas Humm
小目録
普通 John Carder Bush
目録
普通 Jolanta Rukas
修学
普通 Kasheminder Singh Sambhi
普通 Kiyo Yamasaki-Humm
小目録
普通 Yat Kwong Leung
初伝
普通 Lisa Vuerich
普通 Matthew Hensby
普通 Naomi Iijima
初伝
普通 Nicholas Pratt
普通 Paul Enterkin
普通 Ralph Raja Shandilya
普通 Sabrina Recoules
修学
普通 Siu Wai Ying
初伝
普通 Stephen Walker
修学
普通 Sue Leung
初伝
普通 Vicky Tsai
普通 Vincent Leung

■Russia

普通　Diana Zhukova

普通　Rutsam Khusainov

普通　Sergei Lazo

本多流生弓会公式ＳＮＳの御案内

令和三年に本多流生弓会公式ＳＮＳとして、facebook と Instagram サイトを開設しました。

■facebook（フェイスブック）

令和四年十二月現在、facebook には五〇〇名の登録があり、本多流生弓会会員限定のグループには一〇〇名を超える会員が参加しています。本多流の広報媒体として、行事案内はもとより、支部活動の報告や、会員相互の情報交換、メッセージ機能を活用して会員同士の連絡に活用されています。

■Instagram（インスタグラム）

Instagram には一四〇〇名のフォロワーがおり、流祖本多利實翁、二世宗家や、流祖の弟子である阿波研造氏の射影を投稿しご覧頂いています。動画や写真などを通じて、若い人々に本多流を紹介する役割を果たすとともに、メッセージ機能を活用して、各種連絡などに活用されています。先達の射影を観て、弓の学びを深めて頂ければと思います。

各種申込書

常務理事　飯野　雄一郎

各種申込書を改訂し令和四年版としました。ご利用にあたっては本会報からA4版にコピーするか、本会公式ホームページからPDF形式のファイルをダウンロードしてください。MS-EXCEL形式のファイルをご希望の方は電子メールにてinfo@hondaryu.netまでお問合せください。

■入会の流れ

申込用紙に必要事項を記載し総務担当理事へ郵送または電子メールにてinfo@hondaryu.netまでお送りください。総務担当理事の審査を経て、総務部長経由で理事長に推薦し、理事長の承認を以て入会許可となります。入会が許可されましたら、入会金および年会費の納入をお願いします。入金確認後、会員名簿に登録し、会員章と直近の会報をお送りします。

■入会金および年会費

会員種別ごとの入会金、年会費は次のとおりです。なお、維持会員・終身会員には、原則として普通会員として入会してからの移行となります。

種別	入会金	年会費
①普通会員	二、〇〇〇円	三、〇〇〇円
②維持会員	—	七、〇〇〇円
③終身会員	—	満七五歳以上で三万円一括納付
④学生会員	一、〇〇〇円	一、五〇〇円
⑤名誉会員	—	—
⑥学校会員	—	五、〇〇〇円／校

■印可審査申し込みの流れ

年二回、行事案内の申込書を郵送または電子メールでお送りしています。受審を希望する行事および希望する印可種別をご記入し返送ください。時期をみて師範会事務局から印可審査の手続きについてご案内を差し上げます。

《普通会員・維持会員・終身会員・学生会員・名誉会員》

※該当の項目に○（初めて入会される方は普通会員または学生会員が原則です）

入　会　申　込　書

一般財団法人　本多流生弓会　御中

以下のとおり入会を申し込みますので、入会審査をお願いいたします。
入会審査合格通知後、入会金および初年度年会費を振り込みます。

（フリガナ）			性　別
申込者氏名			男　女
生年月日	年　月　日生（満　歳）		
住　所　等	〒		
	電話		
	Fax		
	携帯電話		
	電子メールアドレス		
	行事案内等の連絡手段（いずれかにチェック）　□電子メール　□郵送		
	所属予定支部名		
勤務先（学校）			
弓　歴			
紹介者意見			

年　月　日

申込者　㊞

紹介者　㊞

法人処理欄	（総務担当）	（出納担当）	（入会金受付）
	（会員整理番号）		

※記入いただいた個人情報は行事案内や会報送付など本会の活動にのみ使用します。　（令和4年版）

学校会員入会申込書

一般財団法人　本多流生弓会　御中

以下のとおり入会を申し込みますので、よろしくお取り計らい願います。

(フリガナ)		
申込団体名		
団体代表者	(フリガナ)	
	氏　名(役職)	
連絡担当者	(フリガナ)	
	氏　名(役職)	
	電話	
	Eメール	
団体連絡先	〒	
	電話	
	FAX	
	Eメール	
	携帯電話	

年　　月　　日

(団体名)　　㊞

(団体代表者)　　㊞

法人処理欄	(総務担当)	(出納担当)	(入会金受付)
	(会員整理番号)		

※記入いただいた個人情報は行事案内や会報送付など本会の活動にのみ使用します。

(令和4年版)

印　可　審　査　申　込　書

一般財団法人　本多流生弓会　御中

以下のとおり印可審査を申し込みますので、よろしくお取り計らい願います。

<table>
<tr><td colspan="2">（フリガナ）</td><td rowspan="2">生年月日</td><td rowspan="2">年　月　日</td></tr>
<tr><td>氏　名</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">住　所</td><td colspan="3">〒</td></tr>
<tr><td>電話</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>種　別</td><td colspan="3">免許　中王　目録　小目録　中伝　修学　初伝　無指定　※○印をつける</td></tr>
<tr><td>弓　歴</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>推薦者</td><td colspan="3">（推薦理由）

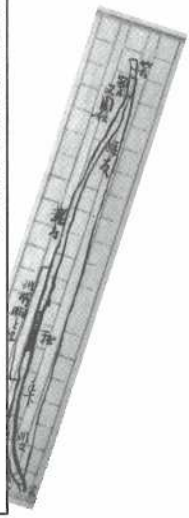
（推薦者）　㊞</td></tr>
<tr><td colspan="4">年　月　日
（申込者）　㊞</td></tr>
</table>

法人処理欄	審査担当	出納担当	審査料受付	会員整理番号

※記入いただいた個人情報は行事案内や会報送付など本会の活動にのみ使用します。　（令和4年版）

『射法正規』第二版　頒布開始

本多利實翁没後百年射会（2017 年）の際に制作した初版が在庫切れになっておりましたが、このたび第二版が完成しました。この機会にぜひお求めください



・多くの要望に応え文字サイズを拡大！
・再び利實翁の原稿に基づき校訂！
・初版には無い利實翁直筆の弓の絵を収録！

■文庫サイズ　150 ページ　（頒布価格　送料込み　¥1,000 円）

■**お申し込み方法**

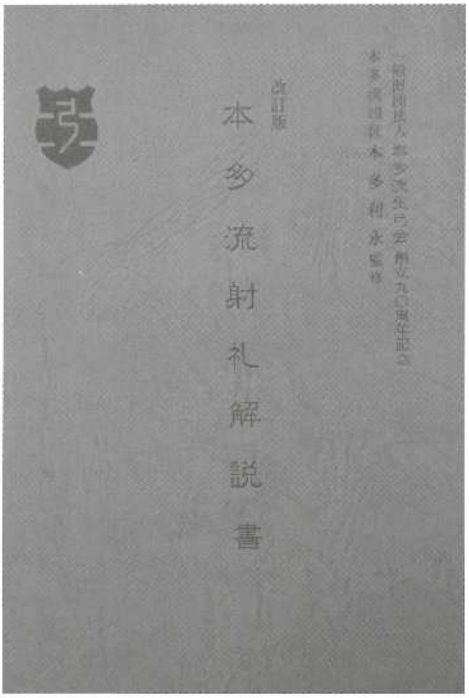
総務担当または電子メール info@hondaryu.net までご一報ください

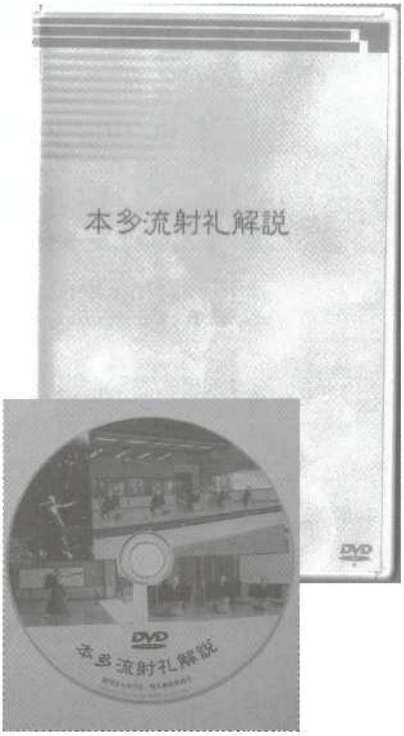
会員限定頒布です。転売目的での購入を禁止します

本多流射手必携

本多流射礼解説書＆射礼解説 DVD

（本多流四世　本多利永　監修）





■本多流射礼解説書　（平成 26 年 9 月改訂版）

平成 18 年 4 月初版発行。本会創立 90 周年事業で改訂したものです

（頒布価格　送料込み　¥1,500 円）

■本多流射礼解説 DVD　（平成 18 年度制作）

文字では分かりにくい動作を映像で学べます　増刷出来

（頒布価格　送料込み　¥1,500 円）

■お申し込み方法

総務担当または電子メール info@hondaryu.net までご一報ください

非会員にも頒布します。転売目的での購入を禁止します

綿密な考証を経て、970 枚の写真を含む 930 ページで綴る

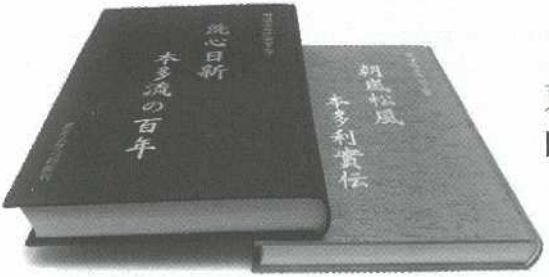
本多流正史

上巻 朝嵐松風 本多利實伝

"弓聖"と称えられ、近代弓道改革の第一人者であった
本多利實の足跡をきめ細かく辿る。

下巻 洗心日新 本多流の百年

大正・昭和・平成の著名な弓人多数を登場させながら、
利實没後百年の一門の歩みをイキイキと描く。



東京大学弓術部
師範 小林暉昌 著

購入ご希望の方は、本体価格に送料を加えた金額をお振り込みください。

振込手数料は、各自でご負担ください。

振込先は、次の通りです。

	本体価格	送料	計(税込)
上巻のみ	4,500 円	370 円	4,870 円
下巻のみ	4,500 円	520 円	5,020 円
上下巻共	9,000 円	890 円	9,890 円

銀行から	銀行名	ゆうちょ銀行
	店　名	○二九（ゼロニキュウ）店 店番：029
	口　座	当座　0087087
郵便局から	郵便振替口座名	初代師範本多利實翁 没後百年記念事業委員会
	口座番号	00220-7-87087

お問い合わせは、Mail: tibo@jcom.home.ne.jp、電話：080-5474-3899（宮下）まで。

東京大学弓術部・赤門弓友会　〒113-0003 東京都文京区本郷 7-3-1 育徳堂

矢師
銘　三郎
弓具一式
東京
長谷川弓具店
〒108-0073 東京都港区三田四丁目八－三四
電　話：(〇三)三四五一－七四四〇(代)
FAX：(〇三)三四五一－七〇九九
振替番号：00130－2－76
http://hasegawa-kyuguten.com
営業時間　九時三十分～十九時〇〇分
第二・四日曜日定休

弓道を極めるためのこの一張

竹弓は『江戸成』『京成』『薩摩成』と産地によるそれぞれの形状があり、弓師は藩の伝統的射法に適した成を作ってきました。この伝統を受け継いできた弊社の竹弓は『江戸成』を基調としており、江戸弓作りの家伝・口伝が現在も脈々と息づいています。

小山作（四枚打）

初めて竹弓を持つ方にも優しい、裏反りを抑えた4枚打竹弓。
（並寸10～13kg/伸寸11～14kg）

清一郎

扱いやすさを重視した設計となっています。竹弓の調整・管理法習得に最適です。内竹に煤竹を使用。

雅澄

竹弓使用経験をお持ちの方向けに扱いやすさと弓の冴えを両立したモデル。内竹に煤竹を使用。

小山雅司

弓の冴え、矢飛びの性能を追求した上級者向けモデル。内竹は優美な煤竹を使用。

製品の仕様は改良などの為、予告なく変更する場合があります。

株式会社 小山弓具
http://www.koyama-kyugu.com

神田本店 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-6 TEL.03(3256)2001㈹ FAX.03(3256)2067 定休日／毎週月曜日
埼玉支店 〒364-0024 埼玉県北本市石戸5-127 TEL.048(592)7100 FAX.048(591)7767 定休日／毎週月・火曜日
藤沢支店 〒251-0016 神奈川県藤沢市弥勒寺2-5-5 TEL.0466(54)8791 FAX.0466(54)8792 定休日／毎週月・火曜日

ビギナーから高段者まで。

弓はグラス弓、カーボン弓、本格竹弓、四寸・八寸伸も。
矢はジュラルミン製、カーボン製、竹矢まで。

豊富なラインナップから自分に適した弓具に出会えます。

道着なら
SSから7Lまで

弾も豊富に
取り揃え

●グラス弓
◎練心　◎直心I、直心II、直心III　◎葵
◎翔　◎橋

●カーボン弓
◎清雅　◎直心I、直心II　◎凛　◎粋　◎仁

●ケブラー弓
◎瑞雪

●竹弓
◎小倉紫峯　◎横山黎明　◎植見蔵吉
◎南嶋寿宝　◎毛利 文　◎肥後三郎
◎一燈斎 等

●矢
◎ジュラルミン製　◎カーボン製　◎竹矢

通販・店頭で販売しております。お気軽にお問い合わせください。

全日本弓道具協会会員

アサヒ弓具
ASAHI ARCHERY INC.

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-23-3
TEL.03-3986-2301 FAX.03-3986-2302
http://www.asahi-archery.co.jp
Email:asahi@asahi-archery.co.jp

[営業時間]
月～土:10:00～19:00、日・祭日:10:00～17:00
火曜日・水曜日：定休日
JR山手線「大塚駅」南口より徒歩5分
地下鉄丸の内線「新大塚駅」より徒歩5分
都電荒川線「向原駅」より徒歩1分

店舗は1階、バリアフリーですので、
駐車場からもスムーズにご来店になれます。

心を磨く、技を磨く、高原合宿

信州野辺山高原　洗心弓道場

帝産ロッヂ

○ 施設概要

近的弓道場…18 人立 1 箇所　床暖房完備
12 人立 2 箇所　内 1 箇所床暖房完備
遠的弓道場…6 人立 1 箇所
※ 弓道場は床暖房を備え、冬期合宿にも対応
宿 泊 施 設…収容人数 350 名、大浴場、食堂　全館無料 WiFi
併 設 施 設…スケートリンク、剣道場、

○ 交通のご案内

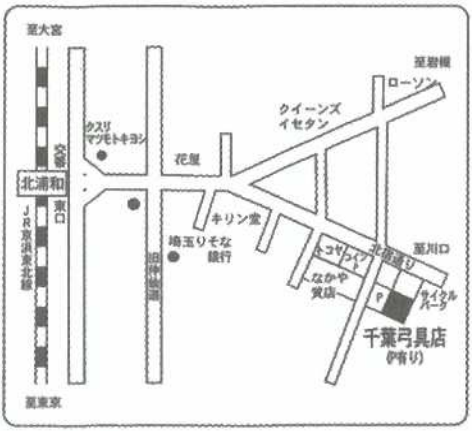
〒384-1304　長野県南佐久郡南牧村大字板橋 1003
車/中央道「須玉 IC」より約 30 分
公共交通機関/JR 小海線「野辺山駅」より徒歩約 10 分

○ ご予約・お問い合わせ

TEL 0267-98-2861　FAX 0267-98-2866
E-Mail info@teisanlodge.com
ホームページ http://www.teisanlodge.com

全日本弓道具協会会員

千葉弓具店



御弦師　千葉知之
　　号幸弘

〒330-0073
さいたま市浦和区元町3丁目3番4号
TEL 048(871)0405
FAX 048(871)0407
JR京浜東北線北浦和駅東口下車
徒歩3分

(定休日)　毎週　水曜日
(営業時間)
平　　日　午前10時～午後7時
日曜・祭日　午前10時～午後6時

弓具一式

谷口弓具店

御弦師　渡辺　正幸

〒240-0005
横浜市保土ヶ谷区神戸町１１－１
TEL・FAX　０４５（３３１）２７４８

原稿募集のお知らせ

編集部

会報に掲載する原稿を随時募集しています。連載企画については当面の間、会報編集担当からお願いする予定ですが、これに限らず、書いてもいいかな、と思う方はぜひご一報をお願いいたします。折り返し原稿フォーマットをお送りし、掲載までのスケジュール等をご案内します。原稿締め切りは例年十二月末です。

■連絡先・原稿送付先

会報編集担当　飯野雄一郎

郵送：〒一二四―〇〇〇六

東京都葛飾区堀切三―八―十三―三〇五

電子メール：　xxuni24832@yahoo.co.jp

■原稿の内容

弓道に関する内容なら何でも結構です。本格派の研究論文から日常のちょっとした発見まで、内容の濃さやボリュームは問いません。

また、各支部の稽古会日程や地域ならではの弓道イベントの紹介などでも結構です。

ただし、流派弓道の会報ですので、当流以外を対象とした内容であって、かつ大部にわたる場合は掲載についてご相談させていただく場合がありますのであらかじめご了承ください。

■広告

懇意にしている弓具店や合宿に利用できる弓道場併設の宿泊施設を会員の皆さまに紹介してみませんか？広告料は一ページ版で一〇、〇〇〇円、半ページ版で五、〇〇〇円です。

編集後記

今号は創立一〇〇周年記念号として、特別編集でお届けしました。歴代宗家の著作や創設の経緯など、会員の皆さまにぜひ知っておいていただきたいテキストを収録しました。江戸幕府瓦解とともに一時は消滅の危機に瀕した日本弓道の復活を志し、新時代に応じた射法、すなわち「正面に打ち起こして大三を取る」射法を創始した本多利實翁の遺志を継ぐ本会は、本多流弓道の研究・普及と、弓道精神に基づく人格の陶冶を目的に活動を世界に広げています。会員諸氏の当流との関係には濃淡はあろうかと思いますが、今号により「伝統を受け継ぐ」大きな流れの中にいる幸せを感じて頂ければ幸いです。

役員等名簿についてですが、個人情報保護の観点から、時代の要請にあわせて住所等の個人情報の掲載を廃止しました。どうしても連絡を取りたい場合は、日頃懇意にしている理事・運営委員までお問合せください。またこれまで会員名簿は別冊とし、三年ごとを目安に発行していましたが、今回から情報を絞って三年ごとに会報本体に収録することとしました。

欧州支部との連携を強める観点から、欧州支部会員の氏名はアルファベット表記としています。

会報は会員の皆さんのものです。ぜひ皆さんと相互に協力していい誌面を作りたいと思っておりますので、原稿執筆のご一報をお待ちしています。

（飯野・多々良）

本多流印可定め書

道を求め当流に志すを以て初めとし　稽古に勤め射学を修しその技壮
道半ばなれど射品生じ道の蘊奥に至らむとし　当流の隆盛に心する者には印可すべし

一、初　伝　入門　当流の修行を志したる者
二、修　学　射技骨法に叶ひつつある者
三、中　伝　骨法を体得し射形整ひし者
四、小目録　味はひを知り気象合一成りし者
五、目　録　心技自師賢覚の境に至りし者
六、中　王　清澄円満の境涯に達せし者
七、免　許　精心感通し品位生じし者
八、奥　伝　射品生じ道の蘊奥に至りし者

本多流四世　宗家　本多利永

表紙の題字「会報」は、本多利永四世宗家のご揮毫です。

令和五年二月
発行者　一般財団法人　本多流生弓会
〒一七〇―〇〇〇二　東京都豊島区巣鴨四―三五―四
（連絡先）〒一二四―〇〇〇六　東京都葛飾区堀切三―八―十三―三〇五
飯野　雄一郎方　〇三―三六九五―一八七一
一般財団法人　本多流生弓会・郵便振替口座　〇〇一七〇―四―二二七七三
一般財団法人　本多流生弓会ホームページ　http://www.hondaryu.net

2023年3月吉日

関係大学OB・OG会　御中

一般財団法人　本多流生弓会
常務理事　飯野雄一郎

拝啓　平素は本会主催の大学ＯＢ・ＯＧ親善射会にご参加いただき、厚く御礼申し上げます

さて、今年度の会報が完成しましたので、お手元にお届けいたします。去る２月１２日、４年ぶりに大学ＯＢ・ＯＧ親善射会を開催することができました。いまだ新型コロナウイルスの影響もあって、参加校はコロナ前より減少しましたが、春の一日を楽しく過ごしました。

また本会では学校会員制度を設けております。この機会にぜひ入会をご検討いただき、本会へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。入会お申込み・お問い合わせは以下のメールアドレスまでお願いいたします。
〇本会公式メールアドレス　info@hondaryu.net

末筆ながら、依然として新型コロナウイルスの影響が継続しております。皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。

敬具

料金別納
郵便

340-0042
埼玉県県草加市学園町1－1

獨協大学弓道部弓友会 御中

一般財団法人
本多流生弓会

事務局 〒124-0006
東京都葛飾区堀切3-8-13
パシフィックパレス堀切菖蒲園305
飯野 雄一郎
TEL：03-3695-1871